
遊戯王～光の御使い達～

かにみそ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王「光の御使い達」

【Nコード】

N7978K

【作者名】

かにみそ

【あらすじ】

ごく普通の遊戯王プレイヤーの朝霧恭介はある日何故かGXの世界に来ていた…。

現実からのトリップなので主人公の使用カードは現在あるカードからになります。そのため原作ではまだ出てないカードやシンクロ召喚が存在するの
で注意です。

第一話「入学試験」（前書き）

これが初投稿になるので間違い等あればご指摘お願いします。

誤字等は注意していますが発見しても気にしないでください。

現在主人公のオリカは考えていません。

気ままに更新ですがどうか温かく見守ってあげてもらえたらと思います。

第一話「入学試験」

第一話「入学試験」

ベットから落ちて頭を強く打ったのか、それとも悪いものでも食べたのか……。
起きてからずっと同じことを考えていた。

ある朝起きたらそこは遊戯王の世界だった。元の世界にいた時はネットでよく見かけた話であり、現実ではあり得ない話だと笑っていたことすらあった。
そんなことが現実に、それも自分の身に起きているのだ。
普通はそんなことが起きたらパニックにならないわけがなく、俺ももちろん例外ではなかった。

「……ねえ恭兄、聞いてる？恭兄？」

「昨日の夕方に食べたカキフライが原因か？それとも夜に食べたカツプラーメンか？味噌か？味噌味なのが駄目だったのか？」

「……恭兄？もしも〜し」

「塩派なのに味噌に手を出した罰なのか？味噌を選んだ俺が間違っていたとでも……」

「……人の話を聞け恭介エー!!」

会場内に響き渡るほどの声で怒鳴られた。周囲がこちらを睨んでいる

「あゝ耳鳴りが……。すみませんでした申しわけありませんでした許して下さいリン様」

隣の銀色の髪を髪留めでまとめている小柄な少女は俺の妹のリン。何故か俺と同じくこの世界に来ていた。

俺が謝罪するとリンは呆れたように溜め息を吐いた。話を聞かない俺が悪いとはいえず隣にいるのにそんな大声出さんでも……。おかげで耳鳴りが止まない。

「恭兄、どうする?」

どーするもこーするも

「まずはとりあえず入学試験受けてアカデミアへ入る。それから考えてもなんとかなるだろ。その前に状況確認だ」

まずはお互いにデッキを確認。ほとんどのデッキはなかったが幸いにも主に使っていたデッキは残っていた。

次に所持カード。これは主にデッキを改良するためのサイド用カードがあった。

「うぐっ……《スキルドレイン》と《王宮の弾圧》が無くなって

る・・・」

「この世界で強力なメタカードは使うなどの神からの有り難いお告げだ」

実際こんな世界でスキドレ弾圧なんかが満載のデッキを使ったら勝てる奴なんてそういないんじゃないか？

それでもライフは4000だから付け入る隙はあるだろうが・・・。メタなんかしてないでお互い楽しめってことだろう。

だがそれでも一つ問題があった。

「なんでチューナーとシンクロモンスターはあるわけ？」

それは一番疑問に思っていたことだった。

「なんでだろうな・・・融合の代わり？」

普段融合デッキなんぞ組んでなかったからと思うとあまり違和感がない。

「ともかくカードがある以上使えないわけではないだろうが自重すべきだろうな。」

流石にあんな高性能カードを乱用するわけにはいかないだろう。

「シンクロについてはまた後で考えよう。俺達でルールを決めるまです使わないことにする」

「うん良いよ。それとあと一つだけ聞きたいんだけど」

妹が言おうとしていることはわかっていた。ここまで話をしてくて確認することなんてあと一つだけだ。

「俺達が現実にはいた時点での制限だ。確かに天使の施しや強欲な壺は使いたいがな」

あと世界観的にイケナイカードは駄目な。ラビエル禁止。

「私のエースモンスターが・・・」

何故かデッキに入ったままだったが幻魔は使っちゃいけないだろう。ダメ、ゼツタイ。

この世界に影響があるかどうかなんてわからないが危険は排除しとくべきだろう。二重の意味で。

「今私の悪魔デッキが弱体化したこと喜んだでしょ」

何故かバレたが気にしないことにしよう。

「そろそろ恭兄の番じゃない？」

いろいろ話をしていたら出番が近づいてきたらしい。・・・ん？まてよ・・・。

「お前いつの間に試験終わったんだ？」

俺は疑問に思ったことを尋ねた。

「最初に恭介が回想してる時に。気が付いたら既に教壇にいた。い

きなり始まったからカードを確認する余裕がなかった」

全然気付かなかった。いったいどれだけ回想に集中していたのだろうか。

だがそれでも勝てるコイツは流石と言っべきだろう

「次、受験番号101番、前へ」

呼ばれた。そういえば俺そんな成績悪かったっけ？

「普段から筆記テストに全力を出さない性格が反映されたんでしょ」

そうなのか？疑問に思いつつ俺は教壇に上がった。

「受験番号101番の朝霧恭介です。お願いします」

「うむ。かかってきなさい」

お互いにディスクを展開させる

「デュエル!!」

「先攻は先生が貰うぞ！ドロー！」

教師がドローしてる時に手札を見る。これは相手が伏せなければいけないか？

「先生は《ゴブリン突撃部隊》を召喚、《デーモンの斧》を装備してターンエンドだ」

いきなり攻撃力3300のモンスターが出てきた。アイツは攻撃したら守備になるが、3300なんて容易く超えられる訳がない。1000アップって強いな」

「俺のターンです。ドロ」

引いたカードを見て相手の場を見る。確かに強いが伏せカードが無いのが残念だったな先生

「俺は手札から《墮天使ナース・レフィキュル》を召喚します」

全身包帯で包まれた天使を召喚する。明らかに天使の見た目ではないが。

「そして手札から魔法カード《ソウルテイカー》を発動。相手モンスターを破壊し、相手のライフを1000回復させます」

ゴブリン達の前に現れた腕が彼らの魂を奪っていった。

「そしてレフィキュルの効果。相手のライフ回復をバーンに変える」

「ぐはっ！」

教師

LP3000

これは俺の気に入ってるお手軽コンボだ。4000ライフのこの世界じゃあ一枚で単体除去とバーンなんて凶悪すぎるだろう。同じく《成金ゴブリン》も強力なカードに化ける

「俺はそのままカードを2枚伏せ、攻撃しないでターンエンドです」

「おい恭介、その二枚ってまさかさ・・・」

「先生のターンだ。ドロー！」

リンの方を見ると苦笑いしていた。どうやら伏せはバレているらしい

「ドローフェイズ時にリバーズ発動。《ギフトカード》相手ライフを3000回復させます。」

ただ相手のライフを回復させるだけのカード。それだけがこれがおそらく一番強い使い方だろう

「チェーンが無いならば二枚目のギフトをチェーン発動。更に3000回復。レフィキュルの効果で合計6000ダメージを与えます」

「なんだと！？ぐはああああ！」

教師

L P O

「俺の勝ちです」

教壇から去る時に会場がザワついていたけど気にしない。確かにライフ4000の世界でバーンなんざ酷いことだろう。だが、今はそれでいいのだ。

「ちよつといいか？」

微妙な顔をしているリンの所に戻ろうとしていたら声をかけられた。

「俺は三沢大地と言う。お前のそのデッキは・・・」

「俺は朝霧恭介です。このデッキが何か？」

何か言いそうだったが自己紹介をして言葉を遮った

「それはシモツチバーンだろう？なかなか難しいデッキを使っていたから声を掛けたんだ。・・・バーンはあまり褒められたものではないがいい試合だったと思うぞ」

「お褒め頂き光栄ですね。言う通りこれはシモツチバーンです。それじゃ俺は戻るので、また後で」

俺は三沢と別れリンの所へ戻ると鋭い目で睨まれた。

「それってあのデッキでしょ？また変な構築にしちゃって。それに主力の一体も出してないのに変に目立ってさあ」

「手札にはいたが出さないようにした。俺は決まれば凶悪なシモツチバーン使い。ただそれだけさ」

「相変わらず変なことしか考えないんだから。さっきの試合もギフトカードが二枚あるならソウルテイカーいらなかったじゃない」

それも戦略ってやつだ。ただのオーバーキルではなく魅せる試合にしなければ

「まあいいわ。ねえ、お互いに試験には勝っただけどさ・・・」

浮かない顔でリンは呟く

「たぶん俺はお前と同じことで後悔してる」

お互い思ってることは同じだろう。こんなことが起きるなんて夢にも思っていなかったのだから

「GXのアニメちゃんと見とけばよかったな・・・」

そう。二人ともアニメを全然見ていなかったのである。少しくらいは見てたり、話の流れは知っているものの、情報アドが少なすぎた。

「これから大丈夫かな・・・」

へたに原作に介入しないで平和に過ごせば大丈夫だろう。・・・たぶん

「マンマミィ〜ヤ〜!」

変な声が響き渡るのを同時に、俺達の入学試験は終わりを告げたのだった

第一話「入学試験」（後書き）

一話終了です。試験でのワンターンキルはもはや定番ですが私もやっつてしまいました。

ほとんどが二人の会話で流してしまいましたが、次も物語の設定等は二人の会話という形で書こうと思います。

こんな文章ですが、お付き合い頂けたら幸いです。

それでは。

第二話「これから」（前書き）

二話目です。

今回はデュエル無しで、朝霧兄妹二人の話になります。

それではどうぞ。

第二話「これから」

入学試験が終わり、無事に俺達は入学できた。

そして各々が各寮に配属されたのだったが・・・

「やはりというか何というかだな・・・」

俺が配属されたのはリンの予想通りオシリス・レッドだった。

「普段から『実力は不必要に誇示するものじゃない』とか変なこと言ってるからよ」

そうリンは言っていたが、俺は元々そういう人間なので仕方ない。アイツの言った言葉を借りると、普段筆記で手を抜いているから今回の筆記試験も同様に手抜きをしたことになっていたのだろう。

いろいろ考えていても仕方ない。配属された以上ここで生活することと変わりはないので、まずは簡単に挨拶周りをすることにした。

「・・・そして最後は十代達か。」

一通り挨拶をしてきて残り十代と翔の部屋まで来た。
入ったらいきなりデュエルしようぜと絡まれそうだったが気にせず
入ることにした。

トントン、とノックすると確認も無くすぐにドアが開いた。・・・
不用心すぎじゃないか？

「初めまして、だな。俺は朝霧恭介、同じくこの寮に配属されるこ
とになったから軽い挨拶に来た。以後よろしくな」

簡単に自己紹介をする

「オレは十代！遊城十代だ。よろしくな！」

「僕は丸藤翔ツス！よろしくツス！」

おう、よろしくな。俺は知ってはいたけど知らないふりをした

「ところで朝霧君に聞きたいことがあるんすけど」

朝霧じゃなくて恭介でよろしい。して、聞きたいことは？

「試験の時にずっと一緒にいた子はいつたい誰なんすか？」

一緒にいた子？リンのことか？

そして何故リンと一緒にだったことを知っている

「それは・・・」

翔曰く大声が聞こえたのでそちらを見たらかわいい銀髪の少女がいて、その少女が俺にベツタリだった（翔視点）ので気になっていたとのこと。

その隣にいた俺もシモッチバーンを使って勝っていたのでよほど目立つ存在だったらしい。

リンの銀髪は確かに目立つし、それだけじゃなく大声を出すという迷惑行為（元凶、被害者共に恭介）もしたので気になるという気持ちもわからんでもない。しかしかわいいとかベツタリとか・・・このドスケベが。

どーりで他の連中も何か聞きたそうな顔してたわけだ。

「あれはリン、朝霧リンだ。俺の妹だから万が一にも手を出そうとは思うなよ」

「恭介君の妹ツスか！？・・・でも同年ツスよね？それで妹ってなんかおかしくないツスか？」

変なところで鋭い奴だ。コイツそれほどリンが気になるのか。どうする？適当に誤魔化すか？それとも蹴散らすか？

「あゝそりゃ深い事情があつてだな」私が話すわ「およ？」

声がしたので後ろを振り返ると今話題になっていたリンが立っていた。

「・・・なんでここにいます？」

「・・・メールしたのにやっぱり気付いてなかったのね」

俺はメールを確認すると『どうせ今暇でしょ？これからのことを話したいから今からレッド寮に行くからね』というメールが確かに届いていた。

確かに暇だった。あまりにも暇すぎて始めたのがこの挨拶周りだったのだ

「恭介兄さんのことだから適当に挨拶周りをしようとか考えたんでしょうけど」

読まれてる。行動が妹に読まれている。リン・・・恐ろしい子！

「ギャグはいいから」

お前は心まで読めるのか！？

「・・・聞こえてるだけよ」

いつの間にか声に出していたらしい。

どうやらメールを見た後から喋っていたようだ

「絶対にわざとでしょう？」

わざとなのがバレているだど・・・？

「漫才はいいから早く説明してほしいッスー！」

俺達がコントをしていると痺れを切らしたのか翔が割り込んできた。・・・コイツめ。せつかくの楽しいコントの時間を。珍しくリンもノリノリだったというのに。後で肅正すべきだな。

「・・・話を戻すと、私と恭介は本当はただの幼馴染みだったのよ」

「俺達は親同士の仲が良かったから小さい時からずっと一緒だったんだ」

「でも私の親はある日起こった事故で死んじゃったの」

「その時身寄りがなかったリンを俺の親が引き取ってくれたんだ。つまり義理の妹ってやつだ」

「あの時身内なんていなかった私は孤児になるしかなかったから、恭介達には今でも感謝してる」

「もともと本当の兄妹のように過ごしてきたんだし、昔のことだから感謝なんていらなただけだな。・・・ということだ。理解してもらえたかな？」

「そんな事情があつたんすね」

俺は話を聞いて妙にしんみりしている翔の肩を叩いた

「だから深い事情があると言ったのだよ。そういうワケだから、こ

の話は他言するなよ?」

妙な空気にしてしまったため、俺達は部屋を後にした。

俺は、寮内は少しだけ居心地が悪くなったからしばらく外に出て話をしようという提案を出した。

「・・・変な話させて悪かったな」

「そのことはもういいよ。それより本題に入りましょう」

「その本題とは?」

「議題名『シンクロ召喚について』」

よしわかった。んゝそうだな・・・

「素材縛りが無いやつは一枚だけ、縛りが片方なら二枚、両方ともあるものは三枚積めるということにしよう。だがブリュとゴヨウは禁止な。ゲームバランス的に考えて」

「その二枚があれば無双できるのに・・・。そんなこと言ったら恭兄も苦労するよ?」

「そんなことくらいわかってるが相手はシンクロが無いんだからな」
相手の切札級のモンスターすら奪える《ゴヨウ・ガーディアン》と手札を任意の枚数捨てることでフィールドのカードをバウンスする

効果を持つ《氷結界の龍ブリューナク》

ゴヨウは素で戦闘力が高いうえ戦闘補助をすれば奪えないやつはいないくらいで、ブリューナクの場の切札でも何でも戻す効果は何度も使えるため墓地肥やしも兼ねている。

どちらにせよ強力すぎるという性能は制限カードという事実が物語っている

「素材制限無しは一枚だけかぁ・・・」

「でもブラックローズやスターダストは普通に使ってもいいことにするんだから良いだろ？」

あの二枚は鬼性能というわけではないだろう。星屑の効果は場から離れるし、黒薔薇のリセット効果は一度だけだ

「この世界でトリシューラ並べてみたかったなぁ・・・」

やめる。それだけは現実でもしてはいけない。あれはもはやカードゲームじゃない。てか並べる気だったのか。

だが実は制限無しは一枚というルールはトリシューラ規制のためのものなのだ

「了承してしまった私の馬鹿め・・・」

簡単に決められる二人だけの約束だが現実よりも早い制限化。オメデトウ

「でも枚数を規制するだけじゃ意味ないかもな。大抵一度出せれば

充分だし」

「まだ何か規制するわけ？」

当然だろう。あくまでも公平にするための措置なのだから

「一試合につきシンクロ召喚は三回までにしよう。その方が切札っぽくてイイだろ？」

三回という数字はデッキに積める《融合》カードの枚数でもある

「この世界での融合の回数が三回だけで終わるわけがない」

それはもっともな意見だがシンクロは素材の指定が無いようなものなのだから我慢しなさい

「どのシンクロモンスターを出すか悩む・・・か。状況によって最善の手を打たなきゃならないってのも楽しいかもね」

「そういうことだ。・・・だが、この話はあくまでも他のやつとの対戦に限ろう。つまり二人同士の試合では通常の制限通りだな」

リンにとって意外な言葉だったのか、ぽかんとした顔でこちらを見ている

「お互い同じシンクロを使うんだし、さすがに俺も窮屈すぎるかと思っただけ」

リンはまだ意味を理解できていないようだった

「俺達二人なら他の誰にも気を使うこともなくシンクロを出しまくることができるだろ。この世界の奴らにシンクロ召喚を存分に拝ませてやるっぜってことだ。」

ここまで言ったらようやく理解したのか、リンの表情が明るくなる

「そんなこと言ってるけどさ、ライフ4000なんてすぐに尽きちゃうよ?」

リンの言う通りだが、何らかの防御策を用意すればそれは防げる。そしてそれは相手にとっても同じことだろう

「大丈夫さ。そう簡単には終わらせてくれないだろう。最後にシンクロを使い始める時だが・・・」

新鮮さを出すためほんの少しの間だけでもシンクロはお預けにしよう。

その意図を察したのか、リンは話を黙って聞いている。

「月一試験。その時のデュエルでシンクロ召喚を解禁だ!」

第二話「これから」（後書き）

そういうことで終了しました二話です。

今回は設定等の説明回みたいな感じです。

本当はデュエルを入れようかと思ったのですがせつかくの雰囲気
を壊すので次で。

十代が空気だったのは私の力量不足です。

それではまた。

第三話「いねが」（前書き）

二話目です。

話としては二話目の続きです。

この話でよっやく恭介とリンのデュエルになります。

内容は主にギャグが占めますが。

それではどうも。

第三話「これが」

俺の提案にリンは満足気に何度も頷いていた

「月一試験で解禁かぁ。いいね。凄く良い！」

だろ？シンクロ召喚の存在を試験という公の舞台で俺達兄妹が初披露する。

どうせなら派手にやりたいもんだ。

その後、しばらく会話に熱中していた俺は、ふと時計を見てみた

「おっと、もうこんな時間か。危ないからそろそろ戻ろう」

もうすぐ日が傾き始める時間だ。

アカデミア内とはいえ、暗くなったらいったいどんな危険が潜んでいるかわからない。

俺はその一言で会話を終わらせ、戻ろうとした。

その時、突然背後から謎の男が飛び出してきた！

成り行き上そうは言ってみたが実は前から二人共気付いていた。

例え会話を盗み聞きされていたとしても変態程度にはシンクロ召喚など理解できるわけがないため放置していたのだ

「おいお前、この僕とデュエルしろ！」

・・・はい？

いきなり現れといてデュエルしろとは何事か。リンも冷たい目でその男を見ている

「僕は『リンちゃんファンクラブ』の副会長だ！」

何だって？ファンクラブ？・・・いつの間にそんなものが

「さっきから聞いていればドロップアウトの分際で僕達のリンちゃ

んと馴れ馴れしく話をしゃがって！」

妹と話をしている何が悪い。それと『僕達の』だと？

・・・どうやら俺にはこの変態の発言が理解できないようだ。

勝手に変態の物扱いされた当人は顔が真っ青になっていた。

「リンちゃんの隣に野郎はいらない！僕がデュエルに勝ったらリンちゃんの前から消えろ！」

なぜ俺が消えなければならぬんだ？

頭が痛くなってきた・・・駄目だこいつ。早くなんとかしないと・・・。

隣を見ると恐怖のあまり全身を震わせているリンの姿が。

どこの誰だか知らないが、これまでのいい雰囲気ை台無しにした罪は重い。

先程は翔だったから見逃したが、知らない奴なら容赦はしない。

「・・・手加減は期待するなよ変態」

どうやらブルーの生徒らしいが見知らぬ変態に負けるほど俺のデッキは弱くはない。

・・・リンを知っているなら俺がバーン使いということくらいわかってるだろうに。

こいつの名前なぞどうでもいい。呼び名は変態でいいだろう

「僕を変態呼ばわりしていられるのも今のうちだドロップアウト！」

「デュエル！！」

「僕が先攻だ。ドロ―！《ジャイアント・オーク》を召喚、カードを二枚伏せターンエンドだ」

変態が勝手に先攻を取り、巨大なオークを召喚した

「俺のターンだ。ドロ―」

「リバーズカード《王宮のお触れ》を発動！」

・・・何でこんなタイミングでそんなものを？

「更にチェーンで《魔のデッキ破壊ウイルス》を発動する！これでお前のデッキは終わりだ！」

魔デッキとお触れで俺のデッキが終わり？コイツ本当に頭大丈夫か？

「お前のデッキはシモツチバーン。罨とあのモンスターが消えればお前に勝機はない！」

そついうことか。まずは魔デッキの効果だったな。

変態は俺の手札を見ると愕然とした。

「な、何だこれは？」

・・・予想通りの反応で思わず吹き出してしまった。

「メインフェイズに移行、俺は手札から《神の居城 - ヴアルハラ》を発動。そして《アテナ》を特殊召喚する」

場に神々の住まう城が現れ、戦いの女神が姿を現す

「手札から《デビルズ・サンクチュアリ》を発動、メタルデビルトーンをリリースし《光神テテュス》をアドバンス召喚。アテナの効果で600ダメージを与える」

「うわっ!？」

変態

LP3400

「さらに《光神化》発動。《天空勇士ネオパーシアス》を攻撃力を半分にし特殊召喚。アテナで600ダメージだ」

変態

LP2800

これが俺の本当のデッキ、ヴァルハラで上級を呼び出す天使ビート。

レフィキュル、ソウルテイカー、ギフトカードなどは相性は悪くないためスペースを割けば入れられるが、どれも普段は入れていないカードばかりだ。ちなみにあの試験の残りの手札は《ガーディアン・エアトス》だったので出していればその場で勝負は決まっていた。

だが俺はギフトカードを使い、デッキがシモッチバーンであることをアピールしたのだ。

入学試験という日は、誰もが信頼できるデッキを使う。大事な試験で観衆を欺くために構築を変えているなんて思えるわけがない。

だが俺は構築を変えてバーン使いを装った。

「罾を多用するシモッチバーンを簡単に止める方法はお触れを使うこと。お前みたいな馬鹿がわざわざ自分から罾を封じてくれるのを俺は期待してたのさ」

「まさかあんな演出で本当に騙されるなんて……。恭兄の策略通

りってわけね」

そう言っただけよ。あの時俺のデッキを見破っていたのはいつも一緒だったリン、お前だけだ。

・・・少々シモッチバーンだとアピールしすぎたので不審に思った人がいるかもしれないが

「そもそもシモッチバーンなんて事故率が異常に高いデッキを使うわけがないだろう」

今思うとよく騙せたもんだな。シモッチとレフィキュルが無いと負けるなんてリスクが高すぎる。この作戦もフルバーンやロックバーンの方がより確実だったのかもしれない。いい勉強になった。

だが気に入っている強力なバーンデッキなら一つはある。

現実での8000ライフですら驚くほど早く奪えるほどのものだ。
・・・今度お披露目しよう。

「さてと、いい加減再開するかな」

俺の場にはアテナ、テテユス、ネオパーシアスの三体がいて、相手ライフは2800。

普通に終わらせてもつまらないな〜と考えているとリンが目で何かを訴えてきた。

・・・了解しました、リン様。直ちに行動に移ります。

「バトルだ！アテナとテテユスでダイレクトアタック！」

「うわああああ！」

変態

L P O

これでようやく勝負が終わった

・・・わけがない

「続けてネオパーシアスで攻撃だ！」

「なんでえええ！？」

変態

L P O

「お、終わっ「まだだ！」「え？」

「まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ！」

「ネオパーシアスの効果だ。一枚ドロ！」

ドロしたカードは《ジェルエンデュオ》

「この時テテユスの効果発動！引いた天使を見せてもう一枚ドロする！」

テテユスは天使デッキでは莫大なハンドアドを稼げる。
当然ながら今のモンスターは全て天使族で統一している

「ドロ！引いたカードは《ダーク・ヴァルキリア》だ。もう一枚

「ドロー！」

ここで相手に残念なお知らせ。魔デッキの効果は継続中だが、このデッキには攻撃力1500以下は数枚しか入っていないのだ

「ドロー、エアトス。ドロー、アテナ。ドロー、モンスターカード、ドロー、モンスターカード！ドロー！モンスターカードオ！」

「もうやめてえ！変態のライフはもう0よ！」

ドローするのが楽しくなってきたらリンが止めに入ってきた

「HANASE」

止められながらもドローし、引いたカードを見る。

お前か・・・オネスト

「・・・ツチ！」

魔デツキの効果で墓地に送られるオネストを見て、リンは忌々しそ
うに舌打ちをして戻っていった。

「せっかくいい感じだったのに・・・あのガチ ムチ天使が」

これは遊戯さんでお馴染みのあのネタである。

もちろん提案したのは現在超不機嫌なリン。ドローはうまくいった
とはいえお互いうる覚えだったのでちゃんと正しいかと聞かれれば
YESとは言えない。

俺もドローが楽しかったので気分がノってきていたのだが一気に萎
えてしまった。

「はぁ・・・なんでよりによってオネストが来るかなあ」

その意見には俺も全面的に同意だが、正直リンが怖い。

どうせ来るなら最初に来てほしかった。
このやり場のない怒りをどこへ向けようか。

あ。・・・いた。

「お〜い、お前さあ〜」

震えている変態に声をかける

「30分間サンドバックになってから礫にされるか、1時間サンドバック後に1年間俺達の下僕になるのどっちがいい？・・・なに？両方だつて？このカワイイヤつめ！」

もちろん答えなぞ聞いてない。相手は全力で否定している。

でも始める前に相手が負けた時の条件なんて決めてなかったからない。

そして言うまでもないがボコるのはリンである。

今のうちにヤツの怒りを発散させないと大変なことになる。

・・・主に俺が。

『説明しよう！朝霧リンはギャグ補正がかかると通常の300%の力を発揮できるのだ！』（俺調べ）

「……人の存在をギャグ扱いしないでくれる？」

リンのボルテージがあがっていく！こっげきりよくがあがった！

「ねえ、本当に怒るよ……？」

本格的にヤバくなってきたので変態を生け贄にして逃走する準備を始める。

「……あ、そつだ。」

何を思ったのか一時は恐怖すら覚えていた変態にリンは近づく

「ファンクラブって言ってたっけ？本部みたいなのってあるでしょ。どこにあんの？案内してよ」

リンに対する恐怖心で支配されている変態が壊れた人形のように頷く。

「そんなものどうするんだよ・・・」

「潰す」

即答ですか。ですよねー。

もうすぐ暗くなりそうだったが、リンは無理矢理案内させて部屋まで行った。

部屋に着くとリンはドアを優しくノックする。

・・・すごく、恐いです。

「なんだ？こんなじか・・・ん・・・に・・・」

会長は部屋のドアを開けた途端に後悔した。

黒いオーラを纏ったリンが満面の笑みを浮かべて立っていたからだ

「あなたが会長さん？あなたに素敵なお話があるの。・・・私とデュエルしましょう。あなたが勝つたら私はあなたの言う事を聞いてあげる。ただデュエルに勝つだけでデートでも絶対服従でも何でも好きにしているの。もちろん一回だけなんて私にとって都合のいい話じゃないわ。どう？素敵でしょう？」

笑顔のまま機械的に喋るリン。途中から危ない話にしか聞こえないようなことすらも表情を一切崩さずに話す

「・・・そして？僕が負けた場合は？」

「このファンクラブを解散してもらっわ。例えクラブを解散させても個人で私のことをどう思ってもそれは個人の自由。私は組織を無くしてほしいの」

相手にとっては負けても損することはない、美味しすぎる話だと思

うだろっ。

「さてと、さっそくだけどデュエル開始よ。あんな条件を出してるんだから私が先攻を貰うわね」

先攻を取ったリンはデッキからカードを引く。

「私は《魔轟神ガルバス》を召喚、カードを二枚伏せてターン終了」
リンはラビエルが使えなくなったから悪魔から魔轟神に変えたらしい。
ぶっちゃけ幻魔を出すためのデッキよりも魔轟神の方が遥かに強いだろ。

だが魔轟神でシンクロ無しで出せる強い奴って・・・あ、いた。

「ドロー。僕は《チェミナイ・エルフ》を召喚。ガルバスに攻撃だ！」

弱いモンスターがいる時は誘ってる場合が多いから慎重にならないと・・・

「攻撃宣言時、場のガルバスと手札の《魔轟神ルリー》を墓地に送る」

あゝあ。やっぱり・・・

「・・・出なさい。《ダークネス・ネオスファイア》」

出た。攻撃、守備共に4000で戦闘破壊されないインフレカード。

「ぐっ……。僕はメインフェイズに移行し、カードを二枚伏せ、ターンエンドだ」

「エンドフェイズ時、リバーズ発動。《無力の証明》」

星5以下を破壊するカード。相手ターンに使用えばカウンターされづらく、デメリットも打ち消せるため無駄がない

「さらにもう一枚。《心鎮壺》を発動。その二枚のカードを封印する」

一時的なロックとはいえ、対処が面倒なカード。だがもうエンドフェイズなので、新たにカードを伏せることはできない。

これは酷い・・・相変わらず妨害するのが好きだな。

「私のターン。ネオスフィアでダイレクトアタック」

「わああああ！」

会長

LPO

最後は引いたカードすら見ずにトドメをさした。それにしても一撃で葬るとは・・・

「さて、約束だけでもまずは今すぐこの気持ち悪いクラブを解散しなさい」

「・・・まずはっ..」

「そつよ。まず一つ目はクラブの解散」

そつよ。『一つ目は』なのである。リンは決して解散する『だけ』とは言っていない。つまり後付け可能。

・・・どこの詐欺集団だよ

「私の場合は絶対服従とかまで言っちゃってたからどうしようかな
〜？一生下僕は・・・ファンとか言ってるてキモいから勘弁だし〜」

いろいろと恐ろしいことをブツブツ呟きながら悩んでいる。

こいつらがクラブを結成したのは当然ながら今日らしい。

かわいいとか見た目がいいとか小動物系だとか言っていたが
先程までのやり取りやデュエルの傾向を見るとわかるが決してそんな
ことはない。

リンは『見た目』よりも『性能』を重視してデッキを組む。
以前三沢が好きな《白魔導士ピケル》等の、いわゆるかわいい系を
薦めてみたが、『弱い』の一言で一蹴したほどだ。

人を見かけで判断しちゃいけないぞ！

そしてこの変態共の最初のミッションはリンの傍にいる野郎の排除
だったらしい。

しかし噛みついた相手が俺だったのが不運だったな。陰でこそこそ

と活動していればこんなことにならなかったものを。

・・・だが仮に盗撮なんかをしてバレた場合を考えると、今日見つけた方がよかったのかもしれない。

俺はそんな写真なんか見ても気持ち悪いし、こいつらは一生を病院のベットの上で送ることになっていただろう。

「あゝなんかどうでもよくなってきたわ」

どうやら変なテンションが下がってきたようだ

「でもこのまま見逃すつてもね」

それは俺も同じだ。こんな面白い状況の奴らを放置するはずがない。

「・・・よし。決めたわ。あんたら忍者になりなさい」

・・・忍者？シノビですか？

「隠密とも言っわね。今から鍛えて私に仕えるの。その方が面白そ

うだし」

なるほど。伝達係にスパイ活動何でもござれか。確かにそのまま下僕にするより便利だ

「ただし期限は3日間。それまでに完璧な身のこなしにすること。とにかく素早さと体力だけを追求するの。戦闘力なんてデュエルには無関係でしょ」

確かにこの世界では戦闘なんてしないし、デュエルの腕なんか鍛えられても結局リンが相手をするのだから無駄だろう。

そもそもそんな存在を作っていいのかが謎だが。

「私が呼んだら1分以内に来なさい。でも呼んでいない時は私から半径100m以内に入らないこと」

呼んだら来いと言うのに近寄るなどは矛盾してる気もする。盗聴しない限り無理じゃないか？

「あと駆けつける時と任務中は黒装束を着て顔を隠すこと。普段は着なくていいけど、呼んだらその瞬間から忍者よ」

次々に無理難題を振りかけるリンだが、二人の目は真剣だった。

というかこの世界に来てからリンの様子がおかしい。

普段はこんなことを言うわけがないし、ネタに対して異常なほどノリノリなのだ。

さっきは自分からネタを振ってきたし。

・・・ギャグキャラ補正？

「自分の方がボケてるのに私をギャグ扱いするのはどうかと思うんだ・・・」

本能が告げている・・・今、コイツに逆らってはいけない

「ほら、今でもボケてるんでしょう？」

ば、馬鹿な！？戦闘力53万だと　ぐはあ！？

「やっぱり私をギャグキャラ扱いしてる・・・」

ギブギブギブギブ！ごめんなさい！すみません！

「・・・まあいいわ。今日はいいい駒が手に入ったから許してあげる」

駒扱いですか・・・。

「あんた達も私をガツカリさせないでね？お願いだよ？」

そんな恐いお願いなんて聞いたことない

「あ？」

「ごめんなさい！・・・リン様、そろそろ寮に戻られた方が

「時間なんてすっかり忘れてたわ。帰りましょうか」

・・・ふう。ようやくこの重い空気から解放された

「いくら恭介とはいえ……次はもうないからね」

次があるだけ私は幸せだと思います。慈悲深きリン様に感謝！

「ふうん……それもそうね……」

そんなわけで俺はリンの機嫌を取りながら無事に自分の寮へと帰還することができたのだった

第三話「これが」（後書き）

三話目終了です。

今回は二人の主力デッキです。

またワンキルで終わらせてしまいました。

対戦相手は見るからにかませなので名前すら決まっています。

無駄に長くなったのは私の暴走が原因です。

ギャグが入ると本当にどんどん進むので終わらせ方に悩みました。

それでは。

第四話「兄妹対決！」（前書き）

えー、今回はタイトル通りになります。

恭介とリンの初対決です。

時期といつか日にちがおかしいことがあるかもしれませんが・・・

それではごっげ。

第四話「兄妹対決！」

日が経つのが早いこと。今日一日が終わり、あと少ししたら変態事件から三日目になる。

俺はだんだん生活に慣れてきたため、大抵の授業は適当に居眠りをして過ごしている。

先生に居眠りの件で十代達と共にいつも怒られ、周囲からは馬鹿にされる。

居眠り仲間ということか十代と仲が良くなり（ついでに翔も）、十代の部屋で共に過ごすことが多くなってきた。

俺はこの前天使デッキで変態と戦ったが、授業ではレフィキュル等を積んだお馴染みのシモチバーンを使っている。

天使ではパーツが引けないと困るためデッキを独立させ、完全なシモチバーンを作ったのだ。

俺と戦う相手は明らかに嫌な顔をして、俺が負けた場合は散々に馬鹿にする。

次第に俺は周囲から、居眠りをする馬鹿でバーン使いというイメージが定着してきた。

その様子をリンはずっと黙って見ていた。

そして、明日が変態とリンが契約を交した三日目である。

俺は顔はあまり覚えていなかったが、リンは正確に記憶しているよ。うなのであいつらは逃げることはできない。

十代の部屋で明日の結果がどうなるかを楽しみにしていると、十代にメールが届いた。

・・・ん？もしかして・・・？

そういえば翔の姿が見当たらない。おや？おやおや？

メールを見た十代が血相を変えて俺に何かを言おうとした時、俺は背後に人の気配を感じた。

絶句する十代をよそに、急いで後ろを振り返ると黒装束を身に纏い顔を隠した二人組がいた。

『恭介殿、我らが主リン様からの言伝になります。』

『丸藤翔の身柄を確保した。返して欲しくば至急女子寮に出頭されまし。』

『それでは、伝えましたぞ。』

二人はそう言い残すと、一瞬で部屋から姿を消した。

「・・・マジか。」

もちろん窓もドアも開いていない。

「一体どうやって・・・？」

どうやって侵入したのだろうか。

その前に直前まで気配がしなかった。

「……お、おい。今は一体……」

言葉をなくした十代が尋ねてくる。

「……忍者だ。」

「……ニンジャ？」

あいつら、まさか本当に……？

これで偽事件だと確定した。とりあえず女子寮へと向かおう。

『主さま・・・』

「・・・どうだった、恭介の反応は？」

『大変驚いて、言葉をなくしていた様子で・・・』

「ふふふ・・・。恭介、これが私と、私の駒の力よ・・・！」

高笑いをするリン。

その姿は明らかに悪魔そのものであった

「・・・で、何なの？その茶番は？」

隣でたった今来たばかりの明日香が呆れた様子で呟く。

茶番とは失礼ね。まったく。

「おーい！」

しばらくするとようやく十代と恭介が到着する。

「……遅かったわね、恭介」

遅かったとは失礼な。これでも全力疾走とかしたんだぞ

「……お前、雰囲気違くないか？それよりなんだこの二人は？」

「どうしたもこうしたも、私の駒に決まってるじゃない。この子達はここからレッド寮まで往復1分だったのに……。」

馬鹿を言うな。俺に話を伝えるだけでも20秒はかかってるんだぞ。

「仕方ないわね。証拠を見せてあげるわ。・・・行きなさい。」

そうリンが言うと、二人は一瞬で消えていった。

試しに時間を測ってみよう。

「 28、29、30。」

ちょうど30秒を数えた時、二人が姿を現した。

「・・・見なさい。」

「・・・それは!?!?」

「・・・写真？」

二人が持ってきたのはところどころが擦りきれている写真が入っている写真立て

「それは昔リンと撮った大事なものだ。・・・確か俺の部屋に飾ってあったはずだ」

確かに写真には小さな子供二人が写っている。

・・・こいつら本当に寮まで行って来たのか

「妹との昔の写真を大事にして・・・もしかして恭介君ってシスコ翔くん？」え？」

何やら言いかけた翔の言葉をリンが遮る。

「せんせいからごくごのもんだい。昔の写真を大事に飾っている恭介さんはシスコンです。なら同じ写真を綺麗な状態で常に持ち歩いている私はなんでしょうか・・・？」

リンは鞆の中から同じ写真を取り出す。それには折れ目どころか傷

一つすら無い。

「恭介お兄ちゃんの写真を大事にするって約束を今も守ってるの。翔くん、言葉はよく考えて選びましょうねえ」

翔は力無く返事を返す。

リンはまた黒いオーラを纏っているが、問題はそこではない

「話がずれたが、いったいその二人に何をしたんだ？」

レッド寮と女子寮を30秒もかからずに往復するなんて明らかにおかしい。

「特になにも。ただ、ちょっとした訓練を積んだだけ」

ウソつけ。ちょっとした訓練だけでこんな人間離れした動きができるわけがない。

「・・・私が組んであげたプランで訓練させて、その後少し教育しただけよ」

その教育ってなんだ。教育って

「具体的には1日目はただの体力作り。2日目はマインドコントロールを少々」

少々じゃねえよ！なに恐ろしいことをサラッと言ってんだ

「人の思い込みの力を舐めてはいけない」

思い込みだけで忍者になれるわけないし。なれるなら語尾に『ゴザル』でもつけるでゴザル

「ネタばらしをすると黒魔術を・・・」

マインドコントロールといい、黒魔術といい、いつからそんな恐ろしいものに手を出した妹よ

「けどそんなものちよつとした手助けに過ぎない。全てはこの二人の想いの力」

人間って素晴らしい！ってそんなことあるか。
だが忍者になれなかったら命がないため、あながち嘘ではないのか
もしれない

「ギャグ補正の無限の可能性が見えた」

しかし効果は永続です。この二人はずっと忍者です

「さすがに私でも二日でなれるとは思わなかったわ。これで体術ま
でマスターすれば・・・！」

人の一人くらい楽に殺せますよね。暗殺できますよね。気配なかつ
たですもん。

「私に逆らえる者はいなくなる・・・！」

この子に勝つ手段はデュエルだけ！

「でも反逆してくる可能性も0じゃないからやめるわ」

絶対寝込みを襲われても返り討ちにできるだろ

「私の場合補正は永続じゃないの」

絶対補正無しでも片手で倒せる。

この二人の効果は永続です。大事なことなので二回言いました。

「……そろそろいいかしら？」

俺達がコントをしているとまた割り込まれたが、今度は明日香だったので許す。

今回は逆に收拾がつかなくなってきたためにもしる助かった。

「……いいわ。この写真を元の位置に綺麗に戻して。そしたら今回の任務は終了よ」

『リン様の仰せのままに……』

そう言い残すと二人はまた消えていった。

・・・本当に便利な駒だな。

「・・・で、翔がなんだったわけ？」

「・・・女子の風呂を覗いたのよ」

「ですよー。確かそんな内容だったし。」

「そういえば明日香の取り巻きがないような気が？」

「私が眠らせたから来ない。邪魔になるから。もちろん実力行使の方で」

「そこはせめて催眠術と言ってほしかった！」

「その二人は今頃生きているのだろうか・・・」

「……で、翔。その話は本当か？」

「覗いてなんかいないツスよ！信じてほしいツス！」

「……明日香、でいいか？その現場にリンはいたか？」

「え、ええ。この子もいたからここにいるのよ」

「……わかっていたが絶対に嘘だ。仮にリンが覗かれていたら翔が五体満足でいられるはずがない」

「……翔くん、リンの入浴姿を覗いた感想は？」

「白い肌と銀の髪が光に反射して眩しくて……って、覗いてないツスよ！」

今のはこいつの妄想なんだろうが……

「」「ぶっ殺……コホン。翔くん？今死ぬのと後で死ぬの、どっ

ちがいい?」「

血は繋がっていないが俺達はやっぱり兄妹らしい。息がピッタリだ。

・・・今は十代と明日香がいるから処刑は後にしてやるう

「・・・本人は一応否定しているが?」

「じゃあデュエルで私達に勝つたら水に流してあげるわ。私は十代、恭介君はリンとね」

予想はしていたが、リン・・・お前が相手か・・・

「うふふふ。そういえばここに来てからまだやってなかったわよねえ。私達」

それはもちろん偶然などではない。・・・俺の方がデュエルを避けていたんだ

「今日ここでお兄ちゃんの全てをバラしてあげる……。だから全力できてね？」

もちろんふざけたデッキで勝てるなんて思っていない。

翔のことなんてどうでもいいが、やるしかないのか……

「まずは私達からよ、十代」

「ああ、いくぜー！」

「デュエル!!!」

。

二人の試合は十代の《E・HERO サンダー・ジャイアント》で勝負が決まった。

次は……

「うふふふふ・・・準備はいい？」

いつものリンとは明らかにオーラとキャラが違う。

そしていつも付けている髪留めを外している

「雰囲気出てるでしょう？ガチモードだよ・・・？」

普段髪留めでまとめているが、リンの前髪は両目を完全に覆い隠すほど長いので、こちらからは目がほとんど見えない。

その銀の髪が風になびいて、髪で隠れていた右目がこちらを鋭く捉える。

「さあ、始めましょう・・・？」

雰囲気とかそんなの関係なしにその状態でそのセリフは恐ろしすぎる

「デュエル!!」

「俺が先攻を貰うぞ。ドロー!」

手札は・・・悪くはない

「俺は手札からヴァルハラを発動し、《The splendid VENUS》を特殊召喚。さらに、《デビルズ・サンクチュアリ》を使い、テテュスをアドバンス召喚、カードを1枚伏せて終了だ。」

「天使!? シモツチバーンではないの?」

隣で明日香が驚くなか、リンはフィールドのある天使を見ながらドローする

「ふふ・・・。天使を見て驚いていたけれど、私の兄の恭介は昔か

ら天使族デツキを愛用しているの。シモツチバーンは周囲を欺くためのただのお遊びなのよ。バーン使いを装い、相手に無駄な対策をさせてビートダウンでねじ伏せる計略。」

「おいリン！お前・・・」

「言ったでしょう？全てをバラすって・・・。授業中に居眠りする態度の悪さも、筆記問題で成績が悪いのも、全てが周囲を欺くための演技。こんな馬鹿に見える兄貴でもかなり頭は良いのよ？私よりもずっと・・・」

「確かあなたの筆記の結果は・・・」

「上から十位以内だった気がするけど、兄貴なら普通に一位取れるんじゃない？馬鹿に見えた時点で兄貴の術中にはまっているのよ。」

全員から信じられないという顔で見られる

「さすがの私でも兄貴のデッキは把握しきれてはいないけど、シモツチなんてメじゃない強力なバーンデッキは所有してるはずだから、ビートだけと思ったら今度はバーンに焼かれるってこともある。使い分けられたら対処しきれないでしょうね」

こいつ、本当にこれまでの行動を暴いてやがる・・・

「罨に対抗してお触れを入れてもいい。でも、兄貴のデッキは罨がデッキの半分ほどを占めてるか、一枚も無いかのどちらかしかない。間違っつて後者と当たったら自分から守りを崩すのと同じ行為。勝ち目は無いわね」

・・・それで負けた奴があの変態のブルー生徒だ

「兄貴がデッキを偽るのは手の内を見せたくないから。そして・・・その天使デッキには魔法と罨がほとんど入っていない」

ああ、そうだ。どんな構築になってもデッキの大半を天使にするのは変えていない。

リンはフィールド場の一体の天使を睨み、手札から一枚のカードを取り出す

「つまり、そのデッキはテテユスの存在があつて初めて機能する・
・！魔法カード《ソウルテイカー》発動、テテユスの魂を奪いとれ
「！」

テテユスの目の前に悪魔の腕が現れる。

「させるか！速攻魔法《我が身を盾に》でテテユスを守る！」

自らの身を盾にし、俺はテテユスを腕から守った。

「ふふふ……。ほら、やっぱり守った。それほどその娘が大事な
の？」

まったく、わかりきってるくせによく言つよ……

「『俺はテテユスのためにデッキを作っている。銀髪天使は俺のジ

ヤステイス』か……。だが甘い　二枚目の《ソウルテイカー
》でテテユスを、《地砕き》でVENUSを破壊する！」

「くそっ！」

身構えるも魂を奪われたテテユスは力無く崩れ落ち、VENUSは
跡形もなく砕かれた。

テテユスの命と引き替えにライフを回復するが、今度こそ、しかも
二体共破壊された。

「私は《イエロー・ガジェット》を召喚。効果で《グリーン・ガジ
エット》をサーチする」

除去魔法の多さから怪しいと思ったが、リンのデッキはやはり【除
去ガジェット】だ。

強力だが単体しか出せないヴァルハラと、単体除去が多い除去ガジ
エ。相性は悪すぎる

「そら、イエローでダイレクトアタック！」

天使の羽が舞い散るフィールドを黄色のガジェットが駆け抜ける

「くっ……」

恭介

LP2300

「ふふ、大変ね。一枚セット、終了」

まずい。今この状況を打開できるカードはない

「俺のターン。ドロ」

「ヴァルハラの効果だ。また頼るぞ。来い、テテユス！」

俺は二枚目のテテユスを出す。……無事に生き延びてくれればいいが、望みは薄い

「俺はモンスターをセットして終了だ」

伏せはどうやら召喚反応型ではないようだ。

……だが、わざわざ《次元幽閉》と分かってあえて突っ込む馬鹿な真似はしない。

確定ではないにしろ、出来るだけリスクは負わないべきだ。

それよりも俺はテテユスで次に繋ぐ！

「やっぱり攻撃しないか……。ドロー」

手札にもう一枚テテユスがあったのも予想通りで、出して攻撃しないのも予想通りなのだろう

「手札からグリーン召喚、《レッド・ガジェット》をサーチ。」

だんだん揃ってきた。早くしないとマズイ

「グリーンで守備モンスターに攻撃する」

「俺のモンスターは《スケル・エンジェル》。効果で一枚引くぜ」

「しまっ……。！」

「来い、ドロー！引いたエアトスをオープン。さらにもう一枚ドロ
ー！」

引いたのは、畏カードだ

「ふふつ、アハハハハ！ やつと効果が使えたのに墓地にいと使えない役立たずを引いて終了？ つくづく運が無いね！」

さすがに妹とはいえ、今の発言には怒らざるを得ない

「リン・・・俺のデッキに役立たずなんていないぞ」

「カードを一枚伏せる。なら役に立つところを見せてよ。兄貴のターンだよ？」

「俺のターン。ドロー、テテユスの効果。《シャインエンジェル》をオープン」

「効果にチェーン、《強制脱出装置》でテテユスを戻す。・・・テテユス、情報アドバンテージありがとう」

・・・手札を見られるだけじゃなく戻された。

これが狙いか。相手ターン中に除去されないわけだ。

「俺は見せた《シャインエンジェル》を召喚、グリーンに攻撃だ！」

このターンでグリーンと相打ちし、イエローも破壊する！

「そんなことさせない。兄貴の予想通りの《次元幽閉》を発動。次元の彼方に飛ばしてあげる」

やはりあったのか。そして警戒することも想定済みか

「今俺のフィールドは誰もいない。ヴァルハラを起動、出る、エアトス！」

「そいつをヴァルハラで出すなんて……。よっぽど折半詰まっているのね」

何かがおかしい。今日のリンはいちいち挑発的な発言ばかりしてくる。普段はこんなこと言わないやつなのに……

「俺は一枚伏せて終了する」

「ふふ、ドロー。レッド召喚。イエローをサーチする」

これで場にガジェットが三体並ぶ。

「消える。レッドでエアトスを攻撃。宣言時、《リミッター解除》発動！」

消えるのは お前の方だ！

「リバーズ発動、無力の証明！」

「なにつ！？」

「使ってるお前なら効果はわかるよな？星5以下・・・全てのモンスターに消えてもらっぜ。斬り刻め、エアトス！」

聖剣を手に、相手の機械をエアトスが斬り刻む

「くっ・・・そんなっ・・・!？」

機械の残骸がフィールドに散らばるなか、リンは一人佇む

「ターン・・・終了よ・・・」

手札は2枚あるが、おそらくはガジェットなのだろう。
何も伏せることなく終了を宣言する

「・・・俺のターン。《ヘカテリス》を召喚し、バトルフェイズだ」

これで決めてやる・・・!

「ヘカテリスでダイレクトアタック!」

「べぐっっ!!・・・いいよ、来て・・・!」

リン

LP2500

「お前が役立たずと言ったやつに、お前は負けるんだ……。エア
トスやれ！『精霊のオペラ』！」

「きゃあああああ！？」

リン

LP0

「負け……。たわ……。」

その場で崩れ落ちるリン

その隣に俺は行き、妹へ向けて手を伸ばす

「いや、かなりギリギリだったよ。……。それにしてもお前、なん
であんな態度だったんだ？」

「言ったでしよう？」ガチモード』だって」

リンはそう言いつつ髪をまとめる

口調や性格が全部違ってたのは演技だったのか……。演技をする余裕があったこいつと、全力だった俺……。

ん？……待てよ？

「　　リン、手札を見せてみる」

「……嫌よ。」

最初は見せようとしなかったが、俺が睨み続けていると、観念したのか手札を渡した

「ミラーフォース……!!」

リンの手札にはサーチした《イエロー・ガジェット》と全体除去の《聖なるバリア - ミラーフォース》があった。

「……なんで使わなかった？」

「……あんなシーン見せられた後で使えるわけがないじゃない」

俺が無力の証明を使った時か……。

「……デッキトップは？」

「《魔法の筒》」

・・・エアトスの攻撃をミラーフォースで凌ぎ、ガジェットを召喚。
ヴァルハラで出てきた上級の攻撃をシリンダーで跳ね返す。

俺のデッキトップはヴァルハラで、ライフは2300・・・

なにがギリギリだ・・・俺の完敗じゃないか

「・・・でも、これは恭兄の想いが生んだ勝利。もっと胸張っていいんだよ?」

リン曰く俺の伏せが無力の証明ではなくミラーフォースだったらリンも使う気でいたらしい。
もしそうだったら

「カッコよかったよ?最後のシーン。なんだか物語のクライマックスって感じで」

・・・そう言うな。あの時はつい熱くなりすぎただけだ。

「とうとう言ったよね、モンスターの攻撃名。《ガーディアン・エアトス》の『精霊のオペラ』」

「おー、そういえばお前らってなぜか攻撃名叫ばないよな?」

ぐはっ!・・・しまった!変に恥ずかしいからお互い言ってなかったのについて熱くなって勢いで言ってしまった・・・!

「お、お前ら、あれは、アレはナシだ!」

思わずテンパってしまった。くそっ・・・恥ずかしすぎてたまらん

「翔!お前も笑ってんな!今から処刑だ!処刑してやる!・・・リン行くぞ、今から丸藤翔の公開処刑だ!」

「ちょ、ちょっと!?!?」

ギャーギャーわめく翔と、いきなり腕を引つ張られ驚くリンを連れて、俺はアカデミアへと歩いて行った。

そんな後ろ姿を見て笑う、十代と明日香を残して・・・

第四話「兄妹対決！」（後書き）

四話終了です。

二人ともガチで戦えば4000ライフなんてあっという間になくなってしまふので大変です。

頻繁に出てくる単体除去の《ソウルテイカー》による回復は、その辺の調整でもありません。

リンが最初にテテユスを除去しようとした時に使ったカードは本当は《地割れ》だったのですが厄介な敵を狙うという演出のため、これも指定除去の《ソウルテイカー》に変更しました。

いろいろと書いて長くなりましたが、それでは。

第五話「試験前夜」(前書き)

今回は主に月一試験当日の夜明け前の話です

ネタや会話等、勢いで書いていった感がありますが。

それではどうぞ。

第五話「試験前夜」

とうとう明日はお待ちかねの月一試験になる

日が経つのが早い気がする。ついこの前翔を処刑したばかりだと言
うのに。

偽事件で翔を拉致した時、俺は半ば冗談で処刑と言っていたが、リ
ンは本気だったらしい。

リンはアザなどの外傷が残らないように、翔を攻撃し続けた。

生命活動に支障がきたさないように内部、つまり内臓へのダメージ
を徐々に、しかし確実に与えていった。

半ば拷問状態だったが、放っておいたら本当に殺しかねなかったの
で翔をかばって止めさせようとしたら俺まで攻撃された。

あの時のアイツの攻撃は一打一打、全てに凄まじい殺気が込もって
いた。

しばらく俺達を攻撃をしていたら気がすんだのか、アイツは一人で
せっせと帰ってしまった。

俺の方は軽傷だったので、十代という応援を呼んで、レッド寮に翔を担いで行った。

十代は苦しむ翔の手当てをしようとしても、外傷がなかったためそこから先の処置はできなかつたらしい。

先生に見せようとしてもこの件が露呈するので見せられない。リンはそのことすら計算していたのだろう。

俺をどうとか言っていたが、明らかにアイツの方が計算高く、俺よりも策士である。

俺も軽傷とはいえ、ここまで酷い事態になるとは思わなかった。

洗脳や黒魔術、今回の拷問術など、いったいどこでそんなものを覚えてくるのか、俺には見当すらつかない。それもいつの間にか覚えているのである。

気になったので思い切って聞いてみたら『乙女のひ・み・つ・だよ』とはぐらかされた。ウインク付きで。

そんな恐い秘密なんて・・・と思わずツッコミを入れそうになったが、苦笑いをして黙っておいた。

彼女も年頃の女の子。例え兄といえどそんな子の秘密を探ろうとする方が野暮である。

決して仕草がかわいくて言えなかつたわけではない。

きつとどこかでオカルト系の雑誌でも読んで少し影響されたのであるろう、俺はそう前向きに考えることにした。

そうして俺は明日に備え、眠りについた。

・・・ん？

眠っていたら体が急に重くなったため、目を覚ました。

枕元の時計を見るとまだ夜中の2時である。

『眠れない午前2時・・・』

いきなりどこかで聞いた声が聞こえた。
具体的に言つと身近にいる銀髪少女の声だ。

俺はすかさず部屋の電気を付けた。

「・・・リン、お前なにやってんの？」

「耳鳴りが消えないの・・・」

ぴゃあああああ

「で、なにやってんの？」

「見ての通り」

そう、リンは俺の上にいる。つまり馬乗り状態である。

「いろいろ聞きたいことがあるが、俺は暴走派だ。」

「私は本家が好き。」

「ネタはもういいか。で、なにやってんの？どづじていんの？」

「・・・エクストラゲインって知ってるよね？」

「・・・えくすとらげいん？はて、なんだったつけ？」

「そうだよな。システムの名前なんて忘れちゃったよな。」

だからそれと何の関係が？

「エクストラゲインはね、師匠が弟子の技を覚えられるの」

あー、確か何かのゲームでそんな名前のシステムあったな、って
おい！

「ここまで言えばわかるよね？・・・忍者の次は何を作ろうかな？」

「・・・お前は神にでもなるつもりか？」

「そんなもの興味ないわ。でも・・・今はお兄ちゃんに興味があるかなあ。じゅるり・・・」

「お前は誰の影響を受けたんだ！やめろ！」

「きゃっ!?!」

俺は起き上がって上に乗ってるリンを押し倒す。

「イタタタ・・・」

リンは後頭部を押さえている。どうやら倒れた時に打ってしまったようだ

「お、おい！大丈夫か？」

慌てた俺はそのままの姿勢でリンの頭部に顔を近づけた

「ふふ・・・なんだかんだ言っというてお兄ちゃんも正直なんだね・・・」

「・・・は？」

いったい何を言っているんだろう？

俺はクールになれ！と強く念じた。

おっ？だんだん状態が読めてきた。

- 1 ・倒れたせいで服が乱れ、顔を赤らめているリン
- 2 ・リンに覆い被さるような姿勢の俺
- 3 ・真夜中の午前2時で、野郎の部屋の中
- 4 ・お互いの息がかかるほどの至近距離

これは……!?

「私……お兄ちゃんになら……」

「お前はなに言ってるんだ!」

この一連の流れは事故だ。だがこの経緯を知らない奴が見れば

……俺が部屋に連れて来たリンを押し倒しているにしか見え
ないだろう

マズイ。真夜中とはいえ、この光景を誰かに見られたら

「恭介君・・・真夜中なのにつるさいッスよ・・・って」

「「「あ・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

トイレに起きていたらしい翔が、勝手にドアを開けて・・・見てしまった。

・・・しまった。鍵をかけるのを忘れていた。

「「トランプ発動」」

「「はさみ撃ち!」」

俺達は一瞬で移動し、同時に翔に掌底を放つ

「げふう！！」

「さらに速攻魔法、記憶抹消！！」

今度は後頭部に手刀を放った

それをモロに喰らった翔は、意識を飛ばした。

「さらに強烈な叩き」

やめい！今度こそ翔が死ぬぞ！

「私はサイコデュエリスト」

世はそれを実力行使と言う

「クソッ！せつかく甘い雰囲気だったのに邪魔しやがって……」

最近キャラおかしくない？

「もうすぐ兄と妹の一線を越えられると……」

絶対に越えさせない。俺が。

「……ねえ、私のこと嫌い？」

なんだ？いきなりそんなこと

「ねえ、嫌いなのか？私のことどう思うの？」

・・・今までと雰囲気が違う。それに今にも泣き出しそうだ。

「・・・俺は、お前のことを大切な家族だと思っている。それにこんなかわいい妹を嫌いになんてなれるわけないだろう？」

「家族・・・そう、だよね・・・」

「ん？どうした？」

「ううん、何でもないの。・・・こんな夜遅くにゴメンね。私はこの子部屋に送ってから寮に戻るから」

リンがボコった相手を自分の手で送ってあげるとは珍しい。

「翔のことは俺がやっつくから。お前は早く戻って休め」

「お兄ちゃんを起こして勝手に騒いだのは私。だから、私に任せて」

「・・・わかった。だがその代わりに俺がお前を寮まで送って行く」

「・・・いいのよ。そんな心配しなくても。私なら一瞬で寮まで戻れるんだから」

そうか・・・確かあの二人の能力をコピーしたとか言ってたな

「それじゃあまたね。おやすみなさい・・・」

リンはそう言い残すと、翔を連れて消えてしまった。
消えられたら送ってやることもできない。俺は仕方なく電気を消して寝ることにした。

しかし・・・あんな寂しそうな顔をするアイツを俺は初めて見たかもしれない。

「家族……かあ……」

その頃、リンはレッド寮のすぐ近くを歩いていた。

「あんな演技に騙されちゃって……」

あの時、確かにリンは翔を連れて消えた。だが、実際は翔を部屋まで送り届けただけだ。

「私の場合はギャグの補正もその効果も永続じゃないって言ったのに……ばか」

さっきのは明らかにギャグの話じゃなかったじゃない……

今の彼女は、ごく普通の女の子、朝霧リン。朝霧恭介の義理の妹であると同時に、彼の幼馴染み。

先程とは雰囲気違っていたのはギャグなんかではなく、普通の少女に戻ったにすぎない。

「私なんかじゃ……。うん、きっとそうね……」

夜道を歩く少女は、その頬を涙で濡らしていた。

リンが帰り、俺も眠りについてからしばらく経った時、また体に重い何かが乗った

目を開けるとうつすらと銀髪が見える。

「ふぁ……。リンか……。？今度は何の用で来たんだ？」

まったく。一日に何度襲撃すれば気が済むのだろうか・・・

『なになんて・・・？』

・・・ん？声が違う？それにリンってこんな髪長かったっけ？

『うん・・・夜這い？』

なんかとんでもない言葉を聞き、俺は意識を覚醒させる。

銀の長髪、白を基調とした服に・・・翼。

「ま、まさか！？お前は

「

『初めまして。なんだけど、いまさら自己紹介なんて……いらないよね?』

「『光神テテユス』!？」

『ご名答。ご褒美に一枚ドローをプレゼント。』

そうやってカードを渡してきた。

またお前か……オネスト……

「なんか軽い感じがするんだが……」

『緊張をほぐすためにフレンドリーになれって言われたの』

そりゃまあどうも。

『今回は話があつて来たんだけど・・・挨拶代わりのキスの一つでも・・・』

テテユスはいきなり俺に顔を近づけてくる。

させるか！つて・・・アレ？

疑問に思ったものの時既に遅し。俺は先程のリンと同じ様にテテユスを押し倒していた。

『なるほど・・・妹ちゃんは受けの方が良いけどお兄ちゃんはおくまで受けには回らないと・・・メモメモ』

「メモするなああああ！てかなんの話だあああああ！」

『お姉さんはキミの好きでいいぞ。前でも後ろでも・・・』

「だからなんの話だあああ！」

俺はテテユスの肩を掴み思いつきり頭を揺さぶる。

『っと・・・もう少し遊びたかったけど、到着したみたいだね。』

・・・は？到着？

「はあっ、はあっ・・・お兄ちゃん・・・私に、隠れて、何をしてるの、かな？・・・かな？」

玄関の方を見ると疲れているのか、全身で息をするリンがいた。もちろん鍵は閉まったままだ。

「・・・なんでいんの？」

「夜這いと聞いて俺参上！・・・女子寮から、飛んで来たのよ・・・」

リンは忍者二人の高速移動と『どんな場所でも不法侵入できる程度の能力』を使って来たらしい。

「はあ、はあ、私の場合・・・あの子達のように・・・体力なんてないから・・・」

そういえばエクストラゲインは技だけであって、弟子の身体能力はほとんど関係なかったな。
弟子の能力を受け取れることはできるが微々たるものであったはずだ。

それでもあの高速移動は並大抵の体力じゃすぐに力尽きるだろう。
少なくとも俺の場合、初動のみで力を使い果たすと思われる。

「私が呼んだのよ。言ったでしょ？話に来たって。あなた達と直接話がしたかったの。」

「・・・って、もしかしてテテユス!？」

テテユスの存在に驚くリン

「おいおい・・・たった今気付いたのかよ」

夜這いとか言い出すテテユスもそうだが、それを女子寮で聞いて飛んで来たというリンにも驚きである。

こいつ・・・リンが飛んで来ることを知ってて言ったのか？

俺の周りにはどうしてこいつも計算高いやつが・・・

『私はあなた達の精霊になるために来た。・・・理由？私を使い続けてくれる人がいる。それで充分でしょう?』

先程のふざけた感じではなく、厳格な女神として目の前に立つ。明

らかに目つきが違う。

「使い続けてって・・・俺はまだあんたら天使を二回しか使ってないぜ？」

『ふふ、誤魔化さなくていいのよ。あなた達は別の世界の人間。それだけでも興味深いのに、あなたは前の世界でも天使族を長く使ってきた。力を貸さない理由はないわ』

全てお見通しってことか？

『その妹さんにはこの前お世話になったから個人的なお話がいんだけど・・・』

「うっ・・・」

「この前って偽事件か？でもあの時はまだ・・・」

『全部見てたわよ。エアトスなんてカンカンだったんだから。・・・
私がおとこ抑えたんだけどね。』

「あつっ！」

リンがダメージを受けてるだど!?

『私なんか殺されるわ利用されるわ・・・。それに比べて直接手を
下せたあなたは羨ましいなって・・・。』

「がふう!!！」

とうとう吐血した!?

『全てはデュエルの中での話だから基本的に恨みっこ無しの世界な
んだけど、その娘からは特別な、恨みや妬みのような何かを感じた。

・・・あなた、前の世界で私の効果で何かやってたでしょ？」

「う……。た、大量の手札でワンターンキルを少々……」

「少々つてレベルじゃないでしょ……。ドロー成功したら100%死亡確定だったじゃない……」

体力を使つて疲労した状態に先程の吐血。ふらふらした足取りで、今にも倒れそうだ。

『ワンキルがどうか知らないけど、それで狙われる私の身にもなつてくれない？デッキ構築はあなたのお兄さんが決めてるのよ？私なんか完璧なとばっちりじゃないの』

「ぐはぁー!」

リングが倒された！なんかビクビクしてるけど……

『これが精霊の力よ。恨みや絶望を言霊として対象へ直接注ぎ込む。……妹のリンちゃん言葉責めに弱いっど……』

俺は何も感じなかったが、リンはその絶望とやらの力をモロに喰らったのだろう。

テテユスのセリフからして先程のダメージや吐血は、その言霊の影響と思われる。

間違いなく天使の使うような技ではないが、恐らく完全な状態のリンでも防ぎきれないだろう。

そしてまた変なことをメモしている。明らかに言葉責めじゃないだろうに……

『今回は特別にこれくらいで許してあげる。あなた達二人の力になるために来たんだもの』

「ふふふ……私も舐められたものね……。あなたはどうかしら……。？冗談とはいえ、夜這いとか言いだしたり……」

『ぐううっ！』これは……。！？』

リンの言葉にいきなり苦しむテュス

「いきなりキスを迫ったり・・・前とか後るとか・・・女神様にするようなことじゃないと思うけど・・・？」

『こ、これは・・・まさか死の言葉・・・！？こ、こんな・・・うあああああ！』

「いーかげんにせい！」

「きゃん！」

未だにブツブツと言うリンの頭を叩いて中断させる。

よほど苦しかったのか、女神様は全身から汗を流している。

「チッ！もう少しで息の根を・・・」

『はあ、はあ・・・。私が精霊じゃなかったら死んでたわ・・・！』

なんだか二人は恐ろしいことを言っている

「ふふ・・・私は攻撃を受けた時、それを自分のものにできるの。殺る時は一撃で殺らないところなるわよ？」

『・・・いつたいそんな特技、どこで・・・？』

その言葉には俺も同じだ。正直リンが恐ろしい。

「ギャグ補正は無限の可能性を秘めている」

『ぐっ・・・そういうことか・・・！だめ・・・、もう・・・』

体力の限界らしく、倒れそうになった彼女を支えてやった。

「ふふ・・・お兄ちゃんに手を出そうとした罰よ。それじゃあ帰るから。また明日ね？」

そしてリンは消えて行った。

「・・・行つたか。」

『ギャグ補正さえなければいい娘なのにね・・・』

うおっ！復活した!？

『私の場合は付き合っただけのお遊びよ。あの娘は・・・寂しがり屋なのよ。さっきだって・・・』

なに？さっき？

『ギャグ補正だのなんだの言ってるけど、あの娘は普通の女の子なのよ。恋もすれば、泣きもする。普段はとても弱い娘なのよ』

俺の腕の中で呟くように語りかけてくる。

『デュエルでは普通に力を貸すから。コンボに利用しても墓地に送ってもそれは自由。今まで通りやって頂戴。またね、マスター』

その言葉を残して彼女は消えていった。

「お、おい・・・」

まだ彼女に言いたいことはあったが、消えてしまったので話をしようがない。

なんだか俺に集まる女性は帰る時に消えるらしい。

さすがに睡魔には勝てない。俺は倒れるように眠りについた。

「恭介のばか・・・!」

寮に帰り、ベッドに隠れるように入り込んだ少女は呟く。

「テテユスに迫られたからってあんなニヤけちゃって・・・」

ずっと愛用してたカードの精霊が目の前に現れる。

彼女は美人だ。いきなり出てきて驚いていただけで、実際はかなり嬉しかったのだろう。

その気持ちもわからなくはない。だが・・・

「私の時は・・・あんな反応してくれなかった・・・」

部屋に着いた時を思い出す。その時恭介は顔を真っ赤にしながら夢中に彼女を揺さぶっていた。

対して自分の時は少し赤くなりながらも冷静を保っていた。

頭を打った時は心配してくれた。だけど・・・

「恭介のばかばかり・・・！」

朝霧恭介の幼馴染みは枕を濡らしながら眠りについた。

第五話「試験前夜」(後書き)

五話終了です。

そろそろ精霊出すか！ということで一応恭介の精霊でテテユスです。あと普段暴走させがちなリンを普通の女の子に。彼女だって寂しくて泣く時だってあるはずです。

リンはギャグばかりじゃないってところを書こうと努力したものの、やはり私の中ではネタの宝庫になってしまっそうです。助けてください。

リンの精霊もそのうち出すかもしれません。

次回は試験当日。シンク口解禁です。

うまく書けるかわかりませんが。

それでは。

第六話「月一試験！」（前書き）

前回からの続きです。

ツッコミ所があるかもしれませんがシンクク口解禁です。

それではどうぞ。

第六話「月一試験！」

朝になり、目を覚ました俺は準備を始める。

「うーん・・・あの時のアレは夢か？」

『残念ながら夢じゃないのだわ』

「だよなー。なんか部屋中血だらけだし・・・」

あの時リンが吐いたらしき血が部屋を汚していた。

濡らした布巾で拭くのだが、いったいどれくらいの量を吐いたのだろうか。

床はもちろん、壁や家具まで血に染まっていた。正直めんどくさい。

でも拭かないで放置しておいたらどんな問題が起きるか。それは容易に想像できる。

「間違いなく殺人事件の現場だよな」

『ダイイングメッセージは？』

「『私の幼馴染みを奪ったあの女を絶対に許さない……！』……
だよ。血を拭いたら出てきた」

『……ものすごく手の凝んだメッセージね』

「ん？この字、拭いても消えないぞ。」

『その字は魔術の類のものだから、そう簡単には消えないわよ。でも消さないとそのうち何らかの魔術が発動するかも……』

「何らかのって何だかわかるか？」

『正確にはわからないけど文面からして強力な呪いってところかしら』

「本当に手の凝んでる!」

俺は死ぬ気で擦り続けてようやく消すことができた。

「・・・あと5分で発動してた。・・・解除おめでとう」

何故か後ろにいるリンが言った。もちろん中に入れた覚えなんてない。

「ツッコミは後にして・・・何を仕掛けたんだ?」

「その泥棒猫への呪いよ。対象を永遠に深い闇へと閉じ込めるの。カードで言えば《デモンズ・チェーン》ってところかしら」

確かあのカードは対象の全てを制限する、《闇の呪縛》の上位カードだ。

そんなもん喰らったら自力ではどうしようもない。

『仕掛けたのはあなたが血を吐いた時に？』

「その後よ。私は部屋に戻ったあと、あなたへの恨みなどの暗い感情の全てを呪いに込めた。・・・それを消された今は何とも思っていないから安心して頂戴。仲良くしましょう？」

リンはそう言ってテテユスに手を差し、彼女も応じる。もちろん畏なんて仕掛けていない。

リンからすれば邪魔な存在であったテテユスを呪いで排除できれば良し、感付かれて呪いを解除されても共に歩めば良しの二段構えだったのだろう。

女の嫉妬は恐ろしい・・・

「さてと・・・そろそろ時間だから行きましょ。今日はお楽しみの披露目会でしょ？」

みんな必死な試験をお披露目会とは・・・

「例の如く恭介は『ギリギリ間違い』の答案を連発するんでしょ？あと一歩なのに先生のサービスでも得点にならない答え……。私としては普通に正解するよりもそっちの方が頭使うと思うんだけどなあ……」

「あれは正直難しいんだ。俺でさえかなり悩む時もある。・・・仕方ない時は正解を書き込むんだがな」

「その正解が私ですら悩んだ末に間違えた一番難しい問題だった、なんて時があったわよね。・・・私も試してみたけど無理だったわ。考える時間が足りなさすぎる」

「あれは失敗したな。誰も正解できないような難しい問題だなんて気付かなかったから言い訳に苦労した。・・・お前の場合無理して間違える必要なんてないんだし、普通に優等生してればいいんだよ」

現実での俺の成績は全体的にせいぜい中の下で、リンは他のやつと学年のトップを争っていた。

中学の卒業時、一度だけでも競ってみたいということでした。リンが頼んで先生達に特別にテストを作って貰った時があった。必死に説得するリンの姿と、しぶしぶながら作った先生達に失礼だったので俺は真面目にやった。

結果は五教科で、優等生だったリンは460点、今までせいぜい中間だった俺が480点。その結果に先生達は驚いて、リンは満足そうに笑っていた。

そして当然俺はその後何時間もの間先生達からの有り難い説教を頂いた。

「・・・懐かしいな」

俺はリンの頭をくしゃくしゃに撫でてやる

「わわっ！ちょっと!?!」

いきなりやられて困惑気味な妹。でもどこか嬉しそうだ。

「・・・こんな風にのんびり話すなんて久しぶりだもんね・・・」

『兄妹揃ってのんびりと懐かしんでるところ悪いけどさ、もう時間ないよ?』

「はっ……!」

「……恭兄、荷物持った?」

「……ああ、バッチリだ」

「私の荷物もよろしく。しっかり荷物掴んでてね?」

「……任せとけ」

そう言つとリンは俺を両手で抱く。
いわゆるお姫様抱っこである。

普通は逆なんだろうが、時間がない今はどうでもいい。

「……全速力で行くわよ。落ちないでね?」

そう聞こえた瞬間には、俺はレッド寮から姿を消していた・・・

「はあ、はあ、・・・相変わらず燃費の悪い・・・」

例の如く高速移動による代償で、壁に寄りかかって必死に息をしている

「・・・俺は花畑が見えたよ・・・」

試験開始まで、まだまだ時間がある。

充分間に合ったため、俺は外でリンの回復を待っていた。

「でも普通に走ってたら間に合わなかっただろうから。ありがとな。」

「いいのよ・・・それは私も同じだから・・・」

・・・っと。お？

「二人揃って何をしてるの？」

俺達に気付いたらしい明日香が声をかけてきた。

「んー・・・この通り。急いで来たから疲れたリンの回復待ち」

もちろん嘘などついてはいない

「その割にはあなたは疲れていないのね。・・・この後の試験大丈夫なの？」

「俺は全然疲れてないけど・・・。リンは普通に昔から優等生だし、問題ないはずだ」

「いえ、私はあなたの方、筆記試験は大丈夫なのかって聞いたんだけど・・・。」

リンが優等生なのは同じブルーの明日香も知っているのだろう。俺のことはこの前リンが盛大にバラした筈だが・・・？

「俺の方はぼちぼち。とりあえず時間いっぱい考え抜くつもりだ」

もちろん自然な感じな間違えを考えるのである。
普通にやれば十分とわからないだろう。

「そう……。それじゃあ私は行くわ。試験が終わったら感想でも聞きに来るから」

「おう。またな」

「ふう……。お前、明日香に何か言ったのか？」

「別に……。私の話を信じてないだけじゃない？」

「そりゃそうだな。いくらお前が言ってたとはいえ、優等生のお前よりも頭が良いなんて話簡単に信じるわけないもんな」

面倒なことになった。こりゃあ真面目に不正解を考えなければ感付かれるぞ……

「さて・・・私は大体体力回復したから、もう行きましょ」

「よし、行くか！」

いろいろサンダーとかあったが試験開始。

俺は宣言通り時間ギリギリまでベストな答えを考え抜いた。・・・
もちろん不正解的な意味で。

「お疲れさま。どうだったの？試験は？」

「お、明日香か。そうだな。時間いっぱい頑張ってみたが、大体四割〜五割程度ってとこかな？」

もちろん全て正解なんてわかってたうえでの不正解。その気になったら正確な点数すら導き出せる

「そうなの？あまり良くなかったじゃない」

「ん〜。普段の俺としてはこれくらいが普通かな〜」

「それで？リンは？」

「ふふふ・・・余裕で全問正解は手堅い私にデキなんて聞くわけ？」

このくらいの問題、リンなら全問クリアできて当然だろう。それくらい楽だった。・・・正解は。

「余裕で全問とはさすがね・・・。」

嘘は言っていないとは感じたらしい。実際に優等生なリンの言葉は説教力がある。

「この後は実技試験だが・・・。実は俺達からのお楽しみがある」

「お楽しみ？あなた達からの？」

「うふふふ・・・私達はこの時をずっと待ってたの。ワンターニキルはもちろんだけど、それよりも驚く、素晴らしいものを見せてあげる」

普段はあまりワンキルなどはしないリンから、そんな宣言をされた明日香は驚く。

「今の俺達の補正はマックスだ」

「せいぜい私達と当たらないことを祈るのね・・・！それじゃあまたね」

リンよ・・・また黒いオーラが・・・

啞然とする明日香を残して俺達は会場へと向かって行った。

「月一試験の実技を始めるノオ〜ネ！」

特徴的なあの喋り方で試験開始になった。

十代はサンダー相手だし・・・俺の相手は誰だろうか？

『主さま・・・』

「どしたの？今はあんたら呼んでない筈だけど？」

『あの教師から、何やら不穏な気配を感じます。恭介殿に、ご利用なさるようになら・・・』

「教師ってクロノス？・・・そういえばそんな気配がするわね。そういうことならありがとう。今回は不問にする。・・・そうね。ついでだから一つ頼んでいいかしら？あんたらの出番がない時でいいから」

『リン様の仰せのままに・・・！』

そして二人は消えていった。

「んで？あの二人はなんだって？」

「どつやら原作の十代と同じように恭介も何らかの操作がされてるみたいね。私のことぶっ倒したじゃない」

「あゝ。偽事件ってクロノスセンスの企みだったっけ？あの人工リフト意識あるみたいだもんな」

「操作っていつてもせいぜいモブのブルーの上級生ってところよ。むしろ目立ててラッキーじゃない。派手にやれるわ」

「そういうことなら大歓迎だな。派手にコンボ決めてやろう」

「次はオシリス・レッドの朝霧恭介！」

「さて、呼ばれたな。行くぞ、テテユス！」

『あのコンボね。私に遠慮なくぶつとばしていいわよ』

そう言ってくれるとありがたい。

「さて……と。始めますか。よろしくです」

やはりブルー生徒。相手はドロップアウトだの何だと罵倒してくる。せいぜい吠えてろ。

「「デュエル!!」」

「先攻はどうぞ。後攻ワンキル決めるんで」

「ぐっ……きさまっ!!」

もしかして怒ってる？

「いいだろう。僕が先攻だ!ドロー!!」

手札は、っと……ウホッいい引き……

「僕はモンスターをセット、カードを二枚セットして終了だ」

「二伏せか……嵐こないかな」

「俺のターンだ。ドロー！」

ウホッ！

「手札から《大嵐》発動。二枚の伏せを破壊する！」

現実では《スターライト・ロード》とかが飛んでくるがここではそんなの無いし気にならない。・・・ミラフォと《奈落の落とし穴》か。奈落は危ないな

「手札から《ヘカテリス》の効果。ヴァルハラをサーチし、発動。来い、テテユス！」

『さっそく出番ね』

精霊になってから初めての出番だ

「おっ、あれってもしかして精霊か？」

十代は気付いたようだ

「つい数時間前に押し掛けてきたのよ・・・」

リンが十代に適当に説明をする

「天使族？朝霧はシモツチじゃあ・・・」

「ああ、三沢だっけ？あんたあの時いなかったものね。元々天使使いなよ。恭介は」

「そういうことが・・・」

どうやらリンの一言で三沢は恭介の考えを理解したらしい

「今から始まるのはテテユスの効果による大量ドロ。ソリティアとも言われかねないほどの強力コンボによるワンターンキルよ」

解説ご苦労。つまり、そういうことだ。

「俺はカードを一枚伏せ、《リロード》を発動。手札一枚を戻し、ドロする。」

「テテユスの効果だ。《紫光の宣告者》を見せてドロ、《緑光の宣告者》ドロ、《ダーク・ヴァルキリア》ドロ、《ヘカテリス》《ドロ、《トラスト・ガーディアン》ドロ、《朱光の宣告者》ドロ、《アテナ》ドロ、《ジェルエンデュオ》ドロ、《大天使クリスティア》ドロ。」

「・・・止まった？一枚から一気に十枚になるまでドロするとは・・・」

「まだよ。まだこんなものじゃないわ」

「ヘカテリス効果でヴァルハラサーチ。更に《打ち出の小槌》発動。ヴァルハラ以外の八枚を戻す。」

「大量に引いた天使をデッキに戻し、その枚数分手札に加える。これじゃ一枚戻しても変わらないけど、たくさん戻すのはテテユスの邪魔になる魔法、罫をデッキから回収する役割を持っているのよ」

「センパイ、お願いしますからサレンダーはしないでくださいよ？デッキから八枚ドロ！」

魔法カードの枚数は三枚。・・・上出来だ！

「また天使を見せてドローします。《神聖なる魂》を見せドロー！」

俺がドローするなか、ブルーの先輩は呆然としている

「魔法を引いたため、ドロー終了。最初に伏せていた小槌を發動して、増えた手札の天使を戻します。」

もう会場が静まりかえってしまった。さすがにやり過ぎか？

「……ドロー終了！」

ドローを繰り返した俺のデッキはもう残りが二枚になってしまった。残り二枚は、さすがにあり得ないが、トドメをさせなかった時の保険だ。

「さて……手札から《アテナ》二枚、《墮天使スperlビア》、《大天使クリスティア》、《光神機・轟龍》をコストに捨てて、《最終戦争》発動だ！」

莫大な手札コストを要求するリセットカードだ。なに？黒薔薇使え

？お断りです

「テテユス・・・すまないな。利用する形で・・・」

『マスターの勝利のためならば、この身が滅びようと・・・。遠慮なくぶっばなせって言ったでしょ？じゃ、おやすみ』

テテユスがそう言った直後、フィールド場の全てのカードが吹き飛んだ。

相手のカードは《魂を削る死霊》。厄介なやつだったな

「全て消えたことだし、再開だ。手札からヴァルハラ発動、《ダーク・ヴァルキリア》を特殊召喚。《デビルズ・サンクチュアリ》でトークン生成。更に《光神化》で《トラスト・ガーディアン》を特殊召喚」

「おやや、そのメンツはあれか・・・」

「俺はチューナーモンスターの《トラスト・ガーディアン》と他の二体をチューニング！」

「墓地に送った！？いつたいなにを？」

「……見せてやろう。シンクロ召喚！現れる、《混沌の女神》！」

「シンクロ召喚だって！？あれはいつたい……？」

「あのモンスターは《カオス・ゴッデス - 混沌の女神》。場の光属性のチューナーと言われるモンスターと、闇属性のモンスターを送ることで特殊召喚できる。」

「……リン、あなた知ってるの？」

「ええ……。あいつは召喚条件が厳しくてね。出せること自体が稀なの。」

「俺はこいつの効果を使う。手札から光属性モンスター、《アテナ》を墓地に送り、墓地の星5以上の闇属性モンスター、《墮天使スペルビア》を特殊召喚する！」

「あの効果で蘇生したモンスターはシンクロの素材にすることができないけど、スペルビアなら意味はないわ」

「スペルビアの効果でアテナを特殊召喚！さらにアテナ効果でスペルビアを墓地に送り、蘇生！効果で600ダメージを与え、アテナを特殊召喚、600ダメージを与える。再度スペルビアを蘇生させ、クリスティアを墓地から特殊召喚！計2400ダメージを与える。全ての合計で3600ダメージだ」

相手

LP400

「そのままアテナ蘇生で焼けばいいのに・・・」

「長い間待たせてすまなかったな。後は一瞬だから、な？・・・バトルだ！全員でダイレクトアタック！」

「うわあああああ！」

相手

LP0

「合計17000ダメージの特殊召喚封じ……か。凶悪さは相変わらずってところね」

「しょ……勝者、朝霧恭介……」

んお？会場が静かなままだ。何故だ？華麗なコンボをわざわざシンクロを絡めて決めたのに……

「存在すら知られてないカード使ってオーバーキル決めれば当然だつての……ばか。」

「よー！どうだ？この俺の華麗なるプレイングはあ！」

「あんだ……派手に決めすぎなのよ……！もう少し自重しなさいって！」

「アタタタ！ギブギブ！ぐおおお！？」

「あなた・・・さっきのカードって・・・」

「つ、次！オベリスク・ブルー！朝霧リン！」

「あら、私の番ね・・・。私が戻るまで、説明は無しよ」

「よ、よろしくね・・・。」

「私の兄貴のデュエル、どうだった？あなたも・・・さっきのみに1ターンで沈めてあげるわ・・・！」

「「デュエル！！」」

「さあ、先攻はどうするの！？」

「わわ、先攻、私のターン！」

あいつ……驚かして先攻取らせやがった……

「私は《豊穰のアルテミス》を召喚、三枚伏せてターンエンド」

「ふふ……【エンジェル・パーミッション】？でも……無駄、無駄！私のターン！」

「まずは《大寒波》を発動！」

「チエーン！《マジック・ジャマー》で無効、効果で1ドロー！」

「残念、二枚目よ……。《大嵐》！」

「そんな……！」

「ふうん……。《天罰》と《昇天の黒角笛》か……」

大寒波は魔法、罨をセツト、発動の一切を封じるカード。パーミッシヨンの相手に見てみたら何としても阻止したいカードだろう。だがリンのデツキも最初は魔法を使わなければうまく回らない。最初の大寒波は大嵐を通すための罨か・・・

「私は《魔轟神クシャノ》を召喚。手札から《魔轟神グリムロ》の効果を発動。《魔轟神クルス》をサーチする」

グリムロはどんな魔轟神でも手札に加えられる、魔轟神のキーカードだ。そして・・・

「手札から《死者転生》を発動。コストとしてクルスを捨てる。回収対象は今捨てた《魔轟神クルス》！」

「ええ!？」

相手は困惑している。今捨てたカードを回収するなんて、狙いがわからない以上は当然の反応だろう

「クルスの効果。捨てられた時に墓地の星4以下の魔轟神を蘇生させる。これは強制効果。よってタイミングは逃さない。グリムロを特殊召喚！」

クルスは強制効果のため、コストでも墓地に捨てる効果ならば蘇生できる

「言い忘れてたけど、《魔轟神クシャノ》はチューナーなの……。クシャノとグリムロをチューニング!」

「あの子もシンクロ召喚を!？」

「……来い! 《エンシエント・ホーリー・ワイバーン》!」

『我を先に召喚したのはそなただったか……』

「なに!？アイツも精霊か!？」

『あゝ。紹介忘れてたわ。私と一緒に来てたのよ。あなた達のフェイバリットでしょ？力を貸したいって』

「ふふ……あなたも精霊だったの……？よろしくね」

『・・・デュエルの時はお主に手を貸そう。それ以外は邪魔であるわ。』

「そうね、賑やかっつてレベルは超えてるものね。・・・ねえ、呼び名は『ホーリエ』でいい？」

『・・・好きにするといい。我は、お主らの命に従おう』

「じゃあ決定ね。今日は気分がいいわ……。さっさと終わらせてあげる。・・・墓地のクシャノの効果。手札のクシャノ以外の魔轟神を捨ててクシャノを手札に加える！私が捨てるのはクルス！クルスでグリム口を蘇生！」

・・・決まっつたな

「そしてバトルフェイズ！グリム口でアルテミスを攻撃！ダメージ計算時に《オネスト》の効果発動！相手の攻撃力分をグリム口に加える！」

「きゃっ！」

相手

LP2300

「ホーリエで攻撃！これでトドメよ！」

「なぜ？あのモンスターの攻撃力は2100のはずじゃ・・・？」

「いや、アイツは自分と相手のライフの差分だけ攻撃力が上下するんだ。1000上回っていれば3100で、3000の場合は5100にもなる。逆の場合は下がるだけだが、守備は変わらない。そして今の攻撃力は3800！」

「アハハハハ！死になさい！」

「きゃあああ！」

相手

L P O

「しよ、勝者、朝霧リン！」

「……ついテンション上がったわ」

元に戻ったリンが帰ってきた

「スツゲーな！なんだあのカッコイイやつ！アイツも精霊だったんだな！」

「……俺も今知らされたよ。」

『そつえばあなたは見えるんだったわね。私は光神テテユス。この子達の精霊よ』

「おう！俺は遊城十代、十代だ。よろしくな！」

「恭介、あの子が名前はホーリエで良いってさ」

「なんだ？ホーリエって？」

エンシエントホーリーワイバーンじゃあ長いからもじってホーリエ

である。元ネタはとある人工精霊だが

「・・・あなた達。あのカード、シンクロってなんなの？」

「・・・シンクロはチューナーと書かれたカードと他のカードを墓地に送る、または除外し、そのレベルの合計分と同じレベルのモンスターを特殊召喚する召喚方法だ」

「簡単に言えばフィールドからの融合召喚よ。でもその素材になるモンスターは指定されてないものの方が多いの」

「指定なしの場合、違う種族、違う属性同士でもレベルが合えば召喚できる。容易に召喚できるうえ、効果も強力なやつが多い」

「でも、私達は自分達でシンクロ召喚のルールを決めてるから安心していいよ。効果が強すぎるやつは勝手に制限にしたり、禁止にしているから」

「好き放題じゃあ対等じゃないものな。代わりとは言わないが、俺達は融合を使うデッキは持ってないんだ。・・・どんな種類がいるかはお楽しみってことにしといてくれ。それじゃあちよいと席を外すぜ」

残りの試験は十代くらいだ。十代は原作通りに万丈目に勝って終わるだろう。

・・・試合が気になるが、俺達は逃げるようにあいつらから離れた。

「シンクロ召喚大成功！・・・で、いいの？」

「んー？俺の場合は一応成功かな？と思ってる」

「もっと派手さを求めたかったけどさ、派手って氷結界シリーズじゃない？」

「脚光を浴びたいならトリシューラかグングニールだと俺は思う。氷結界の派手さは異常」

「私も同じく。でも好きなのはデスドラゴン」

「アイツだけは無いだろ・・・」

第六話「月一試験！」（後書き）

一応終わりですが次回に続けます。

それにしてもワンキルしすぎですよ…。朝霧兄妹にはそろそろ自重させなければ！

相手のカードはどこまで出しているのかよくわかっていないのでデッキをうまく組んであげることができていません。

アドバイスやおかしい所等あればよろしく願います。

それでは。

第七話「試合後」(前書き)

七話です。

試験での試合後、退出した恭介とリンのちょっとしたお話。

ちょっと短いですが前回からの続きです。

それではどうぞ。

第七話「試合後」

「……もうすぐ試験が終わるかな？」

「そうだな。……リン、俺に面白い案があるんだ」

「なによ？面白いことって？」

「今回のシンクロよりも奇抜的なアイデアだ。ちょっと耳貸せ。……
「ジュンジュンジュン」

「えっ！？あはっ！あっははははは！イイツ！それ良い！すごく面白い！やる、今すぐやる！」

面白いと思って提案したら思いの外大ウケした

「さすがに今すぐは無理だし、それでもアイツ次第だから成功するかどうか……」

「そつ？むこうだって私らに聞きたいことがあるはずだし、そんな時にチヨイとデュエルすればイイのよ。負けたら絶対服従の条件付きで」

「いや、さすがに服従はないだろ……。そんな趣味は持ってないぞ……」

「冗談よ、冗談。勝てたらお話する、負けたら一つ聞いて欲しいことがある、くらいに柔い条件にしとくのよ」

「その後にその要求をして、断わられても敗者は勝者に従う……と」

「フフ……。そついうことよ。」

「まあ俺達が本気出したら勝てるデュエリストなんてほとんどいないだし、この話は決まったようなもんか」

シンクロ召喚に、最新カード。負けるほうが珍しいくらいだ

「そのことなんだケド、その・・・少し・・・自重しない？真面目な試合はワンキルしかしてない気がするんだ・・・」

「・・・自重だつて？」

「・・・ここで使ったデツキを挙げてみて」

「シモツチと天使。授業ではシモツチで、天使の現在の構築は最終天使だな」

「・・・私は最初と試験では魔轟神を使ったけど、授業中ではガジエツトよ。・・・少しおかしいとは思わない？」

「ん〜。天使は強すぎると思ったが」

「あのね、天使だけじゃなくて2つともおかしいのよ！シモツチは4000だと先攻ワンキル可能、天使はさっきやった通りだし！」

「いや、リンの今日シンクロを解禁した魔轟神はともかく、ガジエツトはかなり強かったじゃないか」

「それは相性の問題よ！私のガジェットには弾圧も無いし、相手に守備で固められちゃ厳しいんだから！」

「いや、俺のシモツチだつて事故れば何もできずに負けてたぞ？天使もテユスがいないとそれだけでかなり厳しいし」

「事故が起きたら負けるのは私も同じよ！天使なんて20000オーバーのやつらがホイホイ出るし！4000ライフで相手にする立場にもなつてよ！」

「そんなこと言ってるがな・・・お前もあの二つのデッキはあるんだろ？」

「・・・もちろんあるし、それ以外にもあるわよ。そういう恭介だつてまだ隠し持ってるじゃない」

「ああ。まだあるし、他にも使おうとはしている。だが主力は天使だ。」

「・・・その天使を自重しなさいって言ってるの！私のガジェットは単体のパワーが低いから殴り合いになって負けかけることなんて全然珍しくない。でも天使の場合、大抵が上級だから除去されない限り好き放題できるでしょ！？」

「そういえば殴られたのはお前とやった時だけだな」

「それに天使は少しでもパーツを変えれば全然違うタイプのデッキになる。除去魔法に耐性を付けることも」

「そこが天使族デッキのメリットだ」

「メリットだ。じゃないわよ！魔法と罫を入れ替えるだけでデッキタイプが変わる種族なんてほとんどないわよ！」

「デッキタイプが変わると言っても基本が最上級のビートであることには変わりはない。あとテテユス。」

「その最上級が一番の問題なんだって言ってるの！テテユスを止めればデッキが回らないとは私も言ったけど、それも構築変えれば問題ないはずよ！」

「だが最上級であるが故にロックに弱い」

「ふざけないで・・・！ロックくらい普通のデッキでも破れるし、そのデッキにはアテナがいる。ロック相手でもバーンでの勝利ができるでしょう！？同じ構築でもビートとバーンの使い分けが無理な

「くできる天使が異常なのよ！」

「そりゃそうだが、お前・・・なんでそんな・・・」

「怒ってるのよ！アンタがワンキルばかりで全然自重しないから！私のデュエルなんて見てなかったでしょうけど、私は自重して相手と対等にやりあえるガジェットを使ってきたのよ！」

「・・・でもそのガジェットってアイツ入ってるんだろ？」

「・・・《古代の機械巨竜》でしょ？入ってるわ。《歯車街》も、《テラ・フォーミング》だって入れてある。だけど歯車街は使っていないわ」

「・・・なんで入れてあるやつを使わないんだ？」

「歯車街と巨竜の組み合わせが強すぎるからよ。恭介だってあんなの連続で出されたら太刀打ちできないでしょう？」

「そりゃそうだが、せっかく入れてあつて強いんだから・・・」

「・・・恭介、あなたは一番大切なことを忘れてる。ここはアカデミアなのよ？現実の大会なんかじゃないの。必死に頑張ってる子達には悪いけど、ここはデュエルを楽しむための場所。確かに勝つことは大事。だけどそれと楽しむことは別。勝つことばかりを追い求めてちゃダメなのよ・・・」

「リン、お前・・・」

「・・・フフ、変わったでしょ？私も来たとき、最初はただ勝つことばかりだった。けれど、実技の授業とか、試験とか。必死に頑張ってる姿や、楽しんでる姿を見てね、思い出したの・・・ねえ、最初組んだデッキの内容って覚えてる？」

「・・・通常モンスターがたくさん入ってたり、意味もなく枚数が60枚だったり・・・」

「そう。そして勝っても負けても笑いあってた・・・。あなたは遊城十代をどう見てる？アニメの主人公？いざというときの引きが強い男の子？・・・私は違うと思う。よく言われるセリフだけど、誰よりも純粹にデュエルを楽しんでいる。私はそう思うわ」

「リン・・・」

「私はあなたに天使を使うなどは言わない。ワンキルをするなども言わない。だけど・・・お互いに楽しむ気持ちだけは忘れないで」

試験・・・いや、私とのデュエルでは遠慮なく使っていていいから

リンは寂しげな表情を浮かべて呟く

「・・・ううん、やっぱりこの話は忘れて。今まで通りにやるう？・・・私がどうにかしてたわ」

「・・・先に戻るね」

リンは会場へと引き返して行く

「・・・。。。」

『・・・あの子は・・・以前はあなたと自分にあつたものが、無くなってしまったことに悲しんでいる・・・。そして、それはもう二度と手にすることが叶わないということにも・・・』

「いったいいつから勝つことにこだわっていたのだろうか？いつからデッキの枚数を40枚に近づけるようになったのか？以前強いと思っていたカードが弱いと感じるようになったのはいつからか？ワンターンキルを積極的に狙うようになったのは・・・」

『純粹に楽しむ。だがそれはもう二度とできないコト』

確かに今でも昔のように60枚のデッキや、大量にバニラモンスターを積んだりはできるだろう。
だがそれを純粹に、心の底から楽しむことや、強いと思えることは・・・？

「俺は・・・」

リンとテテユスの言葉がいつまでも胸に突き刺さっていた

第七話「試合後」(後書き)

今回はこれで終了です。

今回は恭介に少しだけでも自重させるために書いたお話です。

お恥ずかしいのですが、実は今回の恭介のことは、作者である私にも少なからず当てはまってしまっことでもあります。

これを読んだ人の中にも……もしかしたら当てはまる方がいらっしやるかもしれませんね。

さて、次回はまだ試験の話を引きつ張ります。今回の続きの予定ですが、次回でようやく試験は最後です。

それでは。

第八話「改変！」（前書き）

今回も一応前回からの続きですが二部構成です。
話が予想以上に長くなったので区切りました。

それではさっす。

第八話「改変！」

無事に試験が終了し、十代がラーへの昇格を断りに行ったため、俺はリンと共に自室へと戻って来ていた。

「断るなんて十代らしいけどな」

「昇格の話？校長は言わなかったけど、恭兄も裏では言われてたのよ？」

なに？俺が？

「話によると、ブルー、しかも上級生相手に何もさせずにあの派手なオーバーキルを決めたからとか。試験の結果は微妙だったけど、実技面でかなり評価されてみたい」

「・・・なんでそんな話を知ってるんだ？」

裏で囁かれていただけの話だ。しかも今日の話なので噂が立つには早すぎるだろう。

そう考えていると、見覚えのある影が現れた

「お前ら・・・まさか・・・」

「フツフツン 当たたりい」

嫌に上機嫌だ。大体いつの間に・・・

「あの試験でのクロノスの変（仮）を忠告にしに来た時のついでに。『恭介が昇格する可能性あれば阻止すべし。手段は問わない』って具合に」

手段は問わないと言った時点で脅迫してでも止めると言っているよ
うなものである。

こいつ・・・相手は仮にも校長だぞ・・・

「大体そんな話が出て俺が昇格を断ればよかつたろうに・・・」

「『そんな話』が出ることで自体あなたには不都合なのではなくて？
派手にやったとはいえ、実力者ではないと偽ってきた行為を全て無
駄にするつもり？」

「確かにそうだが・・・あそこまでやっちまったんだからもう騙しようがないだろ？」

「・・・馬鹿ね、あなたは・・・十代や明日香達以外の人物に全く問い詰められなかったのはなぜ？」

「・・・確かに謎である。あの後、少しは話をしたことがある奴や、明日香の取り巻きであるジュンコとももえなど、顔見知りと会っても何も聞かれなかった。」

まるで・・・あの時の、俺達のデュエルを最初から最後まで、全部見ていなかったような、そんな感覚。

「・・・まさかっ！」

「うふふふふ・・・ようやく気付いたようね。・・・そう、私は消去した。私達と親しくないモブ共の記憶から、あの時の記憶を。明日香の取り巻きや、モブではないけれど全く交流の無い万丈目も例外ではないわ。さすがに教師達の記憶は試験に響くから消さなかつただけ。」

リン曰く教師達はきちんと覚えているが、生徒はせいぜい勝敗程度しか覚えていないらしい。

だが、記憶を消去することは出来ても、それはとあるきっかけで復活してしまうという。

なんでも、消去する際は、記憶が復活するためのきっかけを作らなければ術が成立しないとか。

まあ人の記憶をいじるわけだし誓約がなければおかしいわな

「いくら完璧な術を使ったとしても、完全に記憶を消去することなんて誰にも出来ないわ。それは私でも同じ。消去する記憶の事柄、その時間的な長さが長ければ長いほど復活する時のきっかけは簡単なものになっていくの。今回のきっかけとなる出来事は『朝霧恭介をラー・イエローに昇格させる』という話を校長から直接聞いた時』」

「だからそれを阻止させたのか・・・」

記憶を消去できるとは言うものの、その者の全ての記憶を消せるわけではなく、消去したい『事柄』のみしか消せないらしい。

今回は『今日見た朝霧恭介、朝霧リンの行なったデュエルの内容』を消去したとか。時間的にも短かったため、複雑な条件で行使できなかったらしい。

あまり納得できないが、途方もない話だから無理にでも納得するしかない。

「さて・・・もうすぐラブレターを見た王子様がこちらに来るはず。アナタ達はもう散っていいわ。今日はお疲れさま」

『勿体無きお言葉……。では……』

またまた一瞬で消えた。もう何度も見たのでもう慣れっこだが

「……ん？ラブレター？王子様？誰のことだ？」

「あの子達に頼んでたの。呪いで永遠に目を覚まさないお姫様を目覚めさせるために王子様がやって来るのよ。うふふふ……。楽しみだわ……」

「……とにかく、しばらく待ってみるか。ここへ来るんだな？」

もうすぐと言われてからもうすぐ10分経つころ、その王子様という名の珍客はやって来た。

ピント、ピント。

「……ふんぞ」

「その声はリン君か？恭介君もいるな？……失礼する」

わりと丁寧なノック。挨拶するは何故かリンだったが、その人、三沢大地は姿を現した。

「……ようこそ。さあ、この目の前の化物を倒して！そして私に口づけを……」

「誰だお前は！？そして化物扱いするな！」

先程王子様とかお姫様とか言っていたせいであろう。すっかり童話のお姫様になりきっている

「……その前に、この手紙はリン君、君からだな？」

あくまで紳士的に振る三沢

「……その手紙とやらを見せて貰えないか？」

無言で渡してくる三沢。どれどれ……

『今日のことでも聞きたいことがあればお話をします。お話が聞きたいのなら日の沈まないうちに私の兄の部屋までお越しください。』

強くてかわいい銀髪少女より。』

「……ツツコミ所が多すぎる」

「ツツコミたいのは俺の方さ。玄関前ならともかく、鍵をかけておいたのにも関わらず、それがあつたのは俺の机の上だ。まずはどうやって中に入ったんだ？」

「ふふふ……ノーコメントよ。書いてあるでしょうっ?』今日のこ
とを聞きたければ』と」

「そのことすら話そうとしない。……どうやらタダで話すつもり
はないらしいな」

「ふふ……察しがいいのね……さすがラー・イエローナンバー
ワンの実力者。それなら……どうするか、わかるわよね?」

「……デュエルで勝てば……か」

「そう。でも部屋に侵入した件は私一人の問題だけど、『今日のデ
ュエルについて』は別よ。私達二人に勝てば、全てを話してあげる」

「ここまで考える君のことだ・・・そして、負けた時は？」

「ホントに察しが良くて助かる・・・。ちょっと一つだけ頼みごとがあるの。それを聞いて頂戴。『普通に頼んでくれれば』ってのはナシよ。それじゃあ勝負をする意味がない」

・・・今日話したあの話か。いつ実行するかは決めてなかったが、まさか今日とは・・・

「・・・ああ、酷いお願いではないわよ。ただ、少しだけ・・・」

いきなり話を中断し、荷物からカードの束を取り出す

「・・・やっぱりこれをあげるわ。別にあなたにとっては勝つてもさほど有益な情報ではないものね。負ければどんな無理難題を言われるかわからないのに、そんな賭けに乗るわけがない」

カードを受け取り、中身を見た三沢は驚いた

「ふふふ・・・どう？かわいいでしょう？・・・私は見た目よりも性能を選んでしまうから、余ってしまったの・・・受け取ってくれないかしら？」

「・・・コ、コホン！リン君が持っていて無駄になってしまつよりは俺が持っていて、何かに使えるように考えてあげた方がカードにもいいかもしれないな。有り難く受け取らせて貰おう。・・・勝負の件は俺には異論はないぞ」

大体の察しはつくが、どんなカードを渡されたのかをしてみる

「・・・ああ、やっぱりピケルとかか」

三沢はこのようなアイドル系というか、可愛い系のカードに弱い。ある意味健全な男子の証である。

・・・何気に《カード・エクスクルダ》が混ざってる気がした。高レートカードだぞ・・・しかも当たり前のように3枚

「そういうのは俺も昔は好きだったな。今はテテユスくらいしか愛せないが」

そう、昔は好きだった。だが、リアルにそういう趣味のヤバイ奴を見てしまつてからは嫌いを通り越して恐怖さえ感じるようになった。ある意味心的トラウマである。

でも氷結界の女の子とか、《黒薔薇の魔女》とかは好きだよ！氷結界は絵柄が綺麗だし、魔女は有能なチューナーだし！あと天使族な

らばほとんど例外なく愛せる。

『ただいま〜って、あら？お客さん？』

「・・・テテユスって《光神テテユス》か？ダメだろ。あれは」

「・・・は？」

『・・・え？いきなり何？』

「天使の中では《踊る妖精》なんかは良いが他の天使はみんなババアだろ？」

隣ではリンが『ふふ、わざわざ地雷踏んで・・・バーカ』とでも言いたげな顔をしている

「・・・そろそろ本題のデュエルだ。森まで来い」

静かに歩き出し、寮の外の森に出る

「試合の説明よ。恭介から先に戦って、次に私と戦う。私に勝てば

あなたの部屋への侵入方法、二人に勝てば今日のこと全て教えてあげる。副賞にご褒美もあげましょう。それでいいわね？」

「三沢・・・遺書の準備はできたか？・・・始めるぞ」

『待ちなさい！』

今まで黙っていたテテユスが口を開く。

「な・・・！？お前は・・・？」

三沢が驚いている。・・・まさか！

『普段は見えない奴に姿を見せることくらい造作もないわ。・・・デュエルは私にやらせなさい』

「な、なんだと？」

『デュエルモンスターの精霊はデュエルができないとでも？この私が相手をすると言っているの。それとも、ババアが相手では不満かしら？』

全身から殺気を放っている。確かにババア呼ばわりされたら誰でも怒るだろう。いつかの言霊ではないだけかなりマシだが

『とうわけで代打よ。いいわね?』

「……俺も許せないが、本人の願いなら断れないな」

「ふふ……まとまったようね。では……」

「「デュエル!」」

「俺の『私のターン!』なに?」

『レディファーストという言葉を知らないの?……ああ、失礼。ババアだったわよね』

「相当恨んでるな……」

「見てて楽しいわあ〜」

『さて、ヴァルハラと光神化を使い、テテユス・・・失礼。ババア
2体を特殊召喚。更に《墓穴の道連れ》を発動。効果はお互いにピ
ーピングハンデスなのだけど、私の手札は《もけもけ》だけ。本来
はアナタの手札を見るところだけど適当でいいわ。捨てた後にお互
い一枚ドローする』

『ドローした《ダンシング・エルフ》オープン。二体のババア効果
引いた天使を見せる効果にチェインして更に見せる。つまり引いた
天使を一枚見せるだけで二枚ドローするわ。この時、更に効果を使
う時は二枚目を見せなければならぬ。逆に言えば、一枚目は見せ
なくていいということ・・・！《勝利の導き手フレイヤ》オープン、
ドロー』

「さすが自分自身だけあって使いこなしてるな」

テテユスの真価は複数並んだ時に発揮されると言ってもいい。
二体並んだ場合は天使を見せるだけで《強欲な壺》を発動できる。
三体並ぶ時は滅多にないが、三枚ドローは圧巻である。
もちろん効果は天使さえ引けば通常通り継続できる。

『うふふふ・・・小槌発動、五枚残してシャッフル、ドロー』

いつの間にか手札がデッキよりも多くなっていた。
そういえばテテユスのデッキの中には戦力にならないような天使し
か入っていないような・・・

『デッキの残りはあと一枚。一体だけ効果起動。《月の女神エルザエム》を見せるのだけど・・・その前に特別に手札を見せてあげるわ』

残り一枚でわざわざ手札を見せる？

『もう気付いていると思うけど私のデッキの中には一般には戦力外通告を受けるようなカードばかりなの』

「・・・なぜそんな構築に？」

『なぜ？このデッキには戦力なんて必要ないからよ。そしたらほとんど必要とされてないこの子達を使ってあげた方がいいじゃない？そういう所も、上級天使たる私の務めなの』

テテユスの言う通りだ。効果で天使を引くだけなら何でもいい、ならば少しでも使ってあげるべきだろう。

『必要のないカードなんて無いの。例え今回のようにただデッキを圧縮するために入れられただけでも、この子達はそれだけで満足なのよ』

だから・・・たまにでもいいから使ってあげてね？」

『・・・現在私の手札には《封印されし者》の手足がある。そして私の効果発動、私が見せるのは引いたエルザエム。残りのデッキはたったの一枚・・・わかるわね？』

「この世界でこのコンボを使っているのか？俺にはわからない」

「私は面白ければそれでいいけど」

「大体あのデッキパーツ俺のじゃないか？」

『あら？下僕の物は主人たる私のものでしょう？』

「誰が下僕だ！俺が主人だろ！？」

『冗談。これは全て私のものよ。私が持つても不思議ではないでしょう？・・・効果でドロー！私の手札には《封印されし者の右腕》《封印されし者の左腕》《封印されし者の右足》《封印されし者の左足》が揃った！』

あららららら

『今、かの者をその封印から解き放たん……！忌々しき封印を打ち破り、降臨せよ！エクゾディア……！』

わあ

『さて……あなたに渡しそびれたカードがあるの。この二枚なんだけど、受け取って頂戴』

そう言うとテテュスはカードを投げた。それらは三沢の隣の木に突き刺さる。

……あのカードって紙製だよな？

「……《遺言状》と《墓場からの呼び声》……!?!?」

アイツ……三沢を殺す気か!?

『さよならよ。やれ、エクゾディア!』怒りの業火エクゾード・フレイム! そのロリコンを焼き付くせ!』

ロリコンて・・・まあ真実だが

「ぐわあああああ！」

三沢が燃えてる！？アイツ・・・サイコデュエリストか！？

『ただのソリッドビジョンでっす』

「ウソつけ！明らかに燃えてるだろ！」

「仕方ない・・・罨カード《猛吹雪》発動！」

「すごく懐かしい！てか発動条件満たしてねーし」

そつつっこみを入れた瞬間、突然雪が降り始め、すぐに本当の吹雪になった

「・・・うそーん」

「言ったでしょう？私はサイコデュエリスト」

ならなぜ《恵みの雨》にしなかったし

「そんなのありきたりすぎてつまらないじゃない」

だからって吹雪はイカンだろ・・・そもそも雪降る季節は過ぎてるし、雪自体降る場所かは謎だが

「作者によると『最近雪降ったらしいから大丈夫。社会風刺だ』だつて。異常気象よ」

「作者つて誰！？全然大丈夫じゃねえだろ！」

少しずつだが火が消え、燃えてた三沢が復活した。

「俺は・・・生きてるのか・・・？」

『当然よ。だからソリッドビジョンだつて言ってたじゃない』

「いや、ウソだろ？実際に熱かったんだぞ」

「あ、それ私のせい」

「……どういうことだ？」

「それもデュエルで……って言いたい所だけどいいわ。アナタの脳に直接イメージを送り込んだの。幻覚みたいなもんよ」

『私が頼んだ。ババアなんて二度と口に出来ないように』

「それもエクゾディアで攻撃する直前だったからかなり慌てたわよ。あ、当然アイコンタクトよ？」

なるほど。騙されてたのは俺と三沢だけか。そしたら雪いらさないじゃん。かなり寒いです。

「これも一つの演出よ。今頃十代達ははしゃいでるんじゃない？」

はしゃぐよりも唾然としてると思う。たぶん

『一応気が済んだからこれで許してあげるわ。もう次は無いから』

「……さて、後が無い三沢氏。次は私の番よ」

第八話「改変！」（後書き）

中途半端な終わらせ方です。

この段階ではまだ二人の目的は明らかになってはおりません。

次できちんと書きますのでしばしお待ちを

それでは。

第九話「改変！後編」（前書き）

かなり遅くなりました。

話は当然ですが前回の続きです。

デュエルはリンVS三沢氏が行います。

それではどうぞ。

第九話「改変！後編」

『私のはんびり観戦するわ』

「その前にこれ以上一般人に姿を見せないでくれ」

「いいじゃないの、今は吹雪いてるんだし。・・・さあ、始めるよ」

リンがデュエルディスクを構える。頭は雪を被っているが、元々銀髪なので白さ的にはあまり変わらない

「デュエル！！」

「先攻はどちら？私はどちらでも良いけれど」

「ならば先攻を貰おう。先程痛い目にあっただばかりだからな」

「後攻ワンキルするかもよ？」

「・・・先攻でも酷い目に遭いそうだからな。ドロー！俺は《ウオ―ターワールド》を発動。《ハイドロゲドン》を召喚し、カードを

「二枚伏せて終了だ」

「……水デッキ？伏せは攻撃反応型ってどこかしら。ドロロー！ふふ……私は手札の《ダーク・グレファア》の効果発動。闇の上級を墓地に送り、特殊召喚する。送るカードは《インフェルニティ・デストロイヤー》」

げっ……三沢、さようなら

「特殊召喚したグレファアの効果。手札の闇を墓地に送ってデッキの闇モンスターを墓地に送る。私は手札から《インフェルニティ・ビートル》を送り、デッキから《インフェルニティ・デーモン》を墓地に送る。更に永続魔法発動。カードを二枚伏せて、ガン効果発動。墓地に送り、墓地のビートル、デストロイヤーを蘇生。そして二体をチューニング！」

……？なぜデーモンを蘇生させないんだ？

「シンクロ召喚！《インフェルニティ・デス・ドラゴン》」

「シンクロ召喚……来たか！」

カードだとわかりずらかったがソリッドビジョンだとやっぱりキモイなこいつ

「ふふ・・・この子は私のお気に入り。脳が半分出てるの。キモカワイイでしょう?」

・・・ホントに出てる

「デス・ドラゴンの効果。手札が0枚の時、攻撃を破棄することにより相手モンスターを破壊し、その時の攻撃力の半分のダメージを与える。今のハイドロゲドンは2100。よって半分の1050ダメージよ」

「くっ・・・!」

三沢

LP2950

普通に殴るよりダメージがでかいな

「バトルよ。グレファアで攻撃!さあ、その《炸裂装甲》を使いなさい!」

「読まれている・・・!?リバース発動、《炸裂装甲》!グレファアを破壊する。」

「うふふふ・・・予想通りね。ターンエンド」

毎回のように怪しげな術を扱うリンでももちろん伏せカードを読むなんて能力は無い。

ただ単に使用率からの推測だろう

「俺のターン！二体目のハイドロゲドンを召喚し、バトルフェイズ！ドラゴンに攻撃だ！」

「・・・私からの発動は無いわ」

「ならばダメージステップ、《収縮》を発動！攻撃を半分して2100のハイドロで破壊だ！」

「くっ・・・！」

リン

LP3400

「ハイドロゲドンの効果、デッキから同名カードを一体特殊召喚する。続けてダイレクトアタック！」

「きゃあっ!?!」

リン

LP1300

「・・・俺はターンエンドだ」

「ウフフフ・・・恭介以外にここまで追い詰められるとは思わなかったわ・・・」

「・・・?お前は授業でも負けたことはあるんだろ?」

「・・・私にとって授業は遊びみたいなものよ。むしろこのような野試合こそが真剣勝負。恭介だってそうでしょ・・・?あなたは授業では絶対に天使を使わない。なぜなら外野がいると情報が流れてしまうから。だけど外野のいない野試合でならその心配はほとんどない。私も同じよ・・・」

「・・・そういうことか。ならなぜさつき・・・」

「私のターンよ・・・。ドロー。《おろかな埋葬》を発動。デッキ

から《インフェルニティ・ネクロマンサー》を墓地に送る。そしてさっきのターンにセットしておいたガンを発動。墓地のデーモン、ネクロマンサーを蘇生させる。そしてデーモンの効果。デッキからインフェルニティと名のついたカードをサーチする。私は《インフェルニティ・ミラージユ》を手札に加える」

今度こそ三沢終了のお知らせ

「私はミラージユを召喚。ネクロマンサー効果、ビートルを蘇生、そしてネクロ、デーモン、ビートルの三体をチューニング」

レベルは9だ。出すのか？ヤツを！

「こんな試合で出すわけがない。《ミスト・ウォーム》をシンクロ召喚！効果で相手のカードを三枚戻す！」

三沢氏、丸腰ですぜ

「更にミラージユ効果。自身をリリースしてデーモン、ビートルを蘇生。デーモンでガンをサーチ、ガン発動、効果。デストロイヤーとデス・ドラゴンを蘇生、デストロイヤーとビートルをチューニング！」

既にオーバーキルですぜ、お嬢！

「シンクロ召喚！《ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン》！そして効果でネクロマンサーを除外し、効果をコピー！墓地のデストロイヤーを蘇生する！」

素晴らしいソリティアです。本当にありがとうございました。

「バトルフェイズよ。《インフェルニティ・デス・ドラゴン》で攻撃！」

ここまでやっといて結局そいつかよ……

「ぐあああつー！」

三沢

L P O

「くそ……全く歯が立たなかった」

「私はかなりギリギリだったわよ？《おろなか埋葬》を引けなかったらどうなってたか……さすがはラーのナンバーワンね」

「そう言ってるけどさ・・・実はお前その前のターンで勝ってただろ？実際ガンは二枚あったわけだし」

「・・・恭介。アナタ、二回もワンキルされたらどう思う？満足にデッキを回せないで負ける・・・。先攻トリシューラゴレンダアアアされたいの？」

う・・・。それは勘弁です

「でもその前に最初のターンのガンでデストロイヤーじゃなくてデモンを蘇生、ネクロマンサーをサーチ、召喚して、デストロイヤー蘇生とビートルを効果でデッキから並べてガンを発動すればよかっただろ？そしたら最後のターンと同じように展開できたはずだ」

「・・・リン君、じゃあ君は・・・？」

「うつ・・・。て、手を抜いただけだよ！このデッキの回し方を見せてあげてただけなの！プレミなんかじゃないんだからね！」

あ、プレイングミスだったんだ。動揺してツンデレみたいになってる

「・・・？どついう意味だ？」

「わ、私達に負けたからあなたには一つ聞いてもらおうわよ！いいわね！・・・あなたにこの【インフェルニティ】を託す」

「な・・・に・・・？」

「コホン！・・・私達の調査で一年の中でこれを使いこなせそうだったのは、あなたくらいだったのよ」

「デッキの他にも俺達が所有するカードを渡そう。お前ですら持っていないカード、シンクロモンスターも含めてだ」

「・・・？なにが目的だ？」

「ぶっちゃけると俺達と張り合える奴が少なくて困ってるんだ。だからインフェルニティ以外にもデッキを作れるくらいのカードを渡そう。そしたら好きにデッキを組めるだろ？」

本当のことを言うと影が薄くなる三沢氏に、俺達他には誰も持っていないシンクロなどを使わせて目立たせることが目的である。

これは原作では空気扱いされていくはずの三沢が存在しないはずのシンクロ召喚やインフェルニティを使い、空気キャラから脱却する

という原作の大幅な改変が出来るか否かという実験も兼ねているのだ

「だが……しかし……」

「私達は勝者なの。敗者は従いなさい！」

「……確かにそういう条件だったが、俺はお前達の期待に答えられそうにない。だから……この件は断らせてくれ」

「……なぜ？」

「……どんなに強いデツキを与えられて勝ち進んでも、俺自身は成長することはできないだろう……」

「っ………!」

「俺は十代達のように……自分の力で強くなりたいんだ!だから……」

「いいえ、もういいわ。……「じめんなさい」」

「・・・リン君？」

「私はあなたの想いを無駄にしようとした・・・」

「リン！これは俺が・・・」

「黙ってて！・・・このデッキはデッキレシピをコピーした『与えられたデッキ』なの。私は普段は自分で考えて組んでいるけれど、インフェルニティは自分で考えて組もうとはしなかった。・・・だからかな？簡単に飽きちゃってね、必要としてる人がいれば譲っちゃおうかな？とも思ってた・・・」

リンはデュエルディスクからデッキを取り出す

「でも今回あなたに気付かされた。与えられたデッキで勝ってもそれは本当の強さではない。それではそのデュエリストは成長できないって。・・・私が間違ってたの・・・だから・・・このデッキは・・・！！」

「お、おいー！リンー！」

バシイ！！

三沢はとっさに左手でデッキを投げようとした少女の細い腕を掴んだ。そして・・・右手で少女の頬を殴っていた

「っ・・・・・・・・！！なにするのよ！」

目に涙を浮かべてはいるものの鋭い目つきで殴った本人を睨みつける

「・・・・・・・・必要ないカードなんてない！テテユスも言っていただろうが！」

少女の両肩を掴み、大声で怒鳴る。

少女はビクツと全身を震わせた。先程の様子とは違い、怯えているようだ

「・・・・・・・・ごめんなさい」

震えた声で謝罪したリンは三沢から逃れ、寮へと走って行く

「お、おい！リン、待て！」

『待ちなさい』

俺達のやりとりを見ていたテテユスが口を開く

『今追いかけて何をするつもり？あなた達も冷静になりなさい。特に三沢大地』

「……すまない」

『あら、私なんかには謝罪する必要はないはずよ？』

「……恭介君。つい感情的になってしまい、君の妹である彼女を殴ってしまった。……とても許されることではないが、せめてもの償いはさせてほしい」

「デッキを投げようとしたアイツに非があると思うが……俺への償いを考えているなら、アイツに一言声をかけて笑顔を見せてやっ

てくれないかな？」

『・・・聞きなさい三沢大地。朝霧リンは勉強もデュエルも優秀、強気な発言や怪しげな行動から忘れられがちだけど、あの娘は普通の女の子なのよ。本来の彼女は精神面がかなり弱いわ。普段の態度はそれを偽るためのもの。それもおそらくは無意識の内に、自身自身すら騙している。でも彼女はまだ15歳、そんな人格　いえ、仮面は簡単に崩れてしまう。仮面が崩れた後、そこに残るのはとても弱い少女なのよ』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『今回あなたの『デュエリストとして成長しない』という言葉であの娘の仮面は崩れ、素の状態に戻った。それがデッキを投げようとするまでの彼女。行動は間違っていたけれど、あの娘はあの『与えられたデッキ』を投げることでこれまでの間違っていた自分との決別をしようとした。その時あなたに止められて、更には殴られたものだから精神はかなり不安定になったはず』

「あの時はつい・・・」

『いいのよ。女の子を殴ったのは感心しないけど、デュエリストとして取った行動なのだからあなたは間違っではないわ。・・・そして不安定ながらも自己防衛という形で仮面を被りあなたを睨んだわ』

けだけど、あなたに両肩を掴まれた時点でその不安定な仮面はまた崩れる。そして弱い少女に戻った時に怒鳴られたことであなたに対して恐怖を感じた』

「・・・そうだったのか」

『今の彼女は精神が不安定だから仮面を被れずにいるけど、しばらくして落ち着けばあの娘は仮面を被る。だけどあなたに恐怖を抱いている彼女は、仮面を被って自分を偽っていても無意識にあなたを避けるでしょうね』

「・・・それでも仕方ないさ。むしろそれが当然の結果だ」

『・・・あなたは私のマスターに言われたことをもう忘れたの？あの娘に声をかけて笑ってくれて言われたのよ？それは妹を殴ったあなたを許して、尚且つあの娘のあなたに対する恐怖心を拭ってやってくれてことなの。自分のせいであなたが妹に避けられるのをなんとしても回避したいから』

「まあ・・・そういうことだな。逆にここで動かなかつたら俺はお前を許さない。リンがいる場所はおそらく俺の部屋だろう。・・・これが鍵だ」

『落ち着きを取り戻したあなたと、仮面を被れないでいるあの娘。』

一度でも仮面を被ってしまったらあの娘は何を言われても冷めた態度で聞き流すことに徹してしまう。動くべきタイミングは素の状態である今しかない』

「……ああ。すまない」

『最後に一つだけ。仮面云々はただの例えだけど、このことは決して誰にも言わないで頂戴。仮に誰かに言いたくなっても何が何でも本人にだけは絶対に言わないこと。……わかったなら行きなさい』

三沢はもう一度礼を言うと俺の部屋へ走って行った

「……そこまで見ていたなんて驚いたな」

『毎日ポケットと過ごしているわけではないのよ』

「出会ってまだ日が浅いのに俺が知らないことまで見抜いていたな」

『本当はもっと知ってるんだけどプライベートに関わるから……自分ですら知らないことも、隠しているつもりのこととも知られてるかもよ？夜のこととか』

「・・・ナンノコトデスカ？」

『知ってる？この前の夜リンちゃんは布団の中でキミの名を呟きながら・・・』

「いや、言わなくていいです!」

『ん？なんで赤くなってるのかな？』

「お前は少し黙れ!」

『ふふ・・・いつもの調子になったところで私達も向かいますよ？早くしないと可愛い妹さんが取られちゃうよ?』

「・・・なんだって?」

『あの三沢氏は成績優秀、運動神経抜群のイケメン設定でしょ？影が薄いとはいってもそんなのに不安定な状態で優しく言い寄られたら、いくらリンちゃんでも危ないんじゃない?』

先程の会話を聞いたから解る。テテユスはリンという人間を見抜いて言っている。だからこれは・・・ウソではない!

「・・・全速前進だ！」

俺はとある社長を思い浮かべて部屋へと全力で向かった

「リン君！」

借りた鍵でドアを開けて恭介の部屋に入る。そこにはやはり涙を流して震える少女 リンがいた。

「な・・・んで・・・」

「君のお兄さんに鍵を借りて来たんだ。俺は君に言いたいことがある」

「い・・・イヤ・・・来ないで！」

「待て！」

部屋の奥へと逃げようとするが、その腕を慌てて掴む

「いや！離して！」

「ダメだ！」

ここで離したら部屋の奥まで逃げる。行き止まりになった場所にまで迫って行ったら、それは恐怖心を植え付ける行為に他ならないだろう

「離してったら！」

無理矢理手を振りほどかれる。

ここで逃してはならない！

「待つんだ！」

「きゃっ！」

また腕を掴んでもほどかれるだろう。三沢はとっさに正面から少女に抱きついていた

「今ここで君を逃したら、君はずっと俺を避けるようになるだろう。……俺はそれでも構わない。だが、君のお兄さんはそれを望んではいないんだ！」

「お兄さん……ちゃんか？」

兄という単語を聞いた途端、抵抗する力が弱まり、少女の胸から鼓動が伝わってくる

「俺は今、君に避けられてもいいと言った。それは君にした事を考えれば当然の事だからだ。……だが、君のような女の子に避けられることは……男として辛いんだ」

「っ……！！」

「さっきは殴ってしまったって悪かった……。どうか許してはくれないだろうか？」

「三沢……くん……」

完全に抵抗しなくなり、三沢の名を呼ぶ。

「いいえ・・・あなたは間違っていないの。悪いのは・・・デツキを投げようとした私。だから殴られても何も文句なんて言えない。・・・デュエリストとして・・・こんな私を許してはくれませんか？」

「リン君・・・」

お互いに正面から見つめ合う。そして少女は背を伸ばし

「ストップだ。それ以上先はこの俺が許さない」

聞き覚えのある声と共に、目の前の少女は停止した

「三沢。仲直りできたみたいだな。・・・抱きついたことと、口説いたことは、仲直りの記念として俺は許してやるう。だが少し冷静になれ」

『抱き合う若い男女は唇を重ねる。長い時間お互いを感じた二人はそのまま』

「少し黙れ！」

『あいたっ!』

俺は隣にいるアホ天使を叩いた

・・・さっき言われた通り落ち着いてみる三沢。

目の前には停止したままの銀髪少女。

お互いの息がかかるほど近い距離。

抱きついたままなので胸の辺りでは少女の鼓動を感じる。

そして当然だが少女の胸の柔らかな感触も感じている。

無理な体勢で抱きついたため、足は少女と交差していた・・・というか柔らかな太ももに挟まれている。

俺は・・・全身でこの少女を堪能している・・・?

「落ち着いて状況を確認できたか?充分リンを堪能したか?なら後の審判はコイツに委ねる。・・・リン、再起動だ」

少年の言葉で再び起動する少女。三沢と同じように徐々に我に返っていく。

目の前の男は赤くなっている。なぜ?

お互い息がかかる距離にまで迫っている。まさか自分から?

胸で別の鼓動を感じる。・・・私の胸が当たっている?

下半身に何かが当たってる・・・この男の足?私は足を挟んでいる

の？

背中には男の腕が回されている。・・・私は抱きつかれている・・・！？

完全に我に返ったのか、リンは耳まで赤くなり、口をパクパクさせる。かなり可愛いらしい、素直にそう思った

「いやあああああ！」

その瞬間、少女の平手は三沢を一撃で昇天させた・・・

「最悪だよ。嫌だよ。死にたいよ。」

よほどショックだったのか、リンの口は次々とネガティブな単語を生産していく

そもそもさっきは三沢とほいっ雰囲気だっただろう・・・認めたくないが

再起動して冷静になった後は平手をお見舞いしたことからその前は正気ではなかったのかも。精神が不安定になってたって言ってたし

「オイオイ・・・相手は成績優秀イケメンな優良株だぞ。それにさ
つきの件もあるし・・・」

「そんなことわかってるよお！そうじゃなかったら平手一発じゃ済
まさないもん！そ、そうだ！記憶、記憶消すう！」

「ダメだ！・・・これはコイツの弱みだ。お前はこのことで三沢を
存分に揺すってやるんだ！」

「ううつ・・・。で、でも。抱きつかれて、密着してたんだよ！
？服越しとはいえ胸も当たってたし！恭兄だってそんな経験なかつ
たでしょ！？」

う・・・。そう言われると許し難くなってくる

「う・・・うん・・・」

三沢が起きた。リンの平手を喰らって数分で起きるとは・・・。あ、
素の状態だから力が弱いのか

「い、いいは……？」

「俺の部屋の中だ。……お前、さっきまでのことを覚えているか？」

「お前の部屋？さっきこと……？なんのことだ？」

お？もしかしてショックで忘れたのか？

「ねえ……何も覚えてないの？」

「な、なんだ？深刻な顔して……。何かあったのか？」

「ホ、ホントに覚えてないの？……よかったあ〜」

どうやら完全に覚えてないらしい。揺するネタがなくなったが、リンはホッとしている

『女の子のカラダって本当に柔らかかったんだ……。普段と違う一面が見れたし、胸も見た目よりも大きかったし。これはいい夜になりそうだ……。！』

「ブハッ！」

テテユスの怪しげな言葉に吹き出す三沢。おや？

「い、いきなり何を・・・」

『マインドスキャン。あなたの心を読み取った。純粋な少女を食べようとする獣の物語』

「ね、ねえ・・・まさか・・・」

『この男は覚えてる。なんとか誤魔化そうとしてたからバラした。あなた達を騙せても私は騙されない』

「・・・どつやら本当らしいな」

「うそ・・・だったの？それもいい夜とかなんとか・・・」

素の状態である純粋な少女から、いつも通りの・・・仮面を被った少女へと変わる。そしてあの黒いオーラを身に纏った

「うふふふふ……ねえ、腕と足。最後にお別れしたいのはどつち？」

「ま、待ってくれ！これは、これは違うんだああああ！」

「その前に出してる右腕から先にお別れしたいの？わかったわ……」

「おい……止めなくていいのか？本当にアレ三沢死ぬぞ」

『面白いので良し』

「人の命が危うい状況を楽しめるほど俺は非道ではない。てかさっき言ってたことって……」

『いくら精霊の私でも心を読めるわけがない。ただひよっとしたらなぐって思ってた言ったら彼が反応したから芝居打っただけ』

「まああんな衝撃で記憶が飛ぶわけないわな」

『そういうこと。キミ達ならまだしもこの私を騙そうとした罰よ。』

それにさっきのババア発言もあったし、とりあえず手足がもげれば
気がすむかな〜」

「人間はオモチャじゃないんだぞ、この外道！」

『私にとっては誉め言葉』

「この悪魔！・・・天使だけどな」

『わかってるならよろしい』

「さて・・・三沢が捕まったことだし助けるか」

『結局マスターも楽しんでるじゃないの』

「ノリが良いと言ってくれ。おいテテユス、いくぞ！」

『あいあいさ〜』

俺はリンと三沢との間に入り、その時に生まれた一瞬のスキを突い

てテテユスが後頭部に手刀を放った。

そして意識を飛ばしたリンは無言で倒れていく。

『うふふふ・・・私は肉弾戦も強いから』

銀髪少女が床に倒れたと同時に、今回の騒動は終わりを告げた

第九話「改変！後編」（後書き）

三沢に実際にインフェルニティ等のカードを使わせるかどうかでかなり悩みました。

二人の言う通りにシンクロを受け取り、使わせることも書いてました。

ですが世界はそれを望んではいなかったようです。

その書き直しが遅れた理由です。はい。

というわけでこれでようやく試験編が終わりました。です。

それでは。

第十話「時空を渡る少女」(前書き)

タイトル通りです。

こんな話やっていいのかと突っ込まれそうですがね

それではどうぞ。

第十話「時空を渡る少女」

「新しいカードが欲しい！」

「・・・なんですかいきなり」

「聞こえた通りの意味よ。欲しいよ〜！欲しいよ〜！」

「新しいカードって・・・新弾のやつか？ほら、融合とか出るやつ」

「それ。あと単行本の付属カードとか」

「いや・・・無理だろ、常識的に考えて。俺達がここに来る前はまだ発売してなかったし、単行本なんかは何が付いてくるかわからないし」

「常識なんて覆すものでしょ？《エフェクト・ヴェーラー》使いたくない？」

「うっ・・・」

「イラスト可愛いし、効果もいいし、種族も属性も恵まれてる。それにチューナーだし。あとニーソ」

「ぐはああああ！貴様ああああ！以前から使いたくて仕方なかったことを知ってるくせに！」

「私も使いたいな。あとなんとかウオリアーも」

「・・・それ魔轟神に突っ込む気だろ」

「ということとでちょっとの間テュス貸して？」

「貸してって物じゃあるまいし。・・・何させる気だよ」

「ちょっとカラダ・・・じゃなかった。精霊のチカラを借りるだけ。大丈夫、たぶん消滅しないから」

「たぶんなの！？それ以前に消滅するかもしれないの！？」

「私の見込みだと大体三日間は立てなくなるくらいで済むかな？」

「・・・それって消耗してでだよな？肉体的なダメージを負わされるわけじゃないよな？」

「いくら私でも精霊様をサンドバックにはしない。ねえ〜お願いだよ〜。貸してよ〜」

「う〜ん。でもな・・・」

「終わったたら私を好きにしていから！もちろん肉体的な意味で。むしろお願いします！」

「そんなのお断りだ！誰がやるか！」

「《ブリザード・プリンセス》使いたかったな・・・」

「な・・・に・・・？」

「次のGXの単行本では三沢と明日香のタッグまで収録されているはず。LEにもPPにも収録されてなかったら次の単行本なのは間違いないんだけど・・・」

「なん・・・だと？」

「話の中での扱いが勝負を決めた切札だし・・・。カード自体はまだ少ないけど、明日香は待遇いいからほぼ確定なんだけど・・・」

「テテユス、ちょっと来てくれ」

「切り替わり早いね」

「ヴェーラーでも揺れたのにブリブリに揺らがないはずがない」

『呼ばれた気がした。なに？』

「ちよつとリンの力になってやってくれ」

『・・・この子なら私の力なんて使わずに何でも行使できるはずだけど・・・』

「今回ばかりはそうはいかないの。かなりの魔力とか肉体的な負荷がかかるから一人ではキビシイかなーって」

「・・・俺からもお願いだ。今回は力を貸してくれ」

『マスターに頼まれちゃあ断れないのよね。・・・仕方ないわ』

「ありがとう。で、一応聞くが何をやる気だよ」

「当然時空移動に決まってるじゃない。」

「時空移動か・・・なんかそんなやつだとは予想はついていたが」

時空移動は漫画やRPGなどでよく聞く単語の一つだ

『・・・大丈夫かしら？』

「ん？どうした？」

『別に。ただの独り言』

「それじゃあ人目のつかない場所！・・・森でいいわ。行きましょ」

なんかだんだんと俺達の活動拠点が森になってく気がする。

・・・あれか、ドラ○もんで言う空き地なのか？

「あ、恭兄はここで待っててね」

「なぜ俺だけ？」

「何が起こるかわからないでしょ？何らかの衝撃で吹っ飛ばされてもいいなら来ても良いけど」

「行ってらっしゃい」

『危険が及ぶかもしれないとわかったら行かなくなるのね』

当然だ。自ら進んで身を傷つけようとするなんて性癖はない

「じゃあ行って来るわ。結果はお楽しみについてことごとく」

「おう。気をつけるよ」

そうして二人は俺の部屋を後にした。

・・・ん？一瞬黒い影が見えた気が・・・

「さあ始めるよ」

『いつの間にこんな陣を・・・』

「かなり前から描いておいた。始めから行くつもりで。テテユスの
・・精霊の力を借りたくなって、恭介を通してあなたに協力を頼ん
だの」

『ふうん。それで？向こうに行くのはもちろん・・・』

「当然私よ。厳密に言えば私の霊体、つまり精神体ね」

『そうでしょうね。・・・本来はアナタ一人で行くことはできる。
だけど行く為に力を使ってしまっただけに行っただ後にうまく行動できな

くなる。ヘタをすればアナタの霊体は、ここに残る抜け殻となったカラダに・・・永遠に還って来れなくなる』

「何でもお見通しってこと？そこまでわかってたから協力したの？まあいいわ・・・。アナタの言う通りよ。行くことはできる。行動することは、おそらくできる。これは推測の域を出ない仮定の話。それでも解ることは、一人だとこの世界に永遠に還って来れなくなる。それは死を意味する。いくら私でもこんな馬鹿げた話に命を賭けようとは思わない」

『だけど・・・私がいだ』

「そう。精霊のチカラを借りれば帰還することばかりか、向こうでも好きに動くことができる。さて、始めるから陣の中へ。あ、向こう向いといてくれない？」

『・・・わかったわ』

リンに促され、テテユスは反対の方向を見ると、二人が入った陣が輝き出す。そして・・・

「えいつ」

『ひゃあああ!?!』

「ふうん……やっぱり私なんかよりも大きいのね。……羨ましいな」

『ちよっ、ちよっ?!?!あなたどこ触って……』

「見ての通り揉んでいます。……え?まさか自分のどこを触られてるのかわからないわけないでしょ?」

『そ、そういうことじゃなくて!や、やめ……』

「女の子同士のスキンシップだよ。あれあれ顔が真っ赤だよ?それに普段の発言とは違った反応……。今度は別なところへいつてみよ」

『いいからやめて!やめてったら〜!』

「半泣き状態で懇願する女神様……。ムッフ……。いいネタが出来たわ」

『ちよっといい加減に……。!って……。アレ……。?チカラが……』

』

「……ようやく効果が出たようね」

『あな……た……これ……まさか』

「ふふ……正解だよ？この陣には時空移動とは別に、対象のチカラを奪い取る為のものも描いてあるの。発動条件は一定時間対象と接触し続けること……！普通に触ってても奪えるけど逃げられるしね」

『くっ……！ハメられたってこと……？』

「アナタの手刀……とても素晴らしかったわ。おそらく臨戦体勢に入ってる私でも見切るのが困難なほど……。普通に拘束しても返り討ちに逢うでしょうけど、こうやってお触りしてる時はどうかしらね？……さて、今度は別なトコのお触りも始めましょうか」

『ダメえ！お願いだからあ……！』

「うふふふ……大丈夫。あなたのおかげで十分な魔力は確保できたからもういいわ。……それとも、続きをして欲しい？」

荒く息をしながら、ふるふると紅潮した顔を横に振る

「そう……続きがしたくなったらいつでもいいから。さて、これから本命の時空移動よ」

そう言うと二人が入った陣が輝きを増した

『うあああああ!?!』

「最初に言った通り、あなたの力も借りるわ」

確かに力を貸すとは言ったが、今のはテテユスにとって完全な不意打ちだった

『くっ……まさかこれほどまで負荷がかかるとは……!』

片膝を着き、苦しそうに呟く

「まだまだだよ……!頑張って!」

『アハハ・・・もう無理かも・・・』

やれるかどうか怪しかったけどやっぱり私だけじゃ駄目みたいだな。

・・・ってアレ？このチカラは・・・？

「・・・よし！行けるわ！・・・お土産たくさん持って来るから恭介によろしくね。謝礼というわけではないけど・・・あなたにもね。んじゃ、このカラダを少しの間よろしくね」

しゃがみながらそう言うのと気絶したように倒れこんだ。
しゃがんだのは衝撃を少しでも和らげるためだろう

『はあ、はあ・・・。成功した・・・？でも、なんで・・・？』

『おぬし一人でなんとかなるわけが無かるう。馬鹿者め・・・』

『あなたは・・・。じゃああの時、力が溢れたのはやっぱり・・・』

「……どつやら間に合ったようだな」

『キミは……なんでここに?』

「それは後でコイツが戻って来たら話そう。まずはお仕置きタイムの準備だ」

「……よし!これで全部揃ったわ!恭介にもちよつとしたサプライズと……」

「ふふふ。それじゃあ戻りますか!」

「……」

日が暮れる頃になってどつやら帰って来たらしく、意識が戻った

「ただいまぁ……って、あれえ!?!」

途端に自分が置かれている状況がわかったらしく、声が裏返っていた

『アハハハハ……お説教中だよ?』

「え?……え!?!……ってなによこれ!」

リンは困惑している。隣には正座して足をぶるぶる震わせるテテユスがいる。明らかにもう限界といった様子。

そして自分は木に縛りつけられている。しかもかなり高い所に

「お。目覚めたか」

「恭介……。ねえ……。これどういうこと?」

「違う! 『恭介お兄様』だ!」

「え……。?な、なに?」

「言葉遣いを気をつける！俺を呼ぶ時はいつも『恭介お兄様』と呼べと言っているだろう！」

「……き、恭介お兄様……？」

「なんだ？どうした？」

「この状況はいつたい……」

「危険なことをしようとしたお前を反省させるためだ」

「……危険なこと？」

『時空移動だよ。あの時は私の力だけじゃ無理だったの。本当ならキミの力も消費して初めて成功するはずだった……。でもそれしただけじゃ通るはずがない。キミの精神体は戻って来れなくなっていたんだ。』

「え……？でも……ちゃんと成功したはず……」

『……手助けしてくれたの』

「……手助け？」

「そろそろ呼ぶか。おい、来てくれ！」

『……ようやく戻って来たのか……。馬鹿娘が……。』

「……ホーリエ？」

そう。《エンシエント・ホーリー・ワイバーン》である。

リングがシンクロ召喚した時から随分と経ってはいましたがきちんと待機しております。

「な……。なんで？」

『……我を呼ばなくていいと言ったのは普段は邪魔になるからだと言ったはずだが？』

同じ精霊でもテテユスは人間型なので、自分達と大きさはほとんど

変わらない。

だが彼は人間の何倍もの大きさだ。
そんなものが近くを飛んでいれば邪魔になるだろう。これは彼なりの配慮だったのだ。

『野外で呼び出すのなら問題なかるう？それに今回のような精霊の力を借りたいということならば我も呼べばよかるうに』

うっ……と苦笑いするリン。アイツ……存在忘れてたる

『よりもよって時空移動とは……。この小娘では力が足りないということも解らぬか』

今度はテテユスがうなだれる。確かにあの時『大丈夫かな』とか呟いてたな

「でも……なんで……」

どうして駆け付けたのか。力が足りなくてテテユスが苦しそうにした直後のはずだ。

「この二人が教えてくれた。『失敗するかもしれないから急げ』っ

てな。」

その後ろに居るのは忍者二人。部屋から出た時から監視をしていたらしい

恭介はリンの真下まで行き、彼女を見上げる

「それにしてもいい眺めだ！・・・白か」

え・・・？と困惑するリン。そしてすぐに気が付いた

「ちよっ、ちよっとおおおお！見ないでよ！恭介のバカあ！スケベ！」

リンは高い所に縛られていて、スカートを穿いている。当然見上げると中も見えてしまう

「『恭介お兄様』だ！普段は不可思議な重力がかかっているところできない美少女の絶対領域！それが今は上を見るだけで拝むことができる！これを見ない日本男子がどこにいる！？今日は思う存分堪能させて貰おう！さあ、お前達も見ることを特別に許可する！いや、命令だ！普段は任務を遂行してもご褒美などないだろう！？これはお前達へのアイツからの労いのサービスだ！ワハハハハハ！

「さあ、拝め！」

「や、やめなさいよ！バカあ！あんたらもよ！今すぐ消えなさい！
主人の私の命令が聞けないの！？」

「くくく・・・残念ながらこの二人の主導権は俺にある。それにこの二人が知らせなければお前は生きていなかったのかもしれない。たんだぞ？」

「そ、それとこれとは話が別よお！いいから！あなた達の任務は終了よ！いい？任務は終わったの！今すぐ装束を脱ぎなさい！」

「・・・だ、そうだ。馬鹿め！貴様は自らを窮地に追いやった！・・・任務終了だ。黒装束を脱いでよろしい。・・・リン、装束を脱いだ後のこいつらは、忍者ではなくただのブルー生徒だ。そして・・・後は言わなくてもわかるな？」

リンの紅潮していた顔が一瞬で青ざめた

「ま、まさか・・・」

「そうだ・・・こいつらは俺も操作できるが、あくまでも主人はお前だ。そして今、お前は任務終了と、装束を脱ぐことを命令した。いや、俺が命令させた。全ては俺のシナリオ通りだ！」

「いや……いやあ……」

「……冗談だ。協力ありがとな。帰ってよろしい」

『はっ……』

二人は装束を脱ぐことなく消えて行った

「……え？」

「少し協力してもらっただけだ。もちろん覗けなんてことも命令ではない」

「じゃ、じゃあ……」

「お前の絶対領域は俺がじっくりと堪能してやる！それだけさ！」

「それだけさ！じゃないわよおお！結局見るんじゃないのぉ！」

「これも何かの記念だ！特別に俺のケータイのデータフォルダに残しておいてやろう！」

「なに撮ってるのよお！セクハラ！犯罪よ！」

「大丈夫、こいつは画像だ！動画ではない！」

「撮ってること自体が問題なの！訴えるわよ！？」

「残念だったな。今回の俺は冴えている！『終わったら私を好きにしていから！もちろん肉体的な意味で。むしろお願いします！』」
「これは録音しておいた誰かさんの肉声の一部だ。妹に手を出すのは犯罪レベルだし、当然俺もそんなお願いを聞いてあげるわけがない。……だが見ることは別だ！俺はこの光景を網膜に焼き付ける！」

「そんなものいつの間にか録ってたのよ！？」

「会話している時に決まっている！たった今言ったばかりだろう？俺は冴えていると！」

「私がそんな発言をすると予想して!?!? . . . いいわ! テテユス、その男を . . . 変態を止めなさい!」

「男はみんな変態だ!」

「黙りなさい! テテユス、早くしてよ!」

『 . . . 見ての通り、お仕置き中だから無理。それにあなたは私 . . . 揉んでたじゃない。見られるくらい、揉まれるよりはいいと思うなあ . . . 』

「私は相手が恭介だったらむしろ揉まれたい!」

『それなら見られるくらい何でもないじゃないの!』

「ダ〜メ〜! 見られるよりは触られたいの〜!」

「だからお前は何の影響を受けてんだああ!」

「そんなのどうでもいいの! 私は見られたくないのよ!」

『いい加減にせんか!』

「ひっっ!」

『黙って聞いておれば長々と……。テテユスはもうよろしい。この娘が帰って来るまでの間だったのにな』

『ああ……。やっと……。でもダメ……。立てないわ』

足が限界で立てないらしい。何時間も正座させられていたのだから当然か

「ん……。? 飛べばいいんじゃないか?」

『あ……。忘れてたわ』

オイオイ……

『ああ、でも無理。マスター肩貸して〜』

「仕方ないか・・・ほれ」

『あゝ生き返るわあゝ』

「ね、ねえ・・・恭介お兄様？私も降ろしてくれない？」

「そうしたいのはやまやまなんだが、お父さんには逆らえんのでな」

「お父さんってホーリエのこと・・・？ねえ・・・ちゃんとたくさんお土産持ち帰って来たんだよ？だから・・・」

「物に釣られるほど馬鹿じゃないんだ・・・。それにそんなことしたら命が・・・すまない」

『どうせ私の力を使って物質を変換したんでしょ？それなら私にだって再生できるから問題ないわ』

「テテユスもこっぴどく怒られて正座してたんだ。お前も怒られる・・・な？」

「そ、そんな・・・！」

「言う事聞かないと三沢を召喚するぞ？」

「すみませんでした申し訳ありませんでした何時間でも怒られますむしろ怒ってください」

「それでよし。俺達は先に戻る。後は怒られて自力で帰って来い。それじゃあお父さん、お願いします！」

『ふむ・・・三日は縛りつけておこうとは思っていたが、潔いのでな・・・特別に夜明け前には帰してやろう・・・』

「ああ・・・私・・・生きて帰れるのね・・・！」

そして

『……ふむ。もう夜明けか……。調子が出てきたばかりだとい
うのに』

「あう。もう……。無理。眠い……」

『まだ終わってはおらん！寝るな馬鹿者！』

「きゃん！」

睡魔に負けて寝ようとする度に何故か上からタライが降ってくる。

一体どんな仕組みになっているのだろう……

地上にはタライがゴミのように重なっていた

『夜明けまでと言っていたのでな。これで終わりにしてやるっ』

「よゆやく……。本当に終わりなのね……」

『ここまで付き合わせた詫びだ。最後に我から一つくれてやるっ』

「え．．．？なに．．．？」

きた
ガツンと音がした。それだけは意識が薄れる前に認識で

「きゆう．．．．．」

彼からのプレゼントは超巨大なタライだった。

それをリンは頭上に喰らい、眠るように気絶した

『助けだけは呼んでおいてやる。それまでは眠るとよい。もっとも
助けとはあの二人だがな．．．』

「早朝に呼び出されたと思えば．．．。お。凄いタライの数だな

」

『私の時よりも多いわね……。倍くらいかしら』

大量のタライに驚いた。バラエティでも一人でここまで喰らうだろ
うか？

「……なんか一つだけ巨大なやつがあるんだが……」

『私とマスターがすっぽり入れるわね……。』

どうやって落としたんだ？絶対に木が邪魔して頭には落ちないと思
うが……

「とりあえず助けてやるか」

『その前に一つやらせて』

「面白いことか？」

『ええ。とつても』

「許可する。思う存分やれ」

『ふふふ……。さあ、起きなさい!』

「わぶっ!」

いきなり顔に水をかけられて目が覚めた

「……テテユス?」

『あなたを降ろしに来てあげたんだケド……』

「ホントに!?!」

『その前に……。仕返しをしてやるうかと思ってね』

嫌な笑みを浮かべるテテユス。……すごく嫌な予感がする!

『っしっし』

「ひゃああん!?!」

『ふむふむ……。歳の割になかなか良い発育……。』

「ちょ、ちょっと!?!何するの!?!どこ触って……。」

『女の子同士のスキンシップだけど……。もしかしてどこ触られてるのかわからないの?』

「そついう意味じゃ……。ひゃああ!」

『くくく……。可愛いわね。あなたがやってくれたこと……。全て倍にしてお返しするわ!』

「ほほう……。昨日より良い眺めだ!朝日が眩しいぞ!おっと。太陽はあつちだった!あれは朝日じゃなくて白……。」

「黙れ変態!ちょつ……。や、やめ……。」

「男は変態だ！テテユス〜！ちよつといいか〜」

『なに〜？』

「撮りたいから後ろに回ってくれないか？・・・あとお前のも見えたぞ。お前も白かぁ！」

『ちよつとお！？なに見てんのよ〜！つてかよく見えたわね！』

「今回の俺は目も冴えている！そしてお前のも撮らせてもらった！二人の中の白が見えるぞ！」

『いつの間に！？しかも二人一緒に写ってるの？』

「ふむ・・・背後からのを正面で見るのはなかなか・・・。記念に一枚っ」と

「あんたら〜！あとで覚えてなさいよ〜！」

「ふふふ・・・俺を殺そうとしても無駄だ！俺に危険が迫った時はお父さんが降臨するからな！」

「くっ……。この卑怯者！」

「これまでの恨みを存分に晴らさせて貰おう！ワハハハハ！」

銀髪少女いじりは昼頃まで続いたが、三人共授業のことをすっかり忘れていた……

第十話「時空を渡る少女」(後書き)

今回はこれで終了です。

ギャグだからいいかな？と勢いで書きましたが次回に続きます。

デュエル？なにそれ美味しいの？

それでは。

第十一話「時空を渡る少女」後編」(前書き)

前回の続きです。

今回は疲労したリンの話です。

それではどうぞ。

第十一話「時空を渡る少女」後編」

「なんでえー!?!」

女子寮の部屋で銀髪少女は一人叫ぶ

「なんで恭介が来ないのー!?!おかしいでしょー!」

ベットの上で一人ジタバタと暴れる

「ここは恭介が来る展開でしょー!看病イベントは?」

『イベントって・・・』

「身動きが取れない可愛い妹。それを優しく看病するお兄ちゃん・・・。私・・・カラダが熱いの・・・だから、お兄ちゃん・・・。ベットに二人寄り添う兄と妹・・・そこに生まれるは禁断の“愛”
って具合にさあ〜!」

『はあ……』

ホントにうるさい。実力行使で黙らせようか……

『女子寮なんだから男子が来れないのは当たり前でしょ……。とにかく、今は誰もいないから今の内にオフロ行きなさい。まだ動けないなら私が手伝ってあげるから……。』

「イヤイヤイヤ〜ヤ〜！どうせ脱がされるなら女の子じゃなくてお兄ちゃんの手で！それもオフロじゃなくてベットの げふう！」

『アラ……。つい手が……。』

「うう……。病人にその手刀は反則……」

『病人ならこんなうるさいわけないでしょう？ホラ……。行くわよ』

「あう……。』

そのままズルズルと引きずられていく銀髪少女。

今は昼間、普通なら授業がある時間だが、この少女は現在授業を休んでいる。

時空移動の反動でほとんど動けない状態なのだ。

今日で二日目。一日目は昼間まで二人にいじられ続けた後に解放されたわけだが、自力では一歩も歩けなかったので女子寮へとテテユスが連れて行き、ベッドに寝かせたらつい先程まで目を覚まさなかった。

目覚めた後に状況を説明して、現在に至る。

『アラ・・・それなりに動けるんじゃない』

「・・・どうでもいいから脱いでる時は凝視しないでくれない？」

『あ、でもまだフラついてるわね。手伝いましょうか』

「いいから！アッチ見ててよお！触らないでえ！いやあ！」

どうやらイタズラされ続けたためか、彼女に触られることに苦手意識が出来たらしい。

いつの間にか可愛い妹にちょっかいを出す姉という構図が出来上がっていた。

「私一人で入れるから！アンタは入って来ないでよ！見てるのもダメなんだからね！絶対に出るまでここにいなさいよ！」

『はいはい……』

若干フラフラと歩いて行く少女を呆れながら見る。そして言われた通りに目を離す

ドサッ

ふう……とため息をつく

『まったく……無理なら意地にならなくても……』

「アタシ・・・一人で、入れるって・・・」

『ホラ、いつまでも寝てないで。私が流してあげるわ。・・・どうせだから一緒に入りましょう?』

「・・・うん」

『ふふ・・・可愛いわね。きーまりっ』

そうしてテテユスは服を脱ぎ捨てた。

『あゝ。人間界のお風呂もいいわね。いろんな意味で気持ちよかつたわ』

「・・・」

リンはテテユスの背中におぶられて部屋に戻った。

『ずっと背中にあなたを感じてたわ……。膨らみ的な意味で』

リンの顔は紅潮している。のぼせたわけではない

「ねえ……。もうやめてよ。あの時は謝るからさあ……。」「

『うふふふ……。なんだか楽しくなっちゃうのよねえ』

「楽しいって……」

『あなたもそうでしょう？楽しいものはやりたくなっちゃうものよ』

完全に自分で遊ばれてる……。くやしっ……。けれどやり返したらまたやられるので飽きてもらうのを待つしかない

『あゝ私はハマッたものは全然飽きないタイプだから。数年前のゲームを今でも毎日楽しくやるくらい』

嫌なことを聞いた……。絶望するくらい嫌なことを聞いた！

「え？精霊界でもゲームってあるものなの？」

ふとした疑問である。え？存在するの？みたいな

「アハハハハ！カードゲームがあつてテレビゲーム、ネットのゲームがないわけではないじゃない！私はネットゲの廃人ではないケドさ。テレビゲームの方だよ？」

「私と恭介はけっこうゲームは選ぶなあ……。二人とも主にRPGとアクション系。それ以外は専門外」

「私もそんなところよ。格闘ゲームなんて無理。RPGは完全攻略してデータを抹消するのを繰り返す」

「うわっ……。私らはそこまで酷くはないわ」

「ふふふ……。言ったじゃない。テレビゲームの廃人だって。でも。今はあなた達と騒いでた方が楽しいわ。もちろんゲームはやるけど〜」

たまに姿を消してると思ったら帰って遊んでたのか……

でも普通に役割を果たしてからの娯楽だからいいのか

「ふわぁ・・・」

『やっぱり疲れたの？見ててあげるから寝てもいいわよ』

「うん・・・そうする」

少女は横になるとすぐに眠りについた。

そしてすやすやと穏やかな寝顔を見せている

『ふふ・・・。口で何を言われても信頼されてるみたいだね。私・・・』

信頼をしていない他人の前で眠る。それはこの少女にとってはあり得ないことだ。しかも穏やかな、深い眠りとなると尚更だろう。

それほど、目の前にいて、先程本人に眠るように促したテテユスは信頼されているらしい

『それとも・・・ただ自惚れなのかな？自分達の精霊だからってだけなのかも・・・』

彼女はホーリエの説教中に眠らないように大量のタライを落とさせ
たはずだ。

それは・・・ただ眠かっただけだから？目の前の相手が精霊だった
から？あるいは時空移動による疲れで極端に眠くなっただけ？

『・・・信頼されてるって思いたいなあ・・・。本人に聞きたくて
もこの娘ってばそういうところは正直じゃないからなあ・・・』

考えてても仕方ないなあ。

あ・・・眠くなってきたわ・・・。

思えばリンを観るために昨日の朝からずっと起きている。

『うん・・・少しくらいなら・・・いいよね？』

座りこみ、少女の眠るベッドに寄りかかるように体を預ける。
そして彼女もすぐに眠りに落ちた

「・・・無理してるのはあなたじゃないの・・・」

その様子を見ていたリンが呟く

「知ってるんだからね・・・あなたが丸一日以上寝ないで私を観てくれてたこと・・・」

自分が眠ればどうせだからと彼女も眠るだろう。

リンはそのことを知っていて寝たふりをしていたので

「私のことはいいから・・・あなたはゆっくり休んで・・・」

リンはふらつきながら、眠る彼女を抱き抱えて自分のベッドに寝かせる

「・・・ここまで動かしても全然起きないのね・・・」

よほど疲れていたのだろう。すっかり起きる気配がなかった

「私は・・・こっちで充分だから・・・」

リンはイスに座り、机に伏して寝ることにする。

「信頼・・・ね・・・」

馬鹿ね・・・そんなのしてなかったら私は一緒にお風呂にも入らないわよ？

ベッドで眠る女性を眺めると、子供のような寝顔をしていた。銀髪少女はクスリと笑うと頭を自分の腕に預けて眠った。

ピピピピと電子音が部屋中に鳴り響く

『・・・うん』

うっかり寝過ぎてしまったか・・・。

テテユスは目を開けるとベッドの上で横になっていた。

『・・・え?』

一体どういうこと？私はベッドの脇で眠ったはずだ・・・

『あ、あの子は・・・？』

部屋を見渡すと・・・彼女は机に突伏していた

『ま・・・まさか・・・』

自分のために？未だに疲労しているはずの体を起こして私をベッドに寝かせて自分は机で？

こんな自分のために無理をさせてはならない。一度起こしてもベッドに移さなければ！

『ちよっ、ちよっと！起きて！あなたはベッドで寝てなきや！』

「ん・・・。うるさい・・・。別にアンタを気遣ったわけでもなければ、アンタを信頼してるんじゃないんだからね！勘違いしてんじやないわよー！」

『・・・え？』

「あっ……」

『（これって……もしかやツンデレ？ということと言ったことは逆の意味……？）』

「（しまった……！つい寝起きで言っちゃった！……しかもツンデレになってるしいい！）」

「そ、そうだ！メール、メールが来たのよ！確認しなきゃ！」

大慌てでメールを確認するリン。顔が赤いのは寝起きだからではないだろう

『キミは……起きてたの……？』

「……そうよ。アンタがずっと寝てないで無理してるから！寝たフリしてアンタが眠るのを待ってたのよ！」

『でも……キミは……』

「もう体調は回復したわ！机で寝たらスッキリしたの！……明日香が少しでも食べるって食堂で待ってるから行くね。あなたはまだ回復していないでしょうから寝てなさい。それに人前に姿を見せる

わけにはいかないでしょう?」

『そ、そうだけど・・・』

「・・・私はあなたのことは信頼してるから。それにあなたが倒れたら、誰が私の看病をするの? 私は他の女子は明日香くらいしか部屋には入れないのよ?・・・私なら大丈夫よ。・・・おやすみなさい」

そう言うと部屋を出て行ったが、明らかに顔色も足取りも良くなかった。

『・・・時空移動なんてさせなきゃよかったな・・・』

本人が望んで自分に協力を頼んできたことだし、成功して帰ってきているのだから言うべきではないのかもしれないが・・・

『こんなにリスクがあつたなんて知らなかったもん・・・』

あの時『三日くらいは立てなくなるかな?』と言っていた。それは協力した自分がそうなると思っていたが・・・。

力を提供した者ではなく、本当は実際に移動した本人への反動だっ

ただ。

今の彼女は普段からは想像がつかないほど衰弱している

『・・・あの娘の好意を無駄にするわけにはいかないから・・・寝てなきゃ。・・・おやすみ』

テテユスは再度眠りについた

「・・・ただいま」

それにしても時間がかかった。食堂に移動することよりも、食事そのものに。

大丈夫だと言っているのに明日香が心配すると取り巻きの二人も心配するものだから対応に手間がかかった。

体力が低下したせいかわる食べる量も普段の半分以下だった。

だが、思えば休んでいる間、まともに食事をしていなかった。今回の明日香からの誘いがなければ、今日も適当なものを一口食べる程度で済ませていただろう。

動かない体を無理矢理動かして行っただとはいえ、明日香には感謝しなければならぬ。完治したら何かお礼をしなければ

「……まだ寝てるのね」

すやすやと寝ている彼女を見ると、何だか笑みがこぼれてしまう

「リン〜！行くわよ〜！」

「げっ……いって言ったのに……」

今度は風呂への誘い。人混みはあまり好きではないため、混む時間である今はなんとしても避けたい。

……もしかすると拒否の意味で一言だけ『いいわよ』と言ったが、相手には了承の方に取られたのかもしれない。

はっきりと伝えなければ伝わらないことがある。日本語のややこしい所である。

仕方ないので直接断ることにする

「私……断わったはずだったんだけど？」

「あら？そうだったの？でもきちんと着替え持ってるじゃない。せっかくだから一緒に入りましょうよ」

え？着替えを・・・？

自分の足下を見ると、先程まで何も用意をしていなかったはずなのに、今はきちんと着替えが用意してあった

「・・・え！？あれ！？なんで？なんで着替えがあるの？」

「ぼーっとしてる間に用意してたんじゃない？行きましょ？」

はっとしてベッドを見てみる。

・・・すると寝ているはずの彼女が、横になったままであったが腕を振っていた。

『行ってらっしゃい』と腕が語ってきた。手の平から微かに魔力を感じる・・・。

アイツめ・・・勝手に用意しよったな！

「で・・・でも、私って人混み苦手だし、今は上手く動けないし、ほら・・・ね？」

「上手く動けないなら尚更よ。私達が手伝ってあげるから。いいから行くわよ!」

「い〜や〜！バカ〜！バカ天使〜！覚えてるよ〜！この〜！」

ぎゃあぎゃあ騒ぐ少女がずるずると引きずられていく。

その光景をベッドから見てくすくすと笑っていた

「・・・ねえ、あんたら私を見ててそんなに楽しいの？」

無理矢理浴場に連行されたわけだが、さっきからジユンコとももえにずっと見られている

「べ、別に・・・」

「たいしたことではありませんわ〜」

「・・・もしかして明日香と見比べて対照的ね〜とか思ってたんじゃないでしょうね？」

二人揃って視線をそらした。凶星か・・・おのれえ・・・！

「そんなとこないわよ。あなたがふらふらだから心配してあげてる
んでしょっ?」

「そ、そうですね!あなたがいつ倒れるか心配で・・・」

「じゃあなんで今視線をそらしたのよ!」

「そ、それは・・・」

「ほら言葉に詰まってる!凶星だったんでしょ!??」

「た、確かに言われてみれば、あなたと明日香さんは対照的ですよ
ね」

「ぐっ・・・!そうくるか・・・!」

明日香は金髪で長髪、外見的に女王様という感じだが、対するリン
は銀髪のセミロングで、おとなしい小動物という感じ。

リンは表立った行動をしないために余計にそう思われている。

外見で判断したり、裏の顔を知らない痛い目を見るということはほとんどの生徒は認識していないらしい。

そんなやりとりをしてるうちにだんだんと人が増えていく。

「うっ……。人混みキライ……」

「そう言わないで……」

「いや〜！人混みはキライよ〜！人間なんて消えてしまえ〜！」

「……。そこまで嫌なの？」

騒いでいると背後から来た人にぶつかる

「あ……。ごめんね。って……。大丈夫!？」

「ぐ……。くそぉ〜」

元々ふらふらとしていたので頭から倒れた

「おのれ……この恨み晴らすに……ぐはあ！」

今度は踏まれた

「クソ……人間の分際で……！あうっ！」

その次は蹴られた。

そしてまた踏まれる、蹴られるを繰り返す。

「ぐっ……！わざとやってるんじゃないでしょうねえ……！」

「は、早く連れて行きましょう！」

風呂から出て、ふらつくリンを急いで着替えさせる

「み、皆殺しにしてやるんだから……覚えておきなさい……！私を……踏んだり、蹴ったりした奴の顔は……覚えてるんだからね……！」

そう言いながら取り巻きの二人にズルズルと部屋まで引きずられていった

「うっうっ……最近こんなのばかり……。くやし……。！」

「……なんかごめんなさいね」

「いいのよ……あとで皆殺しにするだけだから……」

「やめなさいってば」

「……今日はわざわざ誘ってくれてありがとう……」

「なに言ってるのよ。友達でしょ？」

「友達か……わざわざ病人の面倒をみるなんてね……」

「病人って……あそこまで元気だと逆に怪しかったんだけど……」

「元気だつたらこんな混む時間に入ろうとはしないわよ……。もう疲れたから寝るね……。おやすみ」

「無理だけはしないでね。それじゃ、おやすみなさい」

ボタンと閉まる音が部屋に響く。しばらくしたら鍵を掛けて、部屋の中を確かめる

「まだ寝てるの？……。起きてるんじゃないでしょうね……」

ベッドには未だにすやすやと眠る天使がいた。

……。自分はある状況になっていたのにコイツは呑気に寝てる……

「このやろっ！」

勢いよく天使の上のしかかる

『ぐふえ！な、なによあ〜！』

「あんたよくも……。私をハメたわね！」

『ハメてなんかないって！重いつてば〜！』

「うるさい！そのせいで大変だったんだから！」

『でも楽しかったでしょ？』

「え？・・・そう言われると・・・あまり嫌じゃなかった、かな？」

『それを楽しかったって言うのよ。キミは普段人混みを避けて一人で入ってるから。たまにはオトモダチと一緒に騒いだ方がいいのよ』

「ぐっ・・・！あんたはそれを見て笑ってるんでしょ！？私はそんなのに騙されないからね！」

『素直じゃないなあ〜』

「私は常に正直よ！・・・っ」と

『ほら・・・まだぶらぶらしてるよっ〜』

「こんなに無理させたあんたのせいでしょうが・・・」

『寝なきゃダメだよ。って私が寝てるんだったね』

「邪魔よ！邪魔！あっち行きなさい！しっしっ！」

仕方なさそうにベットから出ていく

『・・・明かり消すね。寝るんでしょっ？』

「当然でしょ！？まったく！・・・おやすみなさい」

ベットに入ると明かりが消される

『しゅん・・・』

「・・・えっ！？ちよっ、ちよっとお！？なにしてるのよー！」

リンが寝ようとしたら突然テテユスが入りこんできた

「あ、あなたは帰るんでしょう!? 帰りなさい!」

『ゲームなんていいよ。．．．一緒に寝たいの』

「い、一緒につて!? ちょっと! 狭いんだから出てってよ!」

『嫌よ。こっちのベットで寝たいの．．．。イタズラなんてしないから．．．。いいでしょ?』

「．．．しょうがないわね。まったく．．．」

『ふふふ．．．可愛い。妹が．．．できたみたい．．．』

「妹．．．? 私が、あなたの．．．?」

聞き返すと返事がない。見るとテテユスは既に眠っていた

「寝るのが早いのよ。．．．ばか」

さっきも寝ていたといってもそれほど休めていなかったのだろう。
自分もかなり疲れている。早く眠って回復に努めよう・・・

「お姉ちゃん・・・かあ・・・」

それが精霊でも・・・悪くはないかもね

第十一話「時空を渡る少女」後編」（後書き）

今回は時空移動のデメリットを書き書き。

さすがにノーリスク・ハイリターンってのはいけないので寝込んで
もらいました。

そろそろデュエルさせなければ。

それでは。

第十二話「クロノスの変―くせかんどく」(前書き)

タイトルが変わっても話は前回からの続きです

それではどうも。

第十二話「クロノスの変―くせかんどく」

朝、目覚めたら天使はいなくなっていた

書き置きによると少し出掛けるから帰りを待ってるとか

「随分と勝手ね・・・」

体力は回復してきたが、まだ全開ではない。
ふらつくことはなくなったが、少しだるいのだ

「どうせだから今日にしましょ・・・」

少女はメールを打ち込み、送信する

「・・・いつになったら帰るのかしら・・・」

少女は今日も授業を休む。

・・・そういえば先生に連絡してなかったわ

準備を済ませてさあ行くかという時にメールが届いた

「・・・リンからか」

メールを見る前からろくなことが書いてないことはわかっていた

仕方ないので内容を見てみる

『話があるから今日は休みなさい。お土産欲しいんでしょ？
あなたの愛する銀髪少女より。』

相変わらずツツコミを入れたくなる内容。

それに健康な奴に休めとは・・・

だがお土産とはお持ち帰りして来たカードだろう。

それだけはなんとしても手に入れたい。なので今日は休む！伝えて
おいてくれ！十代！

十代に休むことを伝えたのでいつ頃来るのか返事を返す。・・・今度は電話が掛ってきた

「・・・もしもし？」

『あんだ病人を動かすつもり！？今すぐ来なさい！もちろん場所は女子寮の私の部屋のベットのの中よ！二人で愛を育むの！さあ、私と一緒にエデンへ　　げふう！』

・・・殺られたか。

テテユスめ・・・ナイスだが相手は一応病人だぞ・・・

そうすると玄関のドアをノックする音

「・・・どちら様で？」

『来たわよ。入れて頂戴』

話をすればなんとやら。

ドアを開けると腕に伸びた銀髪少女を抱えた天使がいた

「随分と早いご到着で……」

『こんな距離飛べば一瞬よ』

たまに思う。翼を下さい！

……それにしてもテテユスの翼はどういう仕組みになっているんだろうか？

『久しぶりね』

「ああ……出番がな。……今どんな調子だ？」

『若干暴走気味だったけど問題なかったわ。昨日はふらふらだったけど今は回復して普通に歩けるようになってるし』

「……俺はお前の容体のことを聞いたんだが」

リンならもう大丈夫だろうか……

「お前は力を消耗してるうえ、リンの看病でほとんど休んでいないはずだ。無理をしていることくらいわかる」

『アハハハハ……。わかる？……。この娘抱えながら飛ぶのにも力を使っただけ……。実はもうヤバイかも……。』

「……。俺の布団でいいなら貸すぞ」

『私は寝れるならどこでも……。』

「なら急いで入って休め」

テテユスからリンを預かり、部屋へ入れる。

彼女は布団の前へ行くとそのまま倒れてしまった

「お、おい！大丈夫か!？」

『私ってさ……。体力回復するのが遅いんだよね。昨日はこの娘にけっこう寝かせて貰ったけど……。全然足りないみたい……。だからおやすみ……。』

話を終えるとすぐに眠ってしまった。

俺は彼女を抱えてきちんと布団に寝かせてやる

「なんかカオスだな・・・」

何故自分の部屋には体力を消耗して辛そうに眠る天使と気絶させられている少女がいるのだろうか。

・・・考えるだけ無駄なのでやっぱり気にしないでおう

「うにゃ〜・・・」

変な猫みたいな声をあげて少女が起きた

「・・・あれ？私は・・・」

「久しぶりだな。恭介お兄ちゃんだぞ」

「・・・あれは夢だったのね。あと少しで美味しく食べられたのに・・・」

「・・・何を見てたのか聞かないし言わなくていい。というか言わないでくれ」

「お兄ちゃんのキノコ狩　　ぶへっ！」

「俺は言つなと言つたはずだ」

「あんたら・・・病人を病人らしく扱いなさいよチクシヨウ」

「俺はお前が病人だなんて思っていない」

「・・・何だと思つてたのよ」

「衰弱してる天使に看病させる迷惑少女」

「うぐっ・・・。反論できない・・・！」

「明日香もメールでだが心配してたぞ」

「実際に明日香の誘いは無理をして行ったことだけは主張したい」

「皆殺しとか言つてたから心配だつて」

「そつち！？私のカラダじゃなくて!？」

「俺も何をやらかすかわからないから注意するよつに伝えておいた」

「・・・誰も私の心配はしないの？」

「誰も殺しても蘇って逆に殺しに来るような奴の心配はしない」

「殺しても死なないヤツとは言ってくれないの！？確かに蘇るケド
な」

「朝霧リンが死んだこの瞬間、《リビングデッドの呼び声》を発動
する」

「私としては除外だけど《奇跡の降臨》がいい」

「100%蘇るのを奇跡とは言わない」

「・・・私ってばそんな扱いなわけ？」

「墓地のリンを対象に《ロスト》を発動したと思ったら《ミス・リバイブ》を発動してしまった」

「それは痛恨のミス！って言わせないでよ！」

「せっかく倒したのに・・・！」

「朝霧リンは滅びぬ！何度でも蘇るさ！」

「バルス！」

「しかし、飛行石はなかった！」

「終わった！世界は終焉を迎えた！」

「ははっ！見る！人がゴミのようだ！」

「全然違和感ない！」

「ちょっとお！そこは何かツッコんでよお！」

「皆殺しとか言ったやつが言っと冗談に聞こえない」

「だってアイツら私の体を踏んだりしたのよ!？」

「踏んだだけで極刑なら俺達はどくなる……。しかも否定しないし」

「私の体力が完全回復したら最初にぶつかつたヤツからぶっ殺す」

「顔とか覚えてんのか？」

「当たり前でしょ？デュエルして勝てたら教育して、負けたら極刑」

「デュエルをした時点で人としての終わりを迎えるのか……。てかお前にデュエルで勝てるわけないし」

「私としては少なくとも一人には勝ってほしいな。新しいキャラ作りたいから」

「今度は何を？」

「もち格闘家。これ以上あの女の好きにさせない」

「あの女って・・・テテユスか？またイタズラされてるのか・・・」

「そうよ！私のことをオモチャみたいに遊んで・・・」

「他人をオモチャにしてるお前が言うな」

「うるさい！あの女にやられる度に私はどんな思いをしているか・・・！」

「だがまんざらでもないんだろ？」

「な、なにを言ってるの！？」

「本当に嫌なら相手の首の骨の一本や二本へし折ってるだろ？つまり・・・そういうことだ」

「わ・・・私が喜んでるとでも言っつもの！？」

「そこまでは言っていない……。と言いたいところだが、最初は嫌でもそのうちだんだんと……」

「ねえ、今日は触って……くれないの？……って言うわけないでしょ！」

「だから今は違っても、そのうちだんだんと……」

「そんなわけないでしょ！私にそんな趣味ないわよ！」

「だが時空移動の時、テテユスがいくら強いといっても、いつかの呪いのように畏くらい仕掛けて拘束できたはずだ。だが、お前はそうしなかった……なぜだ？」

「た、たまたまよ！それに畏にかける準備が足りなくて……！」

「チカラを奪い取る為の陣も描いておいたのか？」

「そ、それは……前日に描き終わっただけよ」

「……お前がチカラを奪う為の計画をしておいて、獲物に逃げら

れる可能性を残しておくはずがないだろ？俺が見る限り、テテユスは背後から揉まれようが抱きつかれようが、その相手が敵ならば一瞬で蹴散らせるはずだ」

「うぐっ……」

「お前もテテユスも、相手に何かを感じていたんだ。だからお前は必要以上に罽を仕掛けなかったし、テテユスもお前のことを信用してほとんど抵抗しなかった」

「そっいえば……！」

「……ここから真面目な話になるぞ。よく聞け」

お兄ちゃん表情が真剣になった……？

「テテユスはお前を信じて行為を受け入れた。……結果、お前の罽は成功したが、アイツのお前に対する気持ちは裏切られたことになったんだ」

「えっ……」

「相手は自分より幼い女の子だ。ほんの少し、度が過ぎてはいたが
かわいいイタズラ程度だと思っていたし、信頼している相手が自分
を卑劣な畏にハメようとしているなんて思えるわけがないだろう？
・お前が時空移動をしていていなかった時、ハメられたアイツは悲
しそうな顔をしてたぞ・・・。所詮は道具なのかな・・・って感じ
でな」

「そ・・・そんなこと・・・」

「その後はふっ切れた感じだったな・・・。自分は朝霧リンの道具。
主と、それに従う駒であり、主人のためなら自分の身を犠牲にして
でも・・・。そんな覚悟を感じたな」

「私は・・・そんなつもりじゃ・・・！」

「お前にそんなつもりはなくても、アイツはそう感じたんだ。ただ、
アイツはお前だけの精霊じゃない。俺の相棒でもある。だから俺は
アイツに『自分がリンにとってどんな存在なのか。ただの道具か、
それとも別な何かか。それを自分の目で確かめる。普段通りを装い、
絶対に無理だけはするな』そう言った」

「そんなの全然気付かなかった・・・」

「アイツはあまり顔や態度に出さないからな。それにお前も自分の

ことで精一杯だったろうから、それは仕方ないさ。・・・だが、今日見たら表情がほんの少し明るくなってた。・・・何かイイコトあったんだろうな」

「・・・昼間は一緒にお風呂入ったり、夜はベットに二人一緒に寝たりした。・・・狭かったけどね」

「主にそれだろうな。・・・拒絶されるか心配だったろうが」

「・・・それを断わってたら？」

「・・・おそらく道具確定だったな」

「・・・断わらなくてよかった」

「・・・お前から直接言ってやれ。自分の想うことを正直に、全てだが、今はダメだ。・・・倒れる寸前だったらしい。寝かせてやる」

「え・・・？なんで・・・？昨日はずっと眠ってたはずなのに」

「本人曰く回復が遅いらしい。・・・嘘だとは思いますが、起きたら女

子寮に行かせよう。その時お前が直接聞いてくれ。聞かれたくない話もあるだろうし、この様子だと恐らく明日まで起きないからな」

「うん……。あ、はい。これ……」

リンが取り出したのはカードの束

「向こうに行って手に入れたカード。行った時に偶然稼動してた新しいDTのカードも含めて3枚ずつだよ。……こんな空気だけ」

「そういえばこの為に行ったんだよな。……ありがとう」

「当たり前だけど私のお金を使ったんだからね！当然トレードもしたけど」

「誰も奪ったものとは言っていないが……」

「怪しいとは思ったんでしょ！？私も同じく3枚ずつ揃えたし！あ……でも単行本付属のやつはお先に頂いたんだっけ」

「……もしかや襲撃か？」

「ちゃんとお金払ったもん！・・・催眠術かけたけど」

「あんまり変わらないぞ。それ・・・」

「だって売ってくれなかったんだもん。仕方ないじゃない」

「やってしまったことを悔やんでも仕方ないか・・・」

「とにかく、渡したからね！・・・他にもあるけど、それはテテユスが元気になってからね」

「ああ、それは問題ない」

「これ以上・・・騒ぐのはよくないから帰るね。私は寝るけど、恭介は新しいカードをデッキに入れて調整しといたら？じゃあね」

「・・・大丈夫か？まだ辛いなら俺も行くが」

「お兄ちゃんは今私なんかじゃなくてテテユスをお願い。いない時になにかあったら大変でしょ？私は一人で歩いて帰れるし、明日には完治するだろうから」

「・・・そういふことなら残ろう。気をつけてな。無理だけはするなよ」

「・・・うん。また明日、ね。」

リンは部屋を出て一人で帰っていった

・・・さて、俺はテテユスを心配するか

リンから受け取ったカードをデッキに入れて調整をしていたら日が暮れてしまっていた。

他の生徒も帰って来ている

「やはり起きる気配なし・・・か」

布団ではテテユスが辛そうに眠っている

「……ちよつと飯食いに行つてくるか」

俺は目を覚まさない女神を残して食堂へ向かった

「よおー。十代、翔。久しぶりだな」

当然出番的な意味でだが

「お、恭介か！久しぶりって今日の朝休むとか言いに来ただろ？」

だから出番的な意味でだと

「恭介君……大丈夫なの？」

ん？何がだ？

「その……妹のリンちゃんは……」

「アイツは死んでも蘇るから問題ない。本人もそう言ってたし」

「そうじゃなくて・・・今日クロノス先生怒ってたぞ？」

・・・え？なんで？

「現在三日連続無断欠席中だとかで・・・」

アイツ連絡入れてなかったのか！？ずっと寝てたから仕方ないのかも。

ちなみに休んだ理由は体調不良で倒れたということになっている。

女子では明日香がそのことを知っているはずだが・・・？

「本人からきちんと連絡よこさないとかダメとか言ってたぞ」

「アイツ倒れたんだぞ？無茶なことを・・・」

俺達は飯を食べながら話をしている。

エビフライの美味さは異常

「クロノスのことだから罰を与えるかどうかでリンにデュエルさせるとか言いそうだな・・・」

この予想が外れてくれるといいんだけど・・・

その後部屋に戻ったが、布団はテテュスに貸しているため俺は床で眠ることにした。

そのせいで朝には背中が痛くなってしまった

「やっぱりまだ起きないか・・・」

未だに起きる気配がない。休んでるのを起こす気にはならないが、寝過ぎるのも良くない

「俺はそれでも休ませるがな・・・」

最初倒れるように眠りについた時と比べると寝顔は大分穏やかになった。

彼女が目を覚ますまでこのまま何時間でも寝かせよう

「それじゃ行くか」

迷惑なメールもこなかった。どうやら今日は普通に授業に出れそうだ

「・・・恭介お兄ちゃん、テテユスは？」

「リンか。まだ・・・起きない。だが、だいぶ楽になってた」

「そう・・・。私、謝りたいの。あなたは道具なんかじゃない、私の大切な・・・家族だって。そう言いたいのに」

「そうだな、それがいい。・・・家族か。そしたら俺はアイツの弟なのか？・・・姉さんとか呼ばなきゃいけなかったりな」

「ふふふっ・・・。恭介がお姉ちゃんとか呼ぶのって似合わないね。すごく違和感ある」

「それを言うな。俺だって恥ずかしいわ。・・・さて、そろそろ行

くぞ。クロノスエンセイがお怒りだからな」

「え・・・？」

「連続無断欠席。倒れたことは知ってるそうだが本人から伝えないとダメとか言ってたらしい」

「そんな・・・嘘でしょ？」

「残念ながら本当だ。呼ばれてるから行ってこい」

「クソ・・・いざとなったら実力行使か・・・」

ブツブツと言いながら歩いていった。

どうやら完全に回復したようだが・・・

「エンセイ・・・」

「ようやく来たノ〜ネ。シニョールリンはサボリ過ぎナノ〜ネ」

「・・・私が倒れてまともに歩けない状態だったって明日香から聞いたんですね？・・・それならば連絡の入れようがないと思うのですが」

「連絡なら電話でもできるノ〜ネ。それに本当に倒れたならば保健室で寝ていれば証明になったノ〜ネ」

「仮病だったとしても・・・？この私が仮病を使ってサボっていたと・・・？ふふふふ・・・電話か・・・そんな手段すっかり忘れてたわ」

「シニョールには無断欠席の罰を与えるノ〜ネ！ただし・・・」

「デュエルをして勝てばいいんでしょう・・・？私には戦いたいヒトがいるんです・・・指名してもいいですか？」

「・・・誰か言ってみるノ〜ネ。相手によっては認めるノ〜ネ」

「私が戦いたいのは・・・手。」

「・・・？もう一度言うノ〜ネ」

「・・・私が戦いたいのはクロノス・デ・メデイチ！・・・あなたよ！」

リンは宣言と同時に全身から殺気を放った。

その殺気にクロノスは思わず身構えてしまう

「センセイの手で直接裁けば早いと思うんですよ。その方が確実に罰を与えることができる。・・・違いますか？」

不気味に笑い始めるリン

「ふふふ・・・まさか生徒相手に戦えないとは言いませんよね？アナタは入学試験で遊城十代と戦った。・・・実技の指導者を倒すかあ・・・どんなにキモチいいのかなあ。うふふふ・・・もう我慢できないわ・・・！今すぐやりましょう？」

「こ、殺される！」

本能的に危機を察知したクロノスは慌てる

「ちょっと待つノ〜ネ！シニョールの言う通り罰を与える側のワタシが戦うわけにはいかないノ〜ネ！よってシニョールの相手は兄であるシニョール恭介にさせてもらうノ〜ネ！」

「……………チツ！やはりか……………」

普通なら倒れた生徒に罰を与えるわけがない。これは恐らく調査。

試験でシンクロ召喚を使った私達がどれだけ強いか…………

「……………そんなことだろうと思ったわ……………いいでしょう。今回は見逃してあげる」

いつの間にか二人の立場が逆転していた

「日時は今日。それもこれからすぐに。人は私が認める人間以外入れないこと！……………あと、すぐ終わってしまったのはツマライナイからライフは8000ポイントでのデュエル……………これでいいでしょう？センセイ……………」

「そ、その条件で認めるノ〜ネ……………それでは移動するノ〜ネ」

「ふふふふ・・・楽しみましょっ?」

話がついたので部屋を出る

「・・・お。どうだった?」

ずっと待っていたのか、部屋の前には恭介がいた

「予想通りよ・・・。クロノスによって仕組まれたデュエル」

リンは立ち止まると、ひと呼吸入れてバカっぽく叫んだ

「その名も・・・『クロノスの変せかんどー!』」

第十二話「クロノスの変―くせかんどく」(後書き)

今回はわりと駆け足で進めました。

次回こそデュエルをやります。

それでは。

第十三話「クロノスの変―くせかんどく後編!」(前書き)

前回からの続きですね。

今回はデュエル成分多めで

それではどうござい。

第十三話「クロノスの変―くせかんどく後編!」

「……その名も『クロノスの変せかんど!』……いい名前でしょう?」

腰に手を当て、胸を張りながらリンは堂々と言う

「……ファーストはどこいったんだ?」

「月一試験で恭介が仕組みれたじゃない。見てるから二人でやっちゃってっせ」

「あれは(仮)だっただろ。そしてまたお前とか……。てかなんで片仮名にしたし」

「私はクロノス先生を殺りたかったのに避けられちゃったわ」

「スルーですか。……まあその光景が容易に想像できるな」

「さて、行くわよ」

今の時間は使われてないデュエル場へ移動した。

ギャラリーは道中出会った十代、翔、明日香、何故かいた三沢だ。

「さて、始める前の準備中に説明よ。これは罰を賭けた制裁デュエル！私は罰なんて面倒だから一切加減しないよ。そしてライフポイントが4000だとお互いすぐに死ぬから8000でスタート。これはクロノスが認めたから問題なしよ。それ以外はいつも通りで・
・準備はいい？」

「ライフ8000か……。随分と懐かしいな……。かなり多く感じる。準備はいいぞ」

「それでは始めルーノ！」

開始の合図で前回と同様にリンは髪留めを外した

「ふふふ……。じゃあ……」

「デュエル!!!」

「前回後攻だったから私が先攻よ。ドロー」

「・・・前回のリンはガジェットで、恭介君は天使。今回は・・・？」

「私はモンスターをセットしてターンエンドよ」

「カードを伏せないの?・・・事故かしら」

「・・・いや、何か考えがあるのだろうか」

「何を考えてるかわからんが俺のターンだ。俺もモンスターをセット、カードを二枚伏せて終了だ」

「私のターンよ。手札から《大嵐》を発動!吹き飛ばべ!」

「ちっ・・・!チェーンで《鳳翼の爆風》を発動!そのモンスターをデッキトップに戻す!コストは《ウィード》だ」

「ドローロック・・・もう一枚は《強制脱出装置》ね・・・嫌なカードだわ」

植物・・・？いや、あれは・・・

「手札から《テラ・フォーミング》発動。《伝説の都アトランティス》をサーチする。そしてまたモンスターをセット。カードを一枚伏せて終了」

「俺のターン・・・俺もモンスターをセット、カードを一枚伏せて終了だ」

「なんだ・・・お互い守り重視か？」

「あの時はお互いにビートダウンだったけど今回は違うのかしら」

「私のターン。サーチしたことでデッキトップは変わったわ・・・。またモンスターをセットして終了よ」

「・・・お互い動かないな、俺のターン。セットしておいた《サイクロン》を発動。お前のその伏せカードを破壊する」

「チェーンはしないわ。・・・私の伏せも同じなもの」

お互い《サイクロン》をセットしてたのか・・・

「・・・そろそろ動くぞ。《キラー・トマト》と《イービル・ソーン》を反転召喚。《イービル・ソーン》効果。自身をリリースして300ダメージを与える」

リン

LP7700

「そして同名カードをデッキから特殊召喚する。俺は《イービル・ソーン》を二体出す。そして手札から《夜薔薇の騎士》を召喚。効果で手札から星4以下の植物を特殊召喚できる。俺は《ローンファイア・ブロッサム》を出す。効果は植物をリリースし、デッキから植物を特殊召喚できる。俺は自身をリリースし、もう一体のローンファイアを出し、再度リリース。《椿姫ティタニアル》を特殊召喚する！」

「ふふ・・・墓地肥やしに大量展開、ね」

「そして場の《キラー・トマト》と《イービル・ソーン》二体に《

夜薔薇の騎士』をチューニング！……レベルは9だ。《ミスト・ウォーム》をシンクロ召喚！」

「アイツは確か……」

「知ってるの？三沢君」

「……以前リン君とデュエルした時に出されたやつだ」

「リンとデュエルを！？いつの間に……」

「……呼び出されたんだ。その時にな」

「《ミスト・ウォーム》の効果で相手のカードを3枚まで……モンスター2枚を戻す！」

「すげえ……一気にガラ空きだ」

これで手札は0枚だ……。ゴーズを持っているかもしれないが……

「バトルフェイズだ！二体でダイレクトアタック！」

「ぐっ……」

リン

LP2400

「ダメージステップ終了時だけど……残念ながら何も無いわ」

「俺はターン終了だ」

「凄い……。一気にライフが5600も……」

「……なるほど。確かにこれではすぐに終わってしまっな」

「私のターン……兄貴の手札は0枚。それに対して私は6枚……
反撃開始よ」

クソッ！俺の手札が尽きるのを待っていたのか！

「私は《レプティレス・ナージャ》を召喚する！……もちろん攻

撃表示でね。そしてカードを三枚伏せてターンエンド！」

アイツは……！絶対に許さない

「反撃開始って言ったのに普通に終了しちゃったよ？」

「可愛い……。じゃなくて、あの状況で普通攻撃力0のモンスターを召喚するだろうか？誘っているのか、それとも……」

リンのライフは2400。普通にナージャを攻撃すればそれで終わるはずだが……

「俺のターン。ドロー」

「私はスタンバイフェイズにリバーオープン！」

スタンバイに発動だと？

「罠カード《バトルマニア》を発動。このカードは表側の相手モンスターを全て攻撃表示にし、強制攻撃させる。もちろん表示形式は変更できない。攻撃対象は私の《レプティレス・ナージャ》だけど、止められるのかしら？」

「・・・バトルフェイズ。二体でナー ज्याに攻撃だ！」

「・・・ようこそ。私の領域へ。リバースオープン！手札の《スノーマンイーター》を捨てて《レインボー・ライフ》を発動！ダメージが全て回復に変わるわ。・・・さあ、来なさい！」

「クソッ・・・！最悪だ・・・！」

リン

LP7700

「そんな！せつかく与えたダメージが・・・」

「私のナー ज्याは戦闘によっては破壊されない。そして・・・バトルフェイズ終了時に戦闘した相手の攻撃力を0にする！うふふふ・・・私を回復させてくれるなんて・・・。可愛い子達ね」

「・・・戦闘破壊されないモンスターを使って回復と相手の戦力を無力化するとはな」

「・・・絶対に許さない。俺はモンスターをセットして終了だ」

「私のターンよ。兄貴の場の雑魚二体をリリースする」

「相手のモンスターを生け贄に!?!」

・・・アイツか!

「私は手札から《レプティレス・ヴァースキ》を特殊召喚!そしてフィールド魔法をセットし、バトルフェイズ!ヴァースキで攻撃する!」

「・・・カンが鋭いな。《メタモルポット》の効果でお互い5枚ドロ―だ」

「私はそのままターンエンドよ」

「俺のターンだ。墓地の《メタモルポット》、《ミスト・ウォーム》、《キラートマト》、《夜薔薇の騎士》、《ローンファイア・ブロッサム》を選択し、《貪欲な壺》を発動。選択したカードをデッキに戻し、二枚ドロ―する!」

「残りの墓地には闇が三体・・・まさか!?!」

「・・・その通りだ。現在墓地のモンスターは《ウィード》、《ロ
ーンファイア・ブロッサム》、《椿姫ティタニアル》、そして閻魔
性の《イービル・ソーン》が三枚。・・・俺は《ダーク・アームド
ドラゴン》を特殊召喚する！」

「クソ・・・！」

「目障りな爬虫類には消えてもらおう。ダムドの効果で《イービル
ソーン》三枚を全て除外し、モンスター二体と伏せカードを破壊す
る！」

「チエーン！《和睦の使者》でこのターン受ける戦闘ダメージを0
にする！」

「防いだか・・・いくぞ。俺は手札から《フェニキシアン・シード
》を召喚！効果で自身をリリースすることで《フェニキシアン・ク
ラスター・アマリリス》を特殊召喚だ！」

「出たな！・・・やはりそのデッキか・・・！」

「ああ、このデッキの主役だ。今まで引けなくて困ってたんだ。・・・
ダムドで攻撃だ！」

「えっ……？ひゃああ！？」

効果でダメージが0だとわかっていても突然のドラゴンからの攻撃に身構えるばかりでなく、目を瞑ってしまった

「続けてアマリリスでダイレクトアタックだ！」

「うっ……！」

今度は植物モンスターの攻撃。ドラゴンに攻撃されたせいでこちらも身構えてしまう

「アイツ……！戦闘ダメージが0だとわかってて何故攻撃を……！」

「……これも戦略の一つかもしれないわね。さっき二体のモンスターに攻撃された時とはリンの反応が違うもの。……恐らく、ダメージが無いからと安心しきっているところへいきなりドラゴンが攻撃してきたものだからかなり驚いたのよ」

「あっ……」

攻撃したアマリリスがリンに張り付き、突然輝きだす

「がふっ」

リン

LP6900

「爆発した！？なぜ！？」

「《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》の効果。破壊され、墓地に送られた時に800ポイントのバインドダメージを与える。コイツは自分から攻撃した場合、ダメージ計算後に自壊する効果も持っている。よって相手に戦闘ダメージを与えられなくても自壊するわけだ」

「・・・その効果があるから攻撃するのはわかる。・・・でもなんでもいきなりダムドに攻撃させたの？」

「ダメージが無いからと安心してるとかと思ったからさ。そしたらお前だったらきちんと身構えて目まで瞑っちゃうんだもん。・・・つまり、宣戦布告ってわけだ」

「・・・屈辱的だわ・・・！もう容赦しないわ！」

「お前は最初から本気じゃなかったのか？・・・カードを三枚伏せる。エンドフェイズ、アマリリス効果で墓地の植物、ティタニアルを除外し、守備で特殊召喚。終了だ」

「バーンに自己再生能力を内蔵したモンスターか・・・」

「私のターン！《ハリケーン》を発動！」

「チェーンで《異次元からの埋葬》を発動。除外されている《イービル・ソーン》を全て墓地に戻す。更にチェーンで《火霊術 - 「紅」》を発動。アマリリスを射出し、攻撃分の2200ダメージを与える」

「ぐぐっ！」

リン

LP4700

「おそらくこれがこの前リンが言っていたバーンデッキね。バーンのせいで迂濶に攻撃できなくなるし、放置しても特攻してきて自壊

される。相性からしておそらく《バックファイア》も複数枚積みまれているわね」

「召喚補助モンスターも再生のコストにできるな。最初に使った《鳳翼の爆風》なども手札のあのモンスターを墓地に落とせる・・・か」

「・・・やっぱり嫌な構築してるわね」

「お前にだけは言われたくないな」

「ふふ・・・そうかもね。手札から《封印の黄金櫃》を発動。デッキから《貪欲な壺》を除外し、二回目のスタンバイフェイズに手札に加える。そして《デブリ・ドラゴン》を召喚、効果で墓地から《スノーマンイーター》を特殊召喚。そして二体をチューニング！」

「今度はリン君がシンクロ召喚か・・・」

「・・・私の本気を見せてあげるわ！・・・封印から目覚めし氷の龍よ、今こそ我が前に現れよ！氷結界の龍　　グングニール！」

フィールドに巨大な氷の塊が現れ、その中から伝説の槍の名を持つ龍が姿を現した

「グングニール……！」

「なんて綺麗な龍……」

「ウフフ……この龍、グングニールは私の一番のお気に入りよ。そして《伝説の都アトランティス》を発動！このカードは《海》として扱い、水属性の攻守を200上げて場と手札のレベルを一つ下げる」

最初にサーチしたアトランティスをようやく発動か……

「行くわよ……！グングニールの効果！手札の《レプティレス・ガードナー》を捨てる。やれ、グングニール！」

効果発動の宣言とともに場内の気温が下がったように感じる……。

そしてグングニールが咆哮したと同時に、俺のモンスターは無数の氷の槍で串刺しになった。……が、

「なっ……！会場が……！？」

効果行使した本人を除く全員が驚いた。

グングニールの氷の槍は俺のモンスターだけでなくその周囲までも貫き、凍らせたのだ。

ソリッドビジョンにしてはリアルすぎる・・・まさか本当に!?

「・・・何を驚いているの？容赦しないと云ったはずよ!・・・バトルフェイズ!グングニールで攻撃!」

氷の龍の冷気を集約したブレスが蒼い閃光となり、対象である俺へと降り注いだ

「がっ・・・!」

恭介

LP5300

攻撃が終わり、周囲を見ると愕然とした。

・・・俺の周囲が全て凍っている!?

・・・それにあの攻撃を受けた時に物凄い勢いで体温を奪われたのを感じた・・・。間違いない。この攻撃は本物だ・・・!

「この攻撃だけど・・・体験したからわかったでしょ？まだ兄貴はライフがあるから平気でしようけど、ライフが無くなったらどうなるのかな・・・？」

「この光景にリン君のあの台詞・・・まさかこの龍は本物なのか！？」

その事実気付いたクロノスが口を開く

「シニョールリン！待つノーネ！このデュエルは直ちに「止めるな！・・・ヒイツ！」

中止させようとするクロノスにリンが腕を向けると、クロノスの周囲に巨大な氷柱が落下した

「次は当てるから・・・さて、続行する？」

「ああ・・・当然だ！」

「ふふふ・・・。なら終了よ」

「俺のターンだ！ドロー！」

今の手札にグングニールを対処できるカードは無い。・・・ならば！

「俺はモンスターをセツト、カードを二枚伏せ、墓地の《イービル・ソーン》を除外してアマリリスを蘇生、ターンエンドだ！」

「私のターン。一回目のスタンバイフェイズ。次のターンに《貪欲な壺》を回収するわ。・・・私はモンスターをセツトして終了する」

「・・・攻撃しないのか？」

「伏せが二枚あって壁の片方は自己再生するなら攻撃する意味はないわ」

「まあいい。俺のターンだ。俺はアマリリスを攻撃表示にして、バトルフェイズ。伏せモンスターに攻撃だ！」

アマリリスの攻撃で伏せのモンスターが明らかにになる。

そこには法衣を着て太ももを露出させている女性がいた

「私のモンスターは《氷結界の封魔団》よ。守備はアトランティス

によりアマリリスと同値の2200。よって戦闘破壊されない」

破壊できなかったのが残念だったが、相変わらずいい太ももである。
ソリッドビジョン最高！封魔団の太ももに挟まれない。

・・・じゃなくて、なぜ爬虫類メインのデッキに封魔団が・・・？

「アマリリスの効果で自壊、そしてバーンダメージを与える」

植物の爆発は封魔団をすり抜けてプレイヤーのリンを襲った

「ちっ・・・」

リン

LP3900

「俺はカードを一枚伏せてエンドフェイズ。《イービル・ソーン》
を除外し、アマリリスを蘇生。そして《火霊術 - 「紅」》で射出し
て2200ダメージだ」

「ぐっぐっ・・・！」

リン

LP1700

「そして再度を除外し、アマリリスを自己再生。ターンを終了する」
イビル・ソーン

「リンはあと1700。あと三回アマリリスが破壊されれば・・・」

「加えて恭介はあと5300で伏せが二枚あり、墓地の植物の数も多い。リン君・・・どうする？」

・・・そう。自分の手でグングニルを対処できないならばプレイヤールのリンをバーンで焼き尽くすしか方法はない。

俺の伏せはミラーフォースとこのターンで引いた《激流葬》だ。
《貪欲な壺》のリカバリーを含めてリンの手札は4枚になるだろうが・・・どうなる？

「・・・ドロー。ふふ、ふふふつ、アハハハハツ！私の・・・いいえ、このデュエルのラストターンよ・・・！覚悟しなさい！」

「なにっ！!?」

会場の誰もが驚いた。

俺の場は二枚の全体除去と二体の壁モンスター。
ライフは5300。現在の二体の攻撃を受けても4100ダメージ
で耐えられる。

もちろんリンは《大嵐》も《ハリケーン》も使っている。《大寒波》
《雷》を使うにしても、そしたら《貪欲な壺》が使えなくなる。
この状況を1ターンでひっくり返すカードがあるのか？

「すぐにわかるわ・・・！スタンバイフェイズに《貪欲な壺》を回収し、発動。回収対象はレプティレス・ナージャ、ヴァースキ、ガードナー、スノーマンイーター、デブリ・ドラゴンの5体よ・・・無効にできる？」

「・・・できない」

「・・・ならば回収し、二枚ドロー。そして、私はフィールド場の魔法使いである《氷結界の封魔団》をリリースして、あるモンスターを攻撃表示でアドバンス召喚する。・・・ここまで言えばわかったかしら？」

「・・・ま、まさか！そのデッキに!？」

「恭介のあの反応は・・・本当に打開できるカードがあるのか!？」

「私は封魔団をリリース！・・・降臨せよ！全てを封じる氷の魔法
使いよ！《ブリザード・プリンセス》をアドバンス召喚！」

「クソツ・・・！本当に持っていたのか！」

氷のプリンセスの能力で俺の伏せが凍らされて発動できなくなった

「・・・あのモンスターに既視感があるのは気のせいかしら・・・
？」

こんな状況でなんだが明日香、漫画版でのお前の切札だぞ！

「プリンセスはこのターン相手の魔法、罾を封じるルール効果、魔法
使いをリリースすることでリリース軽減をする能力を持つ。・・・
お兄ちゃんの伏せはなぐに？」

「・・・ミラーフォースと激流葬だ」

「残念、全て無効よ。・・・まさかあの状況を再現できるとは思わ
なかったわ」

それは俺もだ……。確かあの時はヨハンのミラフォを無効化してトドメを刺していた。今回はそれに激流葬のオマケまで付いている……

「……いくわよ！手札二枚をコストにグングニール効果発動！雑魚を消し去れ！」

アマリリスと伏せの《ガード・ヘッジ》が串刺しになった。アマリリスの爆発がリンを襲うが、もはや意味はない

リン

LP900

「あと一歩だったのに……」

「偶然……ではないだろうな。これも彼女の実力だろう」

「バトルフェイズに入る。攻撃力が2700のグングニールと3000のプリンセスの攻撃を受けました。……合計は？」

「……5700。俺の……負けだ」

「よくできました。《氷結界の龍グングニール》で攻撃！フリージング・プレス！」

「があああっ！」

恭介

LP2600

「……これでトドメよ！《ブリザード・プリンセス》でダイレクタアタック！」

「ぐあああああ！」

「……俺は、生きているのか？」

プリンセスが振り降ろした氷塊が直撃、潰されたと思ったのだが、それはただのソリッドビジョンだった

恭介

だが、グングニールの攻撃では実際に服の一部が凍っていた。

これはいったい・・・？

「私の勝ちよ。・・・不思議に思っているでしょうけど私が実体化させたのはグングニールだけよ」

実体化・・・以前猛吹雪を発動させていた時、あれはギャグ補正による現象だとばかり思っていた。

だが・・・今回は？

「私はサイコデュエリストだと言っていたでしょう？・・・以前の吹雪はギャグ補正が必要だったけど、もう私には実体化に必要な補正なんていらなくなってしまうの。・・・思い出してみなさい。あの試験から今までで、私に何があったのかを」

リンは俺に近づきながら話す。

以前は無理で現在はできる？・・・試験の後だった？

「・・・まさか、時空移動の時か!？」

「・・・確かにその時だけど、何があった？」

「テテユスに揉みしだかれた！」

「確かにあの時はかなりヤバかったわ。あの女・・・途中から服の中に手を入れてくるんだもの・・・。あと少して胸だけで・・・って違うわよ！」

「ぐおおっ!？」

リンは顔を赤くしながら俺の周囲に巨大な氷柱を降らせてきた。・・・
・当たれば普通に死ぬな。コレ

「・・・冗談だ。あの時奪ったチカラが・・・？」

「わかってるならそれをいいなさいよ!・・・そう。あの時は物質変換に必要な魔力が足りなかったから貰っただけだった。だけど昨日帰った時・・・時空移動してから初めて自分のカードを触った時、異変に気付いた」

「異変・・・？」

「ただのカードなのに、鼓動を感じたの。まるでモンスターが生きているかのように。・・・その時いきなり試してみようかと思ったのが失敗だったけどね」

「・・・何があった？」

「試してみたのがこの子、グングニールだったんだけど・・・私の部屋がみんな凍っちゃってね。急いで寮を出て力のコントロールをした。他の生徒が帰ってくる頃には完全に制御できるようになったわ。・・・ほら、この通り」

リンはパチンと指を鳴らすと、俺とクロノスを囲んでいた氷が一瞬で砕けた。

・・・俺達は砕けた氷に襲われたが

「私の部屋も濡れてはいるけれど今は元通りよ。・・・私が実体化できるのは水属性モンスターのみなの」

「・・・決まっているのか？」

「決まっていなかったけど制御するには一つの属性だけじゃなき

や無理だった。光属性は恭介が気に入ってるから私は水属性。氷とかキレイでしょ？・・・やろうとすれば《ブリザード・プリンセス》の攻撃も実体化できたわ」

「そしたら・・・俺は？」

「ライフは0だから氷塊に潰されてグツチャグチャ。でも殺すつもりなんてなかったから実体化させなかった。グングニールでトドメを刺してたら凍りづけだったのよ？ライフがあったから服が凍っただけで済んだけど」

「ハハツ・・・そりゃどうも」

「全ては恭介、あなたが自分で起こしたことよ。・・・そのことを忘れないで！」

リンは未だにフィールドに残っていたグングニールを消し、前髪をまとめる

「・・・俺があの時攻撃したからか」

あの時・・・ダムドで攻撃した時だ。リンの不意を突き、動揺させる作戦だった。

その作戦は成功したが、逆にそれがリンの逆鱗に触れてしまい、俺はアイツによって実体化させられたグングニールの餌食になったのだ

「なあ、さっきから二人で何を話しているんだ？」

「げっ……十代！」

俺は話をすることに夢中で十代達が近寄って来ているのに気付かなかった

「これからのことよ。私の代わりに頑張ってたって」

え……？どついう意味？

「言ったでしょ？このデュエルは罰を賭けた勝負。敗者は罰を受けるのよ」

「え……？なんで俺が罰を？」

「恭兄も無断で休んでたでしょ？自分でも言ってたじゃない。先生に直接伝えないとダメだって」

そういえばそうだった。三日前はリンで遊んでて、昨日は十代に伝えたが、どちらか先生には直接言ってはいない

「……つてことは!?!」

「敗者には罰を与えるノーネ」

「あれは俺達にデュエルさせる為の口実だったんじゃ……」

「あ、それは私が勝手に言ってただけよ。クロノスがどう思ってたかは知らないけど」

「……もしここで逃げたら?」

「逃げられたらシニョールリンに罰を与えるノーネ」

「ワハハハハ!さらばだ!」

「なんでえ!?!ちよつ、待ちなさいよ!」

「無断欠席のデュエルには勝っても教師に向かって攻撃するなんて前代未聞、お話にならないノーネ!」

「じゃあ私も逃げるうう!」

「逃がさないノーネ!ここで逃げたら退学にするノーネ!」

「退学・・・!?まさか・・・退学させると脅して部屋に連れていきそのままベッドへ・・・?」

「そんなわけないでしょ・・・。あなたはそういう問題発言を控えなさいよ・・・」

周囲を見ると野郎衆は何故か顔を赤くしている・・・。特に三沢

「いいから部屋まで来るノーネ!」

「ぐっ・・・!離して!ヘンタイ!セクハラよ!」

ズルズルと連れていかれる銀髪少女。この光景は何度目だろうか?

「教師が女子生徒の腕を掴んでセクハラならその女子生徒に抱きついた三沢はゲフンゲフン」

「き、恭介！何故ここに！？」

「畏カード《シフトチェンジ》だ。罰の対象をリンに変えた。それよりも俺の口はさっきの話がしたくて堪らないようだ！」

「抱きついた・・・？それに三沢君、さっきの話ってどういうこと？」

「なに、俺の知らないところで三沢は妹と　おっと！抱きあって　口が勝手に！いい雰囲気　ハハハッ！唇を奪つて　悪いやつめ！・・・ん？どうした三沢博士」

「・・・大事な話があるんだが」

「拒否する。野郎との O H A N A S H I　なぜ興味ない」

「いいから頼む。・・・ちょっと来てくれ」

「荒事はデュエルで解決させようぜ？大丈夫、引きが悪くなければすぐに昇天させてやるぞ？」

「そつちの話でもないんだ・・・」

「・・・何か楽しいことないか？」

「楽しいことだと・・・？」

「今度でいい。三沢博士が楽しいことを提供してくれるなら・・・してやるが？」

「そんなことできるのか!？」

「大丈夫だ。てか俺に任せなきゃこの状況を解決できないだろ？」

「な、何でもいいから頼む！」

「了解。・・・ほいっと」

予め準備をしていた陣の中にとある像を置く

「・・・なんだそれは？」

我等がテテユス姐さんお手製もけもけの像である

「詳しくは言えないが・・・もけもけだ。・・・いくぞ」

陣の中のもけもけが眩しい光を放った

「ちょっと、さっきから二人で何を話してるの？それに三沢君、さっきの話って・・・。アラ・・・？さっきの話ってなんだったかしら？」

「ん？どうしたんだ？」

「いえ・・・ごめんなさい。私の勘違いだったわ」

「もしや本当に・・・？」

「言っただろ？記憶を消せるって。まあ少しだけだがな」

記憶の消去はこの前リンがやったことと同じだ。ちなみにこの術の師匠は当然だがテテユス姐さんだ。今回消したのは三沢の秘密。きっかけは『三沢が万丈目サンダー！と叫ぶこと』というあり得ない条件である

「だが悪い知らせがある。俺は今のような状況が楽しくて堪らない。またいつこの口が勝手に喋るかは俺の気分次第だ」

「なっ……！それじゃあ……！」

「リンは自分が深く関わっていることだから言っただけではないが第三者の俺には関係ない。むしろ面白がって言いふらす側だ。そういうわけでこれからもヨロシクな、三沢博士」

これが前に言っていた揺するネタである。こういうことは普段はリンが率先してやることだが、リンと三沢両名の弱みなので俺しか話そうとしない。

みさわのころはふかくきずついている！こうかはばつぐんだ！

「恨むならやってしまった過去の自分を恨め。一瞬でも心を開いたあの時のリンを恨むんだな！フハハハハ！」

あの時のリンは確かにヤバかった。

普段とのギャップもそうだが、あの距離で、あのシチュエーションである。

俺でも階段を登っていただろう。・・・何の階段だつて？・・・俺に言わせるな

「ちなみに俺はハマツたら全然飽きないタイプだ。数年前のゲームを今でも楽しくやったり、馬鹿みたいなやり込みゲームを馬鹿みたいにやり込んだりするくらいに。今は朝霧リンと三沢博士をこのネタで揺ることが楽しくて仕方ない」

・・・嫌なことを聞いた！それも死刑宣告に等しい絶望的なことを聞いた！

「止めるならデュエルで止めるんだな。ただし、その時は遠慮なくワンキル特化のデッキを使うが」

実力行使と記憶消去は不可能いうことだけは言っておこう。

前者は言うまでもなく、後者は以前だが、現在寝ている精霊の加護を受けたからだ。

もう怪しげな術は精霊の加護のおかげで通用しない。それは例えリンが行使するものであってもだ

「さて、俺は帰るとしよう。三沢博士、楽しみにしているぞ。」

うつむく博士をその場に残して俺は自分の寮へと帰った。

部屋に着くと布団ではまだテテユスが寝ていた

「いーかげん起きてくれないもんかねえ」

仕方ない。今晚も床で寝るか。

・・・机？俺って机では眠れないんだよね。よし寝るか！

「はあゝ・・・よつやく終わったわ」

あの独特の口調でのお説教はさすがに堪える。

ついでに反省文十枚のオマケ付きである

「普通反省文がメインでしょ・・・。」ついでに朝までに反省文を書いてもらうノゝネ』ってなによ・・・。それに今もう十時過ぎてるのよ？女の子に夜道歩かせて、そのうえ朝までに4000文字以上書けって・・・。あゝ！ムシヤクシヤするううう！」

アカデミアを出て寮へと歩いていく

「……誰よ？隠れてないで出てきなさい！」

リンは人の気配を察知し、デュエルディスクを展開させる

「私を襲おうつての！？私は今かなり機嫌が悪いのよ！早く出ないと凍りづけにするわよ！？」

リンが叫ぶと予想外な人影が現れた

「……リン？」

「あ……明日香！？なんでここに……」

「ずっと帰って来ないから心配になったのよ。……随分と長かったわね」

「……もしかしてずっと待ってたの？」

「まさか。ほんの少しだけよ」

「そこは嘘でもいいからずっと待ってたって言ってよ……」

「あら、ごめんなさい。ほら、行きましょ？」

「うん……ありがとう」

そのまま二人は女子寮へと戻り、部屋の前で別れたが……

「このままハッピーエンドで終わらせてよー！反省文なんていーや
」！」

銀髪少女の課題が始まった

第十三話「クロノスの変―くせかんどく後編!」(後書き)

今回の恭介のデッキは植物族のアマリリスバードで、リンのデッキはレプティレスになります。

当然ながら私なりのアレンジがしてあります

リンのブリザード・プリンセスなどは本来爬虫類には入らないのですが
守りが堅いデッキなので相性自体は悪くはないと思います。

完全に私の趣味ですけどね

分かりづらい点等あればよろしく願います。

それでは。

第十四話「白い…」(前書き)

謎のタイトルですが、白い何かの話です。

たまには少しラブコメってみようかなと

それではどうぞ。

第十四話「白い…」

「くそぉ～あのペペロンチーノめえ～！」

期限の朝までになんとか終わらせた反省文をリンはクロノスに提出したのだが……

『全体的に文章に気持ちが悪くもっていないノ～ネ。それに改行が無駄に多すぎて文字数稼ぎをしているのがバレバレなノ～ネ！』

朝まで休まず必死に書き続けた文章にダメ出しを喰らったうえにまた説教されたのだ

「反省文を十枚なんて書けるわけじゃないでしょうが……！真面目に反省して書けるのは最初の三枚までが限界だつての……」

一応十枚という課題のクリアと二度目の説教で釈放されたのだった

「……そういえばテテユスは大丈夫かな？」

すかさずメールを打ち込む

『今から部屋までテテユスのお見舞いに行くからお茶の準備してね。お土産第二弾の放出よ!』

「これでよしと・・・」

リンはメールを送信すると恭介とテテユスのいるレッド寮へと向かった

メールの着信音が部屋に鳴り響く

「・・・リンか」

メールを確認。・・・お茶が俺の部屋にあるとでも？

「お土産か・・・この文面からして菓子類だろうな」

『私がお茶の用意しよつか?』

「やれるならよろしく頼む」

『ずっと寝てたから体動かさないとマズイのよね。太っちゃうわあ〜』

「倒れてたのなら仕方ないさ」

『仕方ないさ。じゃないの!私がぼっちゃり天使になったらどうするのよ〜』

「それはそれで・・・面白いかもな。昔やってたぞ。付いた脂肪を叩いて胸に移動させバストアップとか・・・」

『そんなのいらないわよ〜!マスターは今のサイズじゃ不満だって言うの!?!?』

「いや、俺的には今ぐらいの大きさがベストだが、お前が望んでいいかと思っただな」

『望んでるわけじゃないの!今のこの細さを維持するのもけっ』

「こう大変なんだから〜！」

「なら例しに本当にぽっちゃりになってみたらどうだ？ けっこう笑えそうだぞ？」

『・・・もし吸収天児みたいな体系になったらどうするの？ それでもマスターは笑えるの？』

テテユスがあんなデブにだと!？

「頑張つて体を動かせよ! 無理はしないように」

『ほら笑えないでしょう!？ 私だって太るのなんて嫌なんだからね』
『!』

「ああ。俺が悪かった。・・・仮にお前が天児の姿をしていたら俺は使っていなかったろう。反省している」

『・・・使つてなかったって、どういふこと?』

「実は俺さ、昔・・・最初は、ずっと植物をメインで使っていたんだ」

『えっ？天使じゃなかったの？』

「ああ。この世界で言っているのかわからないが、構築済みデッキってのがあってな。魔法や罠カードがけっこう強いデッキがあったから買ったんだが、そのデッキのモンスターが天使だったんだ」

『それじゃあ私達天使は・・・？』

「・・・酷い言い方だが、その時はただのおマケ状態だった。けどな、その後にあるカードを見つけたんだ」

『あるカード・・・？』

「・・・俺って色の中では白が一番好きなんだがな、そのカードには銀の長髪、白を基調とした服、白い翼を持つ女性の天使が描かれていたんだ」

『え・・・？』

「俺はそのカードイラストを見た時、綺麗だと思った。その後能力を見たらそいつは上級モンスターで、攻守が一般的な数値で、光属性だった。そして天使を引くともう一枚引けるという効果を持つ

ていた」

『それってもしかして・・・私・・・？』

「臭い言葉だが、運命だと感じたよ。たまたま買った天使のデッキ。たまたま行った店で、たまたま見かけた一枚の天使。それもそのカードは一枚しかなかった。その天使は俺が好きな容姿をしていた・・・」

『・・・それから？』

「それから俺は、そのカードが最大限効果を発揮できるように天使族を必死に集めた。友達とのトレードなどもした。《アテナ》や《ヴァルハラ》も揃えて、それからしばらく経って《大天使クリステイア》などの強力カードが登場して、完全に天使が主力となった・・・。つまり、テテユス・・・お前に一目惚れをしたあの日がなければ、俺は天使を主力にすることはなかったんだ」

『私が・・・いたから・・・？』

「ああ。お前がいたからだ。お前の存在がなかったら、今の俺はいないと言ってもいい。お前のために天使を組んで、お前の効果を活かすためにドロウ特化にする。もちろんこの言葉に嘘はない。そうだろう？」

『確かに・・・下級に優秀な《ライオウ》とかは入っていない・・・』

「お前の効果の邪魔になるからだ。この中にゴーズなどが入っていないのも、全てはお前のためだ」

『私なんかのために・・・？それで負ける危険が増えるとわかっていても？』

「・・・ああ。だからこれまでずっと使ってきたんだろ？俺は絶対にお前をデッキから抜いたりはいしない。そして、これからも《光神テテュス》を使い続ける。俺が・・・愛しているヒトだから・・・」

『マスター・・・！』

「・・・さて、まだまだお楽しみ・・・と言いたいところだが、もうすぐリンが来るぞ。ラブコメ終了！」

『え〜もつ？しょうがないなあ〜』

「けっこんな時間潰しにはなっただろ。お茶の準備だ！」

『は〜い。．．．ところで今の話って．．．』

「もちろん全部実話だ。俺がここまで凝ったフィクション話を語れると思うか？．．．当然リンも知ってるから嘘だと思っなら聞いてみるといい」

『ん〜ん、聞かない。話の態度とか構築とか見れば本当だってわかるから』

「．．．本音を言っとルパンダイブをしたがってる俺ガイル」

『．．．キミならいいよ。ダイブでも何でも、全て．．．受け入れてあげるから』

「お言葉に甘えてひゃっほ〜い．．．なんてやるか！ラブコメは終了と言ったらろっに」

『マスターから振ってきたんでしょ〜？それにいい雰囲気にして勝

手に終わらせるのもドドいわよ〜』

「あそこで終わらせないと階段を登りそうだったんでな」

『私なら最初っからマスターの好きでいいって言ってるじゃないの』

「それを許さないヒトがいることを忘れてはいけない。ホラ、急いでお茶だしてくれ」

『ちえ〜。ほいさっさ〜と』

「うおっ!?!」

テテユスが手をかざすと異空間から豪華なテーブル（クロス付き）と椅子、ヒビの入った急須と湯飲みが現れた

「・・・どうやったんだ?・・・ドラ○もんのポケット?」

『休みすぎて力が溢れすぎてるというかなんというか。いろいろと不安定みたい』

「確かに……。この部屋にこんな豪華なのは似合わないだろ」

部屋や寮の雰囲気を考えるなら、ちゃぶ台とヒビの入った急須と湯飲みくらいが妥当だろう。

だが、テテユスが出したのはちゃぶ台ではなく、豪華なテーブルと、それとセットとなった椅子

「……。なんで急須と湯飲みはボロいんだ？あとこれどこから持ってきた？」

『湯飲みは知らないけど椅子とかは私の所有物だよ？チヨイと転移させただけ』

「これテテユスの物なの！？豪華すぎないか！？」

『失礼ね〜！それでも上級天使、女神様なのよ！ティタン神族を舐めないで頂戴』

「お〜い、元ネタ出てるぞ〜。お前は光の女神だ。水の神じゃないぞ〜」

話をしていると、ドアをトントン、とノックする音が聞こえた

「恭兄、来たよー！」

「ゆっくりと歩くのも悪くはないわね」

さっきまでイライラしていたが、歩いていたら気分が落ち着いた

「よしっ！とうちゃくっく」

部屋の前に着くと声が聞こえてきた

「……話声？電話かしら……」

まあいいが、とりあえず入れてもらおう。銀髪少女はドアをノックする

「恭兄、来たよー」

「おう。今準備終わった。入っていいぞ」

「ういゝつす。入るよお」

「・・・今回は無断で侵入しないのな」

「たまには虚を突かず正攻法でいこうかと」

「不法侵入が虚でなくなってきた現実のせいで玄関をノックして入って来るといふ当たり前の行為に違和感がある」

「押してダメなら引いてみる、異常な行為も慣れれば普通、普段と違う一面を見せることで相手の意識を変えさせる作戦よ」

「・・・要は普通に入りたい気分だったってことだろ？」

「さすが恭兄、わかってるじゃん」

「この調子でいくとそのうち普通にレッド寮の食堂に混じってそうだな」

「私なら普通に入れるけど周りが黙っちゃいないと思っけど?」

「そうだろうな……。興奮しての意味でだが」

「いつかの夜に恭兄と一緒に布団で寝てる時があるかもよ?」

「その点は心配いらぬ。その時はセキュリティが作動する仕組みになってるからな」

「セキュリティってまさか……」

「『オートサン』だ。敵の侵入を察知するとオートでその敵を摘み出してトライ百連発の刑に処する仕組みになっている。森の木に縛りつける機能付きだから俺は敵襲の心配なく安心して眠れているよ」

「私の輝かしい計画が……!」

『輝かしいって単なる夜這いじゃないの』

「そんなのじゃない!……夜、目を開けるとそこには可愛い妹の寝顔。びっくりして飛び起きるも妹は起きない。その姿をよく見て

みるとパジャマのボタンが外れていて、そこに映るは思わず揉みたくなる美乳！・・・コイツ、誘ってやがる！抑えきれない衝動！そして本能のままにルパンダイブひゃっほっい」

うつとりしながら語る銀髪少女。相変わらず素晴らしい妄想である

『・・・あなた達はそんなにルパンダイブが好きなの？』

別にそんなわけじゃないが

「・・・やつ、だ、ダメよ！お兄ちゃん・・・あつ！そ、そんなに・・・あああつ！はあ、はあ・・・。もっと・・・もっと！私・・・お兄ちゃんがほし」コラアアアア！」・・・チツ！」

いい加減止めないとヤバイ展開だったので制止

「この後は当然ニヤンニヤン」黙れえ！」ぶへっ！」

『妄想でよくここまでスラスラと言えるわね・・・』

「これは一昨日の夜ベットに入ってから実際にして「死ねえ！」ぐええっ！」

『マスターも大変ね・・・』

「まだ全部言っていないのに・・・」

全部なんて言わせない。その時は実力行使でぶつとばす

「私が反撃できないのをいいことに・・・！って、テテユス！体調は！？もう大丈夫なの？」

・・・今更心配ですか？

『あなたにも、マスターにも気を遣わせちゃったみたいだけど、そのおかげでもう大丈夫よ』

「今度こそもう大丈夫だぞ。主人の俺が言っただから間違いない」

「ホント！？ホントに！？嘘じゃないのよね！？」

『こんな嘘ついて困らせるほど私は性悪じゃないわよ』

「よかった・・・!ごめんなさい・・・」

『謝らないで頂戴。私がつと強ければ倒れることもなかった。それだけよ』

「でも・・・でも・・・!」

『いいのよ。あなたは私を畏にかけたけど、私はあなたという人間を疑っていた。それも看病している間、ずっと・・・おあいこよだから、この話はおしまい!いつまでも引つ張ってもいいことないしね。・・・お茶にしましょう。いいお菓子あるんでしょ?』

「あ・・・。うん」

「ほら、いつまでもしよんぼりしてない!」

「本当に・・・いいの?」

「アイツが言うのならこの件は終わりだ。いつまでも引つ張ってる
と本当にいいことないぞ?・・・きつとアイツは怒らせると怖い
タイプだからな」

「うん・・・そうだね。ありがとう」

「・・・で？なにこのアンバランスな組み合わせは？」

「・・・俺に聞かないでくれ」

部屋に入って驚いた。明らかにこの空間には似合わないテーブルと椅子があると思ったら、上に乗っているのはボロい急須と湯飲みなのである

「確かにお茶の用意とは言ったけどさ・・・。てかこれ誰のよ？」

『はいはい！私のでっす！急須と湯飲みは知らないけど』

「これテュスの物なの！？豪華すぎでしょ！？」

『私はこれでも上級天使の女神様なのよ！？さっきからあんたら人のこと馬鹿にしてない！？』

この兄妹は人のことをなんだと思っているのか・・・

「あんたらって・・・まさか恭兄も同じ反応だったの？」

「全く同じ反応だった。俺もびっくりしている」

「でもさ・・・。最近女神とか、上級天使とかってこと忘れそうになるんだよねえ」

『あうっ！』

「ゲームの廃人さんとかって言ってたし・・・。ぶっちゃけるとただの居候レベルに堕ちてるって言うか・・・」

『はづうー！』

「痛いことを言ってやるなよ・・・。本人だって気にしてるんだし。ホラ傷付いてるだろ・・・」

『私ってば可哀想な女神になってるの！？ああ・・・冷たい視線が送られてるうううー！』

「でも背中 of 辺りとかゾクゾクしない？ああ・・・快感！みたいな」

『私にそんな趣味ないわよお！変なキャラを付けようとししないでえ！』

「実は恭兄はソツチの方だったり・・・」

『あつ・・・！だんだん気分が良くなってきたわぁ・・・！』

「ぶるああああ！勝手に俺達に変なキャラ付けしてんじゃねえええええ！」

「たった今青い若本が重なって見えた」

「俺の本能が叫ぶのさ・・・！貴様を殺せとお・・・！」

「私だけ！？何で対象が私一人だけになってるの！？」

「これ以上変なキャラを加えられるなら今のうちに息の根を止めておこうかと」

「抵抗できないのをいいことに私のカラダを好き放題ってわけね．．
いいわ！どうせ死ぬならお兄ちゃんが好きにやらせてあげる！」

「残念ながら一気に殺る気なんだ．．．今日の俺は紳士的だ．．
。運が良かったな」

「嫌よお！満足させてから逝かせて！鬼畜う！全然紳士なんかじゃ
ないわ！」

「満足させてくれよ．．．！」

「私は全然満足できない！」

「満足デツキなんてそんなもんさ。愛も満足も一方通行」

「きりゆうーさんのばかああああ！」

「チームサテイクアクション！」

『．．．お茶にしましょっ？』

「はい」

「・・・それで本題だけど・・・まずは恭兄に渡したいものが」

「ん、俺に？・・・カードはもう受け取ったはずだが」

「実はこれが大本命。サプライズカードなのです」

「サプライズって何だ？」

「・・・恭兄が好きな種族は？」

「・・・当然天使だが？」

「特にその中では？」

「・・・テテユスだろ？」

「そう。恭兄が好きなのは《光神テテュス》のカード。だけどこれは……?」

「……まさか!」

「そう。これはテテュスはテテュスでも……」

リンはその手に持つカードを見せる。それは通常のウルトラレアとは違う輝きのカード

「《TETHYS / GODDESS OF LIGHT》英語版《
光神テテュス》のシークレットレアよ」

「これが……!」

『あららら。こんなのあったのね』

「恭兄ってこれ前から欲しがってたよね」

「欲しかった。すごく欲しかったです」

「海外のシークレットってホイルがナナメだから綺麗だよね」

「俺はシクレアは外国版が好きだ」

「私も。このテテユスなんて背景の青が綺麗でもう海にしか見えない」

「服の装飾まで輝いている・・・！眩しい・・・眩しすぎるぞ！」

「はい、というわけであげるね！」

「・・・美しすぎる！テテユス、結婚してくれ！」

「私じゃないのお！？」

『さすが私。レアリティと同時に美しさも上がってる。・・・光の女神辞めちゃおうかなあ。普通に水の女神でいいような気がする』

「それは駄目だが・・・結婚してくれえ！」

「興奮するなあ〜！くっ……！私がツッコミに回る時が来ようとは……！テテユス……おそろしい子！」

『全然突っ込んでないじゃないの』

「テテユス……いや、ババア！結婚して　　ぐああ！」

『いくらネタでも善悪があるのよ？』

「ぐ……すいませんでした」

「強引だけど收拾ついてよかったわ」

『マスターが暴走するなんて珍しいわね』

「それほど嬉しかったんでしょ？」

「そうです。これは一日中眺めてても飽きない自信がある」

『本物がここにいるの？』

「本物とは違った良さがこれにはある。主に輝きとか、輝きとか、輝きとか！眩しいです！」

『ふうん。確かに背景の輝きなんて無理よね』

「そーゆことね！さ、お土産のお菓子よ！甘いものでも食べましょー！」

「お、これは・・・随分と懐かしいものを」

『たい焼き・・・？変わった色ね』

「食べたことないの？確かにこっちの世界にはなかったから買ってきたんだけど、ハマればけっこう美味しいのよ？」

『たい焼きくらいはあるけど・・・。珍しい色だな〜って』

「珍しいか？まあ味は悪くはないぞ？さっそくーっ貰っぞ」

「私も〜。一応言うけど腐ってたりしないから安心しなよ」

『それじゃあ私も。いただきま〜す』

全員がたい焼きを一口食べるがどの部分から食べるかは人それぞれ。何故そこから食べるのかを真面目に言い争うと終わることのない討論になることすらある・・・かもしれない

「・・・うん。変わらない味だ」

「久しぶりに食べるとなかなか美味しいわね」

普通に食べる二人。だが・・・

『・・・うえええ〜。なによこれ〜。不味いじゃな〜い』

「どうした・・・って！ちよっ、おまつ！戻すな、こらあ！」

『だってえ〜。変な食感で美味しくな・・・ってうぷっ！』

「ちよっとお！本当に戻そうと・・・って！わあああ！」

急いで天使をトイレへと連れて行った

「ふう〜。一時はどうなるかと・・・」

『こんなやつだって最初から言っておめ〜』

「普通気付くでしょ・・・って、アラララ？」

「ん？・・・もしかしてお前もか？」

「うふふ・・・私なんか面白いこと思いついたんだけど・・・」

「俺もだ。・・・これを試さずにはいられまい！・・・ちなみに全部でどれくらいある？」

「・・・物質変換は保存が効くからかなりたくさん。お互い考えることは一緒ってことね・・・」

「ちょっと出てくるから留守番よろしくな」

『え？・・・いったいどこへ？』

「ん〜、ちょっとだけ幸せのお裾分けつてとこかな〜？じゃあね」

そのまま二人は嫌な笑みを浮かべて出て行った

現在はちょうどお昼の時間だ。そして人の集まる場所と言えば・・・

「皆さ〜ん！ちょっと聞いてくださ〜い！」

リンが天使の微笑みを浮かべて（野郎視点）レッド寮の食堂にいる男子に呼びかける

「実は今日、私達を可愛がってくれてるおばさんから、お菓子が届いたんですけど、おばさん張り切っちゃったのかな・・・。二人じゃとても食べきれそうにない量なの・・・」

もちろんそんなの大嘘である。だが、小動物系の女の子が必死に話

す姿を見てみんな真剣に聞いている。

そして、次に言われるであろう言葉をまだか、まだかと待っている
残念なのがそれは銀髪少女の演技というところか

「だから・・・おばさんには少し申し訳ないけれど、みんなにも食べてもらおうかなって思ったの。悪くなっちゃうよりは、みんなに・・・お友達に食べてもらうの。その方が喜んでくれるかなって・・・ねえ、食べてくれる?」

おおおおお!と謎の歓声上がる。その歓声は建物すら揺らした

「・・・少し静まってくれ。今からリンに配ってもらおうから」

恭介の言葉にも素直に従う連中。リンがいるからなのか、すぐにでも欲しいからなのか・・・。

・・・うん。これなら俺でも駒を作れそうだな。

リンが質を求めるなら俺は量を求めよう。人海戦術、物量作戦だ

「今から配るから並んでくれる?・・・あ、あと全員に配るまで食べちゃダメよお?」

本当に素直に従う奴らだ。彼らにとって唯一の救いはリンは質を求

めていることか・・・

「私達は美味しいと思ったんだけど、もし口に合わなかったらごめんなさいね。でも、その時はおばさんを悪く思わないでほしいの・・・。その時は、私が精一杯、謝りますから・・・。」

連中全員がそんなことを思わないと言うように首を振っている。

本当に面白い光景である

「みんな受け取ったね？それじゃ、いただきます!」

『いただきます!』

一斉にかぶりつくレッド男子

.....。

『おええええええ!』

そして・・・一斉に、一人残らず倒れてしまった。全員が泡を吹いている・・・

「・・・こんなに美味しいのに・・・。失礼しちゃうわ!」

「・・・別に俺達がゲテモノ好きってわけじゃないよな?」

「げっ・・・なんだこの状況は!?!」

聞き覚えのある声が聞こえた。そちらを見るとよく知る二人がいた

「おっす、十代、翔!・・・これを食べてみてくれ」

「なんだそれ?たい焼きか?どれどれ・・・ってマズッ!?!なんだこの食感!?!」

「そのたい焼きが元凶だ。・・・俺達は普通に美味しいと思うんだがな・・・」

「ゲテモノ好きなだけじゃないツスか?」

「失礼ね！私達はこれでも普通で、これはそういうお菓子なのよ！」

「一応聞くが、それってどんなやつなんだ？」

「『白いたいやき』だ。モチモチした食感がクセになる」

「次は普通のたい焼きじゃなくて、そういうお菓子だと思って食べてみなさい。味が変わるから」

「それじゃ、騙されたと思って……。おっ、意外とイケるか……？」

「だろ？本当は美味しいんだよ、それは」

「この倒れてる人達は……？」

「最初のお前達のように、普通のたい焼きだと思って食った者の末路だ」

「元々脳がイメージしていた物と違う味と食感だったから不味く感じたのよ」

「肉だと思って食べたなら野菜だった、みたいな・・・いわゆる騙し料理ってとこかな？・・・まあ当然そんな意図でこのたい焼きを作ったわけじゃないんだろが・・・」

「普通のたい焼きのふんわりとした食感と、中に詰まったあんをイメージして食べてみたら、もちもちとした変な食感だった・・・。知らずに食べた側からするとゴムを食べたような感じがしたとか・・・」

「そう、まさしくその通りだった」

「私達は最初からこんな味だと思って食べたから普通にイケたんだけど・・・」

「ただ今回は、身近にとある犠牲者が出たもんだからどうかなくってイタズラ心が・・・な。倒れてる奴らは文句は言わない、口に合わなくても恨まないと合意して食べたんだから問題ない」

「・・・でも私、ちゃんと謝るわ・・・」

「お前の考えてることはわかる」

真剣に謝るフリをしてポイント稼ぎをするつもりであるう

「……あっ！これ食べて欲しい人がいた！ちょっとあげてくるわ
！」

「……今度は誰がターゲットだ？」

「ペペロンチーノ。今回迷惑かけたからお詫びに……」

「……恨まれないようにしろよな」

「ちょっと急ぎで行ってくるから！……部屋に戻ってていいよ。
じゃっ！」

「……消えた？」

銀髪少女は高速移動でクロノスの元へ行った。……よほど結果
が楽しみなのであろう

「よし、俺は部屋に戻るか。またな！」

「せめてこの人達をどうにかしてくれッス〜！」

「あ〜楽しかった。ただいま〜」

俺が部屋に戻ってから十分ほどで銀髪少女が帰ってきた

「早いな・・・どうだった？」

「『ペペロンチ〜ノ！』とか言ってひっくり返って泡吹いた。一応心配したけど他に食べて平気だった先生がかばってくれたのと鮎川先生が面倒見るからって帰してくれた」

「他の先生がかばってくれたのが救いだっただな・・・」

「クロノス以外の全員にはきちんと説明して食べてもらったの。先生達は美味しいって普通に喜んでたし。だからクロノスが何で倒れたのかはわからないって感じだったわ」

「・・・他を味方につけてから狙ったわけか・・・」

「うん。校長センセにもあげたら最初は断われたけど食べてもらえたわ。生徒から貰うのは抵抗があるとか、いろいろ言ってたけど」

「先生側は特定の生徒を変に意識しちゃいけないしな。そのせいだろ。例外はあるが・・・」

「そつえば帰りにサンダーに会ったわ」

「サンダー？・・・ああ、万丈目か」

「変にかしこまってたから一発くれてやったの」

「・・・容易に想像できるのは何故だろう」

「そしたら倒れかけたけど、なんと完食したのよ！？・・・取り巻きは逝ったけど、アイツはなかなか見込みがあるわね」

「意地だろうな・・・。女子の前でどーのこーのと」

「思わずビクリしちゃったから一瞬怪しまれたけど、笑顔で食べ

てくれてありがとっつて言ったらそんな様子も吹っ飛んでたわ」

「……馬鹿だな」

『……あなたは何食べ物で遊んでるのよ……』

「遊んでないもん！食べさせてあげてるだけだもん！」

「テテユスも改めて一つどうだ？」

『……ゴメンなさい。遠慮しとくわ……。今はたい焼きが怖い
の……』

「ふむ。なるほど……たい焼き恐怖症か……」

「学園中に配ろうかな。男子限定で」

「やめてやれ。学園中がたい焼きにうなされるぞ……」

「なら行ってくる。ブルー、イエローの順で」

「……ところで今日のラッキーカラーは？」

「当然白よ！」

「なるほど……下着も白か……」

「えっ！？ちょっと、なんでわかったの!？」

「うん、実は嘘。なるほど……今日の下着は白……」

「ハメラれた!？そしてメモするなああ！」

「ホレ、行くんじゃないのか？」

「くっ……！見てなさいよ!……死体の山を築いてやるんだから！それもこれもアンタのせいなんだからね！命令されたって言いふらしてやるから！」

「俺の命令って言ったら誰も食わなくなるぞ？そして明らかに悪意のある言葉だな」

「黙りなさい！うう〜っ！行ってくる！」

言い残すと消えて行った

「・・・どうだった？」

『バツチリ録音完了。あなたのたい焼き恐怖症の後、あの子の学園中に配る発言から』

「馬鹿なやつだ・・・。同じ手に引つかかるとは」

俺が部屋に戻ったあと、テテユスと話をしておいた。『どうせアイツやらかすから責任転嫁されないように録音しよ〜ぜ〜』という具合だ

「馬鹿な考えを起こさないといいな・・・。」

「ふふふ・・・同じ手には引つかからないわよ・・・！」

あの時・・・好きにして発言すら録っていたほどだ。
恐らく、今回も会話を録音されると考えるのが普通・・・！

「残念だけど下着もラッキーカラーも白じゃないんだな」

唐突に話題を切り替えてきたので明らかに怪しいと思った。

本当のラッキーカラーは黄色で、下着の色は・・・言わないわよ！

「そしてターゲットはただ一人・・・三沢大地！」

ふふふ・・・待ってなさい。私の手で裁いてあげるわ！

「・・・とか考えてるんじゃないか？」

『なんていう化かし合い・・・！こんなことを日常で繰り広げてる
とは・・・！』

「普段はこんなことしてないぞ。・・・だが俺はアイツの遙か先だ
」

すかさず携帯を取り出しメールを作成する

『今からリンがお菓子のお裾分けに行く。モチモチとした、たい焼きの形をしたお菓子だ。美味しさは俺が保証しよう。・・・リンはサプライズということで行ったらしいが知らせておく。この前のことはチャラにしてやるから、アイツが来た時は驚いてくれ。ただし、このことを本人に言ったら消しておいた記憶を戻す。三沢博士、ヨロシクな!』

「・・・三沢には恩を売っておく必要がある」

携帯の画面を見る・・・送信完了

「リン・・・残念だったな」

「・・・ああ。美味しかった。・・・わざわざ分けてくれてありがとう」

「ええっ!?あれえ!?!?・・・ウソオ!?!?」

第十四話「白い…」(後書き)

以上、白い悪魔の話でした。

ちなみにレッド寮の死体はスタッフが安全に処理しました

なお、実際に存在するものとは関係ありませんし、私はたい焼きに何の恨みもありませんので…。

それでは。

第十五話「人格」(前書き)

時間がかかってしまいましたけど十五話です。

デュエル成分多め。同じく説明も多いです。

それではどうぞ。

第十五話「人格」

「シニョールリンの相手はシニョール恭介ナノーネ！」

「んげっ！」

「うふふっ。授業で当たるなんてね。・・・運命かしら？」

「そんな運命じゃない・・・。絶対仕組まれた」

「たい焼きの件で？・・・そんなまさか。私はレプティレスを使っ
てあげるわ」

「これまた厄介なデッキを・・・。まあ負ける気はないがな。この
前のリベンジといくか」

「なんだかんだで私このデッキかなり好きなのよ。鉄壁の守り・・・
見せてあげるわ」

「……ところでシンクロはどうする？」

「……いい加減授業で使わないってのも疲れちゃったからいいかな。恭兄は？」

「使いたい説明が面倒でな……。あともうデュエルくらいはのびのびとやろうかと……」

「……私も記憶消すの面倒でさ……。この際だから全員に知らせておくわ」

「全員って……？」

「アカデミア中に。恭兄は筆記は駄目だけどデュエルは強くて、私達二人はシンクロ使いたってことをね。この際だから試験の記憶を戻すってのもいいかも」

「できるんだったら全員が既に知っているってことで頼む」

「それくらいはできるけど……本当にいいのね？」

「筆記はともかく……デュエルはいずれわかることさ。その時言

「うよりは……ってな。よろしく頼む」

「……わかったわ」

リンが何事かを呟き、指を鳴らすと激しい耳鳴りがした。……これらは？

「……今耳鳴りが酷いと思うけどそれで完了よ。これで好き放題やり放題ってこと」

「なるほど……。耳鳴りも治まったし、始めるか……」

「デュエル!!」

「今回は俺が先攻だ。ドロー！モンスターをセット、カードを二枚伏せ終了！」

「私のターン。手札から《終焉のカウントダウン》を発動！」

リン

LP2000

「うわっ・・・ヤバイな・・・」

「このデッキと相性いいのよ。守りは堅いから・・・。モンスターをセット。カードを三枚伏せて終了、残り19ターンよ」

確かに和睦や戦闘破壊されないナージャなどで地盤を固められたらひとたまりもない。早急になんとかしなければ・・・！

「ドロー。今回は俺からだ！《大嵐》を発動する！」

「くふふっ！チェーンで《スターライト・ロード》を発動。大嵐の効果が無効にするわ」

げっ！・・・あれは複数破壊を無効にするカード・・・

「さらに効果でエクストラデッキから《スターダスト・ドラゴン》を特殊召喚。・・・恭介、あなた焦りすぎよ」

「まさかそのデッキに入ってるとは思わなかったからなあ・・・」

「こんなデツキだからこそあるんでしょ？」

「正直に言つと・・・この世界じゃ誰も持ってないからすっかり忘れてた」

「私も忘れそうになるわ。・・・平和よね」

「ああ・・・そうだな。・・・再開だ。《キラートマト》を反転、《夜薔薇の騎士》を召喚。効果で《フェニキシアン・シード》を特殊召喚。シード効果で手札から《フェニキシアン・クラスター・アマリス》を特殊召喚し、トマトと夜薔薇でシンクロする。《ブラックローズ・ドラゴン》をシンクロ召喚。ブラックローズの効果で墓地の《キラートマト》を除外し、リンの裏側守備表示を表側攻撃表示に変えて攻撃を0にする」

「流れるような作業・・・とても素晴らしいわ。でもね・・・《スノーマンイーター》効果、黒薔薇を破壊するわ」

「・・・全体破壊効果でも除外効果でも結局破壊されるのか・・・。とりあえずチーンして《火霊術 - 「紅」》で黒薔薇を射出してみるのが・・・もちろん防ぐよな？」

「えっ！？わわっ！きゃあああ！？」

リン

L P O

「おいおい……こんなあっさりと……」

「そんな都合良く『レインボー・ライフ』があるわけじゃないの〜！」

都合良くあるのがこの世界なわけだが……

「ちなみに伏せは？」

「『次元幽閉』と『和睦の使者』だけど……まさか紅がくるなんてえ〜！」

「う〜ん……ドンマイ。そんな時もあるぞ」

和睦と雪だるまはともかく、星屑と幽閉は厳しい。
バーンで焼いてなかったら俺の方が危なかったろう。

俺の残りの伏せは《因果切断》だった。

・・・今考えてみると星屑を除外してから夜薔薇効果を使わずに黒薔薇で破壊、効果チエーンで紅とか・・・まあ結果勝ったんだし終わったものは仕方ない

「私のターン！ドローは・・・ほらあゝ《レインボー・ライフ》だったあゝ。遅いのよゝ！」

「・・・本当に残念だったな」

おかしいというか一つ違和感が・・・

「今回は髪留め外さないのな」

「授業だもの。当たり前じゃない」

確かに雰囲気的に本気じゃなかった。
どちらかと言えばギャグの雰囲気だな。

うゝん・・・テテユスと話してみるか

「今回は負けたけど、次はこうはいかないわよ！くそ〜！」

銀髪少女はぶつぶつ言いながら歩いて行った

「……というわけだったんだが……」

『ふうん。いつも戦ってた時と雰囲気が違ってたのね』

「ああ。デュエルの時に性格が変わると思ったんだが……」

『それだけじゃないわね。引きもイマイチだった……。』『ガチ』
の彼女だったら簡単に防げていたでしょうね』

「そつだろつな。正直俺もアイツのことを把握しきれていないんだが……。テテユスはわかるか？普段から分析してるんだろ？」

『まあ一応……。今回は『朝霧リンの人格報告回』ってわけね……』

「つまり解説回ってわけか？・・・いったい誰がこんなこと考えるんだか」

『いいじゃない。・・・私ができる範囲だけだね。・・・え〜っと。普段の彼女はキミのことを呼ぶ時は主に『恭兄』、たまに『恭介』と呼ぶ。ギャグの時の人格も主にこれね。次は・・・どう言おうかな。『裏の人格』とでも言おうかしら。普段とは違った強気な発言が目立つわね。キミのことは『恭介』と呼び捨て、周りは『アンタ』とか呼ぶ・・・のかな？悪巧みするときとかね。よく謎の黒いオーラを纏っているけど・・・それは私でもよくわからないわ』

「補足するとアイツがデュエルをする時は恐らくその裏人格だ。・・・まあ何故か今日は普段通りだったかな」

『後は・・・素の状態は言わなくてもいいわね。一番謎なのがガチとか言ってる時なんだけど・・・』

「それは俺でもわからない。俺は裏の人格がしてる演技だと思っているが・・・」

『でもその時は異常なほど引きが強い。もちろん普段も引きは良いけど、それよりもずっと・・・』

「それが謎だな……。それ以前に、そもそも裏自体がこの世界に来てから現れたみたいなんだ」

『そうなの？』

「ああ。前までは今で言う裏の状態になる時はあっても、それは怒った時とか、限定的なものでしかなかった。デュエル中も普通の状態だったしな」

『この世界の何かに干渉されてるってことかしら……。』

「その線かもな……。現実世界の時は魔術の類は知らなかった。当然ながらそれは一般人の俺もそうだし、お互いあり得ないとすら思ってたしな」

『キミの記憶消去は私の力を借りないと無理なのに、あの子は自然と使ってた……。』

「何故だろうな？なんでそんなことが……」

『……。それも含めて今度とも見ていく必要があるかもね』

「ああ、よろしく頼む。・・・そういえばお前はアイツをどう思ってる？」

「あの子のこと？」

「好きとか嫌いとかじゃなくて・・・最近のアイツの行動だよ。たい焼き事件とか・・・まあたい焼きは俺も加担してたがな」

『・・・正直に言うと、やり過ぎだなって。イタズラにしても若いとか、元気とかで笑って許されることじゃないと思うの。みんな迷惑してるだろうし・・・笑ってくれてるのも本人の前だからかな』

「・・・迷惑、か・・・だよな」

『あと他には』

「おっす。今帰ったぞ」

『・・・えっ』

「おかえり〜。先に入ってるけどね・・・」

「リン・・・やっぱりいたのか・・・」

「えへへへ〜」

ふとテテユスを見ると信じられないものを見るといふ顔をしてこちらを見ている

「・・・ん？どうした？俺の顔に何か付いてるか？」

『なんで・・・キミが・・・外から？ずっと一緒に話をしてたはずじゃ・・・』

「さっき？一緒に？何のことだ？」

『あなたとずっとここで話してたじゃない・・・。しかも目の前で正面から・・・。なのに、なんで外から・・・』

「テテユス、ちょっと大丈夫？ずっと私とたい焼きをどこから食べ

るかについて語り合ってたじゃない」

『ずっとあなたと・・・？たい焼きについて・・・？』

「お、おい。大丈夫か？ひよっとしてまた疲れてるんじゃない？」

『いいえ！・・・大丈夫よ。心配しないで・・・！』

「ところで・・・私がここにいる理由、わかるよね？」

「・・・わかりたくないが、昼間のリベンジだろ？」

「わかってるなら話が早いわ。外の森で先に行って待ってるから。
・・・テテユス、行きましょ？」

『え、ええ・・・』

「・・・驚いた？」

『な、何のこと?』

「話相手よ。ずっと恭介だと思ってたでしょ?・・・実は私だったの」

『やっぱり・・・!でも・・・どうやって?』

「ちょっとした魔術よ。本人に会うか時間が経つかで解けるけど」

『・・・いつたい何が狙いで?』

「別に・・・今回はただの試運転よ。あなたを騙せれば他も騙せるでしょ?恭介以外にはなれないようになってるから大丈夫よ」

『あなたと会話してた時は違和感すら感じなかった。・・・もしかして性格・・・記憶までコピーできるの?』

「あなたバカ?そんな魔術あるわけないでしょ?これは本物以外に見せる幻覚よ。・・・それに私と恭介が何年一緒にいたと思ってるの?口調や思考くらいなんとかなるわよ」

『それはそうかもしれない。だけど・・・何が目的でこんな幻覚を？意味も無くこんなことするわけないでしょう・・・？』

「変えだ・・・いえ、なんでもないわ。強いて言うならあなたが私のことをどこまで分析してるか知りたかったのよ。悪用なんてしないから安心しなさい」

このリンは・・・裏の状態か・・・

「それでさっきの話・・・あなたが言った人格云々だけど、私が言ったことは真実よ。魔術なんて知らなかったし、今の・・・裏の人格もね。でも、私は・・・私だから」

『怖く・・・ないの？知らない自分が急に現れるというか・・・』

「・・・急に、というわけではないのかもしれない。自分の暗い感情、または奥底へと沈められた黒い何か・・・それが表側に出ただけなのかもね。・・・この話は終了よ。ジャッジよろしくね」

「・・・遅くなったな」

「問題ないわ。始めるわよ」

「・・・今回は野試合だぞ？ガチじゃないのか？」

「・・・自分でも確かめたいことがあるのよ」

「・・・そうか。いくぞ！」

「デュエル！！」

「今回は私からよ。ドロ！。手札から《トライデント・ウォリアー》を召喚。召喚時の効果で《魔轟神クシャノ》を特殊召喚。手札の《魔轟神グリムロ》の効果で《魔轟神クルス》をサーチ。そしてクシャノとトライデントで《ライトニング・ウォリアー》をシンクロ召喚。カードを一枚伏せて終了よ」

「魔轟神かよ・・・レプティレスだとばかり」

「何回も同じデッキを使うわけじゃないじゃない。ガチではないけど手は抜かないわよ？」

「そうだよなあー。俺のターン。モンスターをセット、カードを二

枚伏せて終了だ」

「私のターン。墓地のクシヤノ効果。《魔轟神ルリー》を捨てて回収、ルリーを攻撃表示で特殊召喚。そしてクシヤノを召喚する。そして――」

「ストップだ。召喚成功時《激流葬》で全て破壊する。ユニコールは作らせない」

「……了承よ。全て破壊ね。一枚伏せてターンエンドよ」

「俺のターン。手札から《ジャスター・コンフィ》を特殊召喚、そしてリリース。……この前のお返しだ。《ブリザード・プリンセス》をアドバンス召喚！」

「へえ……」

「バトルフェイズ！プリンセスで攻撃だ！」

「私は手札から誘発効果……」

「待て。ターンプレイヤーの優先権は放棄していない。《マジシヤ

ンズ・サークル』を発動させてもらっ

「なっ……!?!」

「デッキからお互い魔法使いを特殊召喚する。俺は《ナイトエンド・ソーサラー》を特殊召喚だ」

「ナイトエンドですって!?!……私のデッキには魔法使いはいない……!」

「ならばナイトエンドの効果。墓地のクシャノとグリム口を除外する」

「くっ……!?!どこまでも……!」

「バトル続行だ。プリンセスで攻撃する」

「ちいっ!」

リン

LP1200

「そしてナイトエンドで追撃だ！」

「今度こそ……！《バトルフェーダー》を守備で特殊召喚してバトルフェイズ終了よ！」

「……なるほど。サークルを発動されたから無理だったのか」

スペルスピードの関係で罫カードのサークルにスペルスピード1のフェーダーはチェーンが組めずにそのまま大打撃を受けたのだ

「さっきから余計なことばかり……！」

「妨害しないとやられるからな。メインフェイズ2で《大嵐》発動。安全に破壊させてもらう」

「しまった……！チェーンできない……！」

「スタロがあつたのか……。これからは注意しよう。カードを一枚伏せて終了だ。さて……お前の残りの手札はクルスだったな」

「まだ……終わってなんかいないわ！私のターン！」

・・・そうは言うが、伏せは消されて墓地の魔轟神はクシャノとグリムロが除外されてルリーのみ。
対して俺の場にはモンスターが二体と一枚のリバースカード・・・
絶望的だろう

「・・・きた！手札のクルスをコストに《ライトニング・ボルテックス》を発動よ！消えて無くなるというわ！」

「リン・・・いい引きだったな」

この状況で全体除去カードを引くとは・・・

「ふふ・・・どうしたの？私のライフは少ないけど、お互いの手札はゼロ。だけど場にモンスターが残ってる私はチューナーを引ければ・・・」

・・・だがな、リン

「・・・チェーンだ」

「え・・・？」

全体除去に希望を見出ししていたリンが俺のリバースカードを見て固まる

「《スターライト・ロード》」

「ま、まさか……。うそ……。でしょ？」

俺のモンスターに襲いかかろうとしていた雷撃がかき消された。

正直この状況では《我が身を盾に》や《魔宮の賄賂》などよりもタチが悪いだろう

「一人で盛り上がつてるところを悪いが……。効果で《スターダスト・ドラゴン》を特殊召喚する」

「そんな……！」

「お前の引きよりも俺の引きの方が良かっただけさ。さて……。どうする？」

このまま続行か、それとも

「私は・・・サレンダーなんてしない！クルスの効果でルリーを準備で特殊召喚してターンエンドよ！」

「・・・そう、それでいい。俺のターン。プリンセスでルリーを、スターダストでフェーダーに攻撃する」

ルリーが氷塊に潰され、フェーダーは自身の効果で異次元へと消えていく

「・・・ナイトエンドでダイレクトアタック」

漆黒の鎌が銀の少女の胸へと振り降ろされた

「あぐめっ」

リン

L P O

『・・・勝負ありね』

「全く・・・歯がたたなかった・・・。やる事全てが裏目に出てた・・・」

「2ターン目はそのまま攻撃すればよかったのにな。・・・激流葬の時、スタロは？」

「・・・あのターンに引いた。残りの伏せの《サンダー・ブレイク》はチューナーか上級が来たら使おうと思ってた」

「だがその上級はプリンセスで、大嵐にスタロを撃てなかったと」

「引きのせいにしたくはないけど・・・魔轟神で負けるとは思ってたわ」

『やっぱり・・・引きは悪くはないけど、あの時の方がずっと・・・』

「何のことだ？」

『いいえ、気にしないで』

「・・・私なんかよりも恭兄の方が引きもデツキ構築も上手かった。それだけよ」

「・・・そうか？でもデツキ構築は関係ない気が・・・」

「ねえ・・・頼みがあるの。聞いてくれない？」

「まあ・・・俺にできることなら」

「・・・魔轟神デツキって恭兄もあつたでしょ？」

「持つてるが・・・俺のやつはかなり趣味入ってるぞ」

『あなたもこの子と同じデツキを・・・？』

「正確に言えば恭兄は魔轟神が出た時からデツキを組んで、私は強化されてから集めて組んだのよ」

「俺は周りがあまり使わないデツキが好きでな・・・天使と共に使っていたよ」

「でも最近じゃほとんど使わなくなったよね。あんなに使ってたのに……」

「……ただ単に使っ気がなくなっただけさ」

「その魔轟神と戦わせてくれない？ 恭兄ってばいろんなカード入れてやってたでしょ？ 私……行き詰まってたから参考にしたいの」

「……俺のは純粹なものではない。それに昔のとは構築を変えてあつて今はオマケ状況だ」

「でも……この世界じゃ同じ魔轟神を使う人なんていないだし……」

「……わかった。ただし……今の構築では戦いたくない。5分くれ。……すぐに組み直す」

『元のデッキの中身なんて覚えてるの？』

「自分なりに考えて作ったデッキなんだ……。完璧ではないにしても、内容の8割は把握してるさ。……それでも充分だろ？」

「うん。・・・それをお願い」

「・・・完了だ」

「コピーするつもりはないけど・・・参考にさせて貰っわ」

「構わない。こんなデッキでも良いと思ったところはお前の力にしてくれ。・・・本日三回目だが・・・」

「」「デューエル!」「」

第十五話「人格」(後書き)

続きは次回へ。

遅すぎたリンの性格(人格)説明でした。

当然これが全てではないのですがね…。

次のデュエルは、魔轟神対決になりますがワンキル合戦になるかもです。

それでは。

第十六話「趣味」(前書き)

気が付いたらもうすぐで前回のあつぷから一週間になりますね。

前回からの続きですが覚えていらっしゃる方はいらっしやるのでしょうか…。

それではどうも。

第十六話「趣味」

ここに来て初めてのミラー戦である

「先攻は不利だが・・・俺が先攻だ。ドロー！」

手札を確認。・・・リンが伏せを除去しなければ・・・

「モンスターをセット、カードを一枚伏せて終了だ。・・・ワンキルできるなら遠慮はするなよ？お前のターンだ」

「私のターン。私は《魔轟神ガルバス》を召喚。《魔轟神グリムロ》の効果。手札から墓地に送って《魔轟神獣チャウ》をサーチ。そしてチャウの効果。手札の《魔轟神獣ケルベラル》を捨ててチャウを特殊召喚。そして捨てられたケルベラルも特殊召喚する」

いきなりぞろぞろと・・・こりゃホントに死ぬかもな

「・・・遠慮はしないよ？ケルベラルとガルバスで《氷結界の龍ブリューナク》をシンクロ召喚。ブリューナクの効果で手札のケル

スを手放してモンスターを戻す！」

「チェーンで《天罰》を発動。クシャノを手放して効果を無効にして破壊する」

久々に見た龍だが、天からの雷で退場してもらう

「くっ……クルスの効果でグリム口を蘇生する。チャワとグリム口で《AOJ》カタストル》をシンク口召喚！」

「あんにやる……よりによってカタストルかよ」

「バトルフェイズ。カタストルで攻撃よ」

「俺のモンスターは《RAI-MEI》だ。効果でクルスをサーチする」

天罰さえなければ……！今の手札ではもう……何も出来ない

「……ターンエンドよ」

正直危なかった。《死者転生》なんか握られてたら終わってたかもな

「俺のターン。手札から《コールド・エンチャンター》を召喚する」

フィールドに蒼い魔法使いの姿をした少女が現れる。効果が使いやすいため、俺のお気に入り一体だ。

しかし・・・種族は水族である。姿は魔法使いなのに水族・・・。魔法使いならサポートも豊富でシंकロ先もテンペスターやアーカナイトが・・・明らかに嫌がらせである。なぜ水族にしたし！

「エンチャンター・・・確か手札を捨てることで・・・って、捨てる!？」

マズイ・・・下手をすれば・・・!

「《死者転生》でクルスを捨ててクルスを回収。効果でクシャノを特殊召喚。手札のグリム口の効果。デッキから《魔轟神獣キャシー》をサーチ。エンチャンターの効果で手札を一枚捨ててアイスカウンターを一つ乗せる。捨てるのはクルス、乗せる対象はエンチャンター自身だ」

少女が杖に魔力を込めると氷の粒が現れた

「捨てられたクルスの効果でグリム口を蘇生。さらにエンチャントの効果でキャシーを捨てる。カウンターを乗せる対象はエンチャントで、キャシーは捨てられた時に表側のカード一枚を破壊する。効果の破壊対象はカタストル」

「・・・私の負けね」

「そしてクシャノとグリム口でシンクロ。お父さん、出番だ！《エンシエント・ホーリー・ワイバーン》をシンクロ召喚！」

『・・・もう勝敗は決しておるか・・・』

「せっかくだからオーバーキルでもしようかと・・・。最後の手札《貪欲な壺》を発動。墓地のモンスターは5枚。よって全て回収し、2枚ドロ」

「・・・まだやるの？」

「自身を対象にエンチャント効果でケルベラルを捨ててカウンターを乗せる。ケルベラルを特殊召喚。さらに手札のグリム口の効果。クルスをサーチして、エンチャントの効果で捨てる。対象は自身、グリム口を蘇生だ」

今回はかなり回ってる。ぶん回している俺でも恐ろしい

「《コールド・エンチャンター》はフィールドのアイスカウンター
の数×300ポイント攻撃力が上がる。今のカウンターは4つ。よ
って攻撃力は2800!」

「自由に手札を捨てられるだけじゃなくて攻撃力も上昇する能力・
・こうして見ると強いなあ。さすがお兄ちゃんのお気に入り。・
・私も使つていい?」

「それは本人の自由だ。・・・バトル。ケルベラルでダイレクトア
タック」

「あつっ!」

リン

LP3000

ケルベラルは飛び跳ねてリンの肩に噛みついたが、ただのソリッド
ビジョンだから実害は無い。

でも・・・今確かにリンの首を狙ってたぞ・・・。しかもかなり危
険な目つきしてたし・・・

「……続けてエンチャントでダイレクトアタック」

「きゃっ!」

リン

LP200

「……今、この蒼い少女は杖でリンを殴ったような気がした。しかも後頭部をモロに……。」

「……うん。魔法使いじゃないもんね!魔法での攻撃じゃないのも変じゃないよね!」

でも……何でこいつらさっきから人間の急所ばかり狙ってるの?

『感覚でわかるんじゃないかしら?……生かしておくべきじゃないって』

「あくなるほど!ってオイ!……お互いのライフの差分は3800。これでホーリエの攻撃力は5900だ!」

「……攻撃力を上げるためにシンクロしなかったんだ……。は

はっ・・・恐いなあ」

「ホーリエ、攻撃だ！」

『・・・潰しても構わんか？』

「リアルにリンを潰すのは勘弁してほしい。人間としてそんな光景見たくない」

『潰すのはナシか・・・ふむ・・・』

「普通にプレスとかで攻撃すればいいだろ？」

『森の木ごとあの娘も消えることになるが・・・それでもか？』

「いや、ナシだ。すまない。勘弁してくれ。」

「えーっと・・・まだ？」

「・・・もうアレでいい。やってくれ」

『・・・承知した』

ガツン！

「きゃんっ！」

リン

L P O

『ねえ・・・こんな決め方あるの？』

「・・・本人も潰されるよりはいいだろう」

例の如く巨大なタライをモロに喰らって銀髪少女は倒れた。
・・・
気絶している

ホーリエはデュエルが終わったらすぐに帰ってしまった

「仕方ない。部屋まで運んでやるか。・・・おっ！珍しいな。今日はピンクかあ」

『気絶してる女の子の下着を見るなんて・・・サイテーよ』

「そんなことないぞ。ほら見る・・・笑顔だろ？」

『気絶してるはずなのに満足そうに笑ってる!?!』

「・・・テテユスが運んでくれないか？」

『え?・・・わかったわ』

気絶してる相手をおぶるのは苦労したが、なんとか背負って歩き始めた。

本音を言うと飛んで行った方が遥かに速いのだが、恭介に合わせて歩くことにする。

・・・自分の肩に彼女の頭があるため、耳元に息がかかって集中できないで困る。

すると・・・

「はむっ」

『ひああああ！？』

いきなり耳を噛まれた。まさか……！

「天使様の耳とっても美味しいです」

『あ、あなた！気絶してたんじゃ……！？』

「あのタライで？馬鹿言わないでよ。そんな鍛え方してないわ」

『で、でも！あの時は気絶してたじゃない！』

「大きさが違うでしょ？あの時はもっと大きかったし、ダメージも蓄積されてたしね。でも流石に一瞬意識が飛んだけど」

「そしてこいつはそれを利用したわけだ」

「そ〜。まさか確認される時に見られるとは思わなかったけどさ〜。……お兄ちゃんも正直だよね」

「俺は拝める時は遠慮なく拝ませてもらうからな。たっぷり拝めてお腹いっぱいです」

『ひょっとして・・・マスターも気絶してないって気付いてたわけ！?』

「うん。だからお前に頼んだ。面白そうだったし」

「黙ってくれたお陰で楽しめそうだわ。もういっちょ」

『やあああん!』

「むふふふ……。振り落とそうとしても無駄よ。がっしり抑えてるからな」

『あっ!ちよっと……。離してよ!』

「部屋に着いたら止めてあげる。でも一人で行っても鍵は無いのよねえ」

「鍵は俺が肌身離さず持ち歩いてるからな。．．．悪いがそのまま耐えてくれないか？」

『ちよつと〜！楽しんでるでしょ〜！』

「そんなまさか．．．。俺は．．．ぷぷっ」

『ほらあ〜吹き出してるじゃないの〜！』

「耳を食われてる光景が何とも言えない．．．！」

「これけっこう美味しいよ？マシユマロみたいで」

『やられてる方は気持ち悪いのよ〜！』

「え？気持ち良いの間違いなんじゃない？ほら」

『いやあ！そんなわけないでしょ〜！』

「．．．まあ、頑張ってくれ」

『ちよつと〜！止めさせてって……！ふあああ！』

「ほら……だんだん悲鳴がいやらしい声に……」

「お前も開発してやるなよ……」

「お断りします。人のこと散々いじくりやがったお返しよ！」

『あ、後で覚えときなさいよ……！ひああん！……だ、ダメえ！』

これお互いがやり返してたらキリがないだろ……

「と〜ちや〜つく！名残惜しいけどね……」

『はあ、はあ……。後で千倍にしてやるから……！』

「……おいおい」

「うん……」

「ん……？どうした？」

「ねえ……やっぱりデッキ見せてくれない？」

「ん〜。もうこの形にはしないから別に構わないが……」

「ホントに!？」

「……別にたいしたデッキじゃないぞ。ぶっちゃけ3分クッキングレベル……」

「そのデッキに完敗した私はいい……」

「今回は久々にぶん回っただけだし。普通ならあれよりも少しゆっくり程度。伏せがあったらあと1ターンは必要だったかな」

「それでも異常なんだけど……」

「気にしたら負けだ。・・・デッキのメモでいいか？」

「それがあるなら是非メモで」

「合計枚数は43枚。モンスターが29枚、魔法、罠が計14枚。枚数順にしてある」

「どれどれ・・・？」

魔轟神クルス×3

魔轟神グリムロ×3

魔轟神クシャノ×2

魔轟神ディアネイラ×1

魔轟神ガルバス×1

魔轟神ミーズトージ×1

魔轟神獣チャワ×1

魔轟神獣ケルベラル×1

魔轟神獣キャシー×1

魔轟神獣ガナシア×1

氷結界の封魔団×3

コールド・エンチャント×2

RAI-MEI×2

オネスト×2

ダークネス・ネオスファイア×2

冥府の使者ゴーズ×1
死霊操りしパペットマスター×1
メタモルポット×1

魔法

死者転生×3
貪欲な壺×2
大嵐×1
ハリケーン×1
洗脳×1
精神操作×1
手札抹殺×1

罨

天罰×2
ミラーフォース×1
激流葬×1

「デッキコンセプトは基本的に封魔団やオネストを壁にしてからポイポイ捨てててどーん！だ。」

「・・・今の説明で大体わかったわ。あとほとんどピン刺しなのね」
「魔轟神はグリム口でサーチできるからな。ぶっちゃけると複数積み以外はそれほど重要じゃない件」

「んじゃ次の封魔団は？」

「太ももだからに決まってるだろう！」

「それだけ!？」

「そんなわけない。2000の壁、星4、魔法使い、プチ寒波、太もも、太もも、太もも。ほらこんなにたくさん」

「それなら偵察者の方が・・・」

「却下だ。そんなつまらんワンキル特化にするわけがないだろう。あと水属性だからグングニールも出せる。ポテンシャル高し！」

「・・・まあいいわ。エンチャンターだけど・・・私はコイツにぶっ殺されたようなもんなのよねえ・・・」

「手札を複数回に渡ってどれだけ捨てられるかで選んだのがこれだ。《スナイプ・ストーカー》は制限だし、破壊できるのは良いが破壊対象がなかったら捨てられないからな」

「攻撃力も上がるもんね。そういえば昔使われてオーバーキルされたような……」

「テテユスの効果で増えた手札の処理に困ったからなー」

「普通処理に困って20枚以上捨てる？おかしいよね？そこかなりおかしいよね？あれ明らかに専用構築だったよねえ？普通に攻撃力8000オーバーしてたし……」

「気のせい……のような……。今度またやるか！」

「やめて！これ以上被害者を増やさないで！」

「やめない。……どうせだから一緒にどうだ？」

「タツグの時に？面白そうね。それで……《RAI-MEI》が何であるの？^{クリッター}普通でしょ……」

「趣味と言ったはずだ！使い捨てアタッカーでサーチ対象は大抵の下級魔轟神。これで充分だろ？あと《禁止令》でのネタ」

「普通《雷鳴》を指定する人はいないでしょ……」

「冗談だ。現在世界ならともかく、この世界じゃなかなか丁度いいだろ？」

「殴り合いの環境で1400のサーチャーか……確かにこれぐらいがいいのかも……で？パペットマスターは？」

「この世界で2000は痛いが墓地のディアネイラとゴーズを出せば圧巻。レヴユアタン等の悪魔のシンクロが墓地にいれば尚良し。あとチューナーが隣にいればすぐにシンクロ素材に。ミーズストージやケルベラルとの組み合わせで上記の二体とダークエンドの恐怖！」

「夢物語というわけでもないのがね……。大抵は墓地にいるものだし、チューナーを蘇生させれば無駄ないし……」

「そういう事だ……。後は補足しなくてもいいだろ？」

「なんで《天罰》なの？《鳳翼の爆風》とかあるのに……」

「さつきやられた通り、優先権行使によるバウンスとかが一番厄介だからな……。伏せを除去されたら終わりだが、チューナーよりもゴーズやオネストを止めた方がいいと思っただけさ」

「確かに滅多に妨害されない効果を無効にされるのは厳しいもんね．．．．これでもいいわ。ありがとう」

「一応メモはやるよ。さて．．．デッキを戻すか」

「ねえ．．．それって私が知らない構築なのよね？．．．どんなものなの？」

「悪いが教えられないし、ここで使う気にもなれない。これは．．．使っちゃいけないやつなんだ」

「．．．どじいじいよっ」

「デッキのパワーがおかしすぎるからだ．．．俺なりの自重ってやつね」

「ふうん．．．私も使わないって決めてるデッキはあるからこれ以上聞かないわ」

「ああ。お互い強力すぎるデッキは封印しよう．．．なんか厨二

臭いな」

「私は別に気にしないわ」

『んじゃ私はノーコメントで』

「冷たい視線が痛い！俺だって恥ずかしいわ！いい言葉がなかったんだから仕方ないだろ！？」

「聞いている身にもなってよね」

『ホントよ。全身鳥肌が・・・』

「そこまで酷いの！？」

「私・・・頭痛くなってきたから帰るわ・・・」

『私も・・・。たまにはゆっくりゲームでもしましょ・・・』

「・・・それってもう暗くなるからだよね？俺の発言が痛かったわけじゃ・・・」

ボタンという玄関のドアが閉まる音が悲しく鳴り響いた

「ちくしょう奴らめ……！」

おのれ……！ テテユスはともかく、リンにはメモまでくれてやったのに……！

「ふう。いい収穫だったわ。さっそくデッキ調整よ！」

ご飯を食べてオフロに入ってパジャマに着替えた後はデッキ調整！

趣味満載とは言ってはいたがどれも実戦レベルのカードが揃っていた

「封魔団は悪くはないんだけど《RAI-MEI》はいらないよねえ……」

正直あそこは《クリッター》であろう。その方がネオスフィアも出

しやすい

「でもエンチャンターとパペットマスターは盲点だったな！。使わせてもらおうと」

本当なら封魔団も悪くはない。グングニールもホーリエモアーカナイトやら他にもいろいろ出せるから。

・・・だけどそれまで入れたら本当にコピーになってしまう

「そしたら・・・考えて組んだ恭介に悪いもんね・・・」

いくら自分の兄のデッキとはいえそこまでする気にはなれない

「偵察者は・・・やっぱりダメね。デッキが変わっちゃうもの」

墓守を入れたら猫とエアベルンまで入れたくなくなってしまっ。でもそれしたらこのデッキは魔轟神デッキではなくなるし、楽しめなくなる・・・そんな気がした。

墓守と猫、魔轟神獣の組み合わせでのワンキル・・・聞いたことはあつたが、楽しくないと感じた

「・・・まあいいわ！とりあえず二種類をと・・・あ。」

・・・たった今気付いた。存在すらほとんど覚えていないカードを普通持ち歩いているだろうか・・・

「私・・・エンチャンターもパペットマスターも持ってないわ！」

・・・どうする！？恭介に譲ってもらうのは・・・あんな態度で帰ってしまったので今さら「ちょくだい？」なんて言えるわけないし・・・。

知り合いには・・・？エンチャンターはともかく、パペットマスターを持つてるとは思えないし・・・

「だ〜も〜！私のバカバカバカ〜！」

思わず自分のベットにダイブする

「諦めるしか・・・ないのかな・・・」

これでは何のために恭介に魔轟神を使ってもらったのかわからない・・・

「・・・ダメ元でいいから聞いてみよう」

許して・・・くれるかな・・・？

カードと睨み合いをしていたらメールが届いた

「・・・やっぱり」

予想通りの内容。アイツは確か両方とも持っていなかったはずだ

「・・・10秒で来いっとな・・・」

送信。

・・・。

「6、7、8・・・」

ドオオン！

．．．どこかで爆発音が聞こえたような．．．

「．．．ゲホツ！ゲホツ！」

玄関先で誰かが咳き込んでる．．．

「．．．どちら様で？」

玄関を開けてふと下の方を見ると人がボロ切れのように倒れていた。荒い呼吸を繰り返している．．．

「今度は全身か．．．。サービスしてくれたのか？」

「バカ言ってるじゃ．．．ないわよ．．．！」

「本当に10秒で来るとは思わなかったなあ」

「全速力で行けば10秒で来れることくらい．．．知ってて送ったくせに．．．！」

「まあ落ち着け。そして乱れた服を整えろ」

今の銀髪少女はパジャマ姿だが、上は全てのボタンが外れてしまっているため胸からおへそまで全部まる見えである

「・・・その前に一枚っ」と

「撮らないでって・・・やっぱりもういいわ・・・」

いくら言っても無駄だと悟ったようだ

「上はなかなかレアなんだな。見上げて見れるものじゃないし」

「まさかとは思っけど明日香とかのは見てないでしょうね・・・」

「お前は俺を何だと思ってるんだ？」

「変態」

「ですよー。．．．いくら俺でも友達を見るわけがない。見よ
うとすら思わない」

「だよー。．．．うん、わかってた」

「俺が見ようとするのは家族のものだけだ。テテユスもリンも俺の
大切な家族だ。だから見る」

「それもどうかと思うんだ．．．」

「第一、何を恥ずかしがってるんだ？俺とお前は一緒に仲良く風呂
へ入っていた仲であろうに．．．」

「そんな大昔のことを言わないでよ．．．昔とは違つものよ」

「そっだよな．．．昔はペタンコだったのに今は立派に成長して
．．．」

「そっぢゃないわよー！」

「嘆く者と歡喜する者とで分かれる二次成長の神秘だ！」

「決めても全然カツコ良くないから・・・」

「まあそんなことはどうでもいい。とりあえず入れ」

「うん・・・」

「それで確か・・・パペットマスターとエンチャンターだったな」

「・・・一応聞くけど何枚ずつあるの？」

「パペットマスターは2枚、エンチャンターは回収してたから6枚ある。どちらも半分ずつしか使わないな」

「なんでそんなにあるの・・・」

「もちろんみんな使わないからさ。そんなカードあるの！？みたいな反応が楽しい・・・何枚持つてく？」

「できれば貰えるだけ欲しいけど・・・」

「なら持ってけ。・・・ほら、3枚と1枚」

「いつの間に用意してたの・・・。でも本当にいいの？」

実はメールが届く前から持っていないと騒ぎそうだったので用意していたのだ

「お前からは新しいカードを貰ったからな。これくらい構わないさ」

「それならありがたく頂くね。・・・来て！私の精霊！」

「へ・・・？」

いきなり何を言い出すんだこの娘は・・・

「私も精霊欲しいな〜って」

「欲しいって・・・。物じゃないからな」

「もちろんよ。道具なんて言わせない」

「それで？精霊ってパペットマスターか？」

「あんなの違うわよ！ワールドエンchanターに決まってるでしょ！？」

「もちろん冗談だ。どうしてエンchanターなんだ？」

「これから私のフェイバリットにするの！だから精霊になってほしいよ」

「……んで？どつやって呼び出すんだ？」

「今やってる。もうすぐ行くってね」

「わかるのか？本当だろうな……？」

「来るわ！……あ、頭上に注意してね」

「わからないお友達は頭上に注……ぐへえ！」

ソリッドビジョンで見た通りの少女が上から降って来た。

俺の上に……。

第十六話「趣味」（後書き）

今回は一応ミラー戦及び、なんちゃって魔轟神のデッキを紹介。

天罰の代わりに《血の代償》や《二重召喚》を入れれば良いことあるかもです。

あと新しい精霊としてエンチャントをチョイスしてみました。

私のお気に入りでございます。

暗殺者制限から復帰しないかなあ…

長くなりましたが、それでは。

第十七話「蒼い少女」(前書き)

十七話は新しい仲間の話です。

なかなか書く時間が…という言い訳です。

それではごうそ。

第十七話「蒼い少女」

好きなセリフを言いながら上を見上げると女の子が降ってきた・・・

「いてて・・・。なにこのラブコメみたいな展開」

『じめんなさい・・・ひゃっ!?!?』

「ああーーーーー!」

なんだか騒がしいが少女が上に乗っていて、視界が塞がっているため何が起きているのかわからない。・・・ん？手に柔らかい感触が・・・

「ちょっと！早くどいて!」

リンが少女を退かしたのか、視界が戻ってきた

「ぶづ。ぶづやく解放され・・・ぶへえ!?!?」

「あなた・・・何どさくさに紛れて揉んでるのよ!」

「へ?揉んだ・・・?」

ふと少女を見ると少し顔を紅くしている。それにあの柔らかい感触・・・マジか

「あ、いや・・・すまん」

とりあえず謝ることにする

『いえ・・・これは事故で、降ってきた私の方が悪いのでいいんです』

「いいのお!?初対面の男いきなり揉まれたのよ!?そんなあっさり許しちゃうの!?!」

初対面どころかちゃんと挨拶する前の事故なわけだが

「ホラ、本人が許してくれたから・・・」

「よくないわよ！私だって揉まれたことないのに！」

「いや、怒るところはそこじゃないだろ……」

本人には悪いが、どうやらこの娘はまともな部類なようだ。真面目
そうだし。

まったく……テテユスはこの娘のことを見習って……

『揉んでほしいって頼まないんですか？』

……いきなり前言を撤回したくなる発言が

「それは俺が断るから無理だ。俺は直接手出しはしない」

「女の子に胸を揉んでほしいって頼まれても断る男って……」

『実際にいるんですね。……ラブコメの主人公ですか？』

珍しいものを見るような目で見られる。あとラブコメで……

「そうだわ！今回みたいに事故を装えば・・・！」

「口にしてる時点で事故ではないし計画バレてるぞ」

「この計画の恐ろしさは事前に知っていても防ぐことができないことよ。何故なら・・・それは事故だから！」

「お父さんに要請しておいた。不穏な動きを見せれば抹殺せよと」

「ええ！？まさかの計画失敗!？」

『・・・お父さんって?』

「知ってるかわからんがエンシエントホーリーワイバーンの精霊だ。あと今はいないが光神テテュスもいる」

『私以外にも既にいらっしやるんですね・・・』

「ワイバーンの方はホーリエって呼んでるわ」

『・・・ホーリエ?』

「愛称だ。ぶつちやけると名前が長いから名前をもじっただけだが。元ネタは某人工精霊」

『人工精霊のホーリエ?・・・あっ!第五人形の人工精霊ですね!』

・・・何故か知っていた

「ねえ、あなたにも付けていい?」

『私にですか?』

「うん。あなたに名前があるならそっちの方で呼びたいけど・・・」

『名前はありません。私はあくまでカードの精霊ですので・・・』

「んじゃ私が決めてあげる!え〜っと・・・」『「ぶつちゃん」で』

なんとという安直なネーミング・・・

『「ごうちゃんですか・・・いいですよ」』

「・・・なんかすまないな」

『いえ、むしろ私がお礼を言いたいくらいです。コールド・エンチヤンターよりもごうちゃんの方が名前っばいですし』

「よし、決まりね!」

『ところで・・・お二人はどのような関係なんです?』

「ふえ・・・?」

予想外な質問に間抜けな声を出す銀髪少女

『いえ・・・先程からのやり取りを見るに、ただの友達ではないということだけは確かなのですが・・・。もしかして恋人同士、ですか?』

恋人?うん・・・まあ確かに顔が似てるわけでもないからその発

想は間違いではないが・・・

「ん。いや、俺とリンはただの家族だ」

『ええっ！？家族って・・・！？』

驚き方がハンパではない。これは明らかに誤解されてるな・・・

「あ、いや、家族と言ってもだな「私と彼は永遠の契りを交した仲間なんです」コラアアアア！」

その発言は間違いではない。間違っちゃいないんだが・・・別の意味で捉えてしまった少女は困惑している

『え、えと・・・お二人が家族とゆうことわ・・・学生なのにそのお歳でもう・・・ええっ！？』

「あ、あの〜。家族と言ってもですね・・・兄妹なんですよ。私、たち・・・。この女の子、リンは、俺・・・私の、義理の妹なんですよ。・・・わかります？」

混乱している少女に呼びかけるのだが、口調がおかしくなってしまう

った。少女を混乱させた本人は笑いを堪えてプルプル震えている

『え・・・？義理の、妹・・・？』

・・・お。冷静になってきた

「あ、はい。義理の、妹です。決して嫁とか、そっちの家族ではないんです、はい」

ずっとあたふたしていた少女は冷静になると同時に顔が紅く染まる

『す、すみません！私・・・恋人ではなく家族だと言われたので、てつきり・・・』

「まあ可愛らしい勘違いってことで・・・」

「ねえ、こっちゃんってラブコメとか好きでしょ？」

いきなり何を言い出すんだ・・・

『えっ！？何で分かったんですか？』

「いや、ラブコメとか恋人とか言い出すんだから好きだなんて推測つくじゃん。常識的に考えて」

「まあそれくらいなら俺も思ったな。ひよっとして好きなのかな？
って感じで」

『あ……。そう言われればその通りです』

「この程度の発想くらい出来ないと……」

『すみません、勉強不足ですね……』

「まったく……。しっかりしてよね！」

こんなこと勉強してもためにならないが……

『あ、失礼ですが……。お二人のお名前を伺っても……』

……。あ。一番重要なことを忘れてた。

テテユスは俺達の素性を知っていたうえで来たが、この娘は違うか

らな

「ずっと自己紹介しないでごめんな。一番重要なことだった。……俺の名前は朝霧恭介。これから力を借りることになると思う。以後よろしくな」

「私も自己紹介するの？」

当たり前だろう。自分の精霊にくらい自分で挨拶したまえ

「えっと……私は朝霧リン。恭介の義理の妹で、あなたのパートナーよ。力、貸してくれる？」

『朝霧恭介様と朝霧リン様ですね。私、あなた方に忠誠を誓い、微力ながらお手伝いさせていただきます！』

少女は気合い十分に宣言する。頼もしくもあり、こちらからも願っていたところだが、少し問題が……

「あ、いや……」

『……恭介様、どうなさいました？』

「いや、俺のことは恭介でいい。様なんで付けないでくれ。柄じゃないからな」

『……え？あの……』

「私のこともリンでいいわ。……パートナーだって言ったじゃないの」

『お、お二人共何を言っているんですか！従者の私が主人を呼び捨てだなんて……』

「いや、俺達と一緒にやっていきたいと思っではいるが、お前を従者にするつもりはない」

『恭介様、私はお二人に従い、尽くすつもりでいるのです。その言葉を聞き入れることはできません』

真面目な娘なのね。嫌いじゃないけど……

「うーん……従者云々はおいといて、まずは呼び方ね。彼のことは恭介と、私のことはリンと呼びなさい」

『り、リン様！先程も申し上げたように、私には主人を呼び捨てにすることなどできません！』

「……私のことはリンと呼びなさいと言ったのです。これは命令ですよ？」

しかし……命令と言っても……と、少女は明らかに困惑している

「私達はあなたと対等でいたいのよ。主人と従者なんかじゃなくて、お友達になっしてほしいの」

『従者が主人と対等なんてあり得ません！ましてや友達だなんて……！』

「そこを何とかお願い。……私の頼み、聞いてくれない？」

『頼み……。いえ、やはり私は……！』

あのリンにここまで言わせても首を振らないとは……真面目を通り越してもう頑固だな

「・・・あのさ、お前が騎士道精神か何かを貫きたいのはわかる。だがな・・・」

『お言葉ですが、私の信念を騎士道精神などという言葉で軽々しく言わないでください!』

む、口調が荒くなった。どうやら少し怒らせてしまったようだ

「そうだな、すまなかった。だが・・・お前は堅すぎるんだ」

『私が堅すぎる?..』

「ああ。どうしてリンが対等でいてほしいと言っても聞かないんだ?」

『それは私が従者だからと・・・』

「お前が堅苦しいくらい真面目なのは良いことだが、四六時中そんなだと俺だって気疲れするぞ?」

「・・・まるで私が真面目じゃないみたいな言い方ね」

「お前にとって様付けなんかは普通だろうが、俺もリンも、そういうのに慣れていないんだ。これじゃあ主人の手助けどころか、負担をかけさせることになるんだぞ？それでもいいのか？」

『うっ……』

「だから……様とか言わないで仲良くやらないか？その方が何倍も楽しいし……な？」

『楽しい……。お二人にそこまで言われたら仕方ありませんね。わかりました。お互い、助けあいながらいきましょう。……恭介、リン』

「……ようやく折れたか」

『ふっ……すみません。性分なもので……頑固ですよね』

「いや、いいんだ。おかげでいい笑顔が見れたしな」

『え……っ』

「「ごうちゃんさつきからずっと笑ってなかったよね」

『そう・・・でしたか？』

「ああ。来てからずっとだ。・・・一つ聞きたいんだが、お前さ、騎士団が何かに入って仕えるものだと思っただけだったか？」

『ええ、そうです。主様に忠誠を誓い、主様に自分の力を使っただけのことを喜びとする。・・・この理念に何か問題でもありませんか？』

「・・・気合いが入っていたようで悪いが、ここはそんな場所じゃないし、戦争をするような時代でもないんだ」

『時代も何も関係ありませんよ。ヒトはいつの時代でも自分より上の者に忠誠を誓うものでしょう？』

いや、現代日本ではそういう考えの奴はもうほとんど存在しないよ
うな・・・

「忠誠を誓ってもらっても困るんだがな・・・。ああ、せつかくだからアイツを呼び出すか」

『・・・呼び出す?』

「テテユスだ。一応先輩だし、アイツにも挨拶させなきゃな」

俺はもけもけ型の通信機を取り出す。テテユスから渡されたものだ。精霊界に帰ってゲームをしているときはこれで呼び出せとか・・・

『もけ〜！もけもけ〜！』

恭介に渡した通信機モケモケが鳴く。これから始まるってのに・・・！話しながらやるしかないか・・・

「あ、テテユスか？」

『ちょっと何よ！今大事な一戦があるんだから呼び出しなんてしないでよー！』

「あ、悪い。ちょっと帰ってきてくれ」

『そんなの無理よ！大事な一戦だっって言ってるでしょ！？』

「……俺の名前を言ってみろ。お前の主人は誰だ？その戦いとやらが終わってからで構わない。……じゃあな」

反論しようとしたら一方的に切られた

『くっ……！汚い手を使いやがって……！くそっ！』

普通なら特に何も思わずにすぐ駆けつけるけど……今はとある紳士を相手に戦っているので物凄くイライラする！

『はっ！？しまった……！』

『……そういえば女神テュスは現在何をしていますか？』

「んっ、ゲーム。RPGだな」

『ゲームですか！？主をサポートする精霊としての職務を果たさずに！？』

「普段はずっとこっちにいるよ？夜みんな寝る頃に帰って遊んでるみたいだけどね」

「今いいところだとかで文句垂れてたけど。現在8週目をクリアしそつだとか・・・」

「8週目！？」

「虚無の彼方に儂く散るか・・・って懐かしいセリフが聞こえてきた。あれは水迷宮のマグナ様だな」

「そつちの8週目なの！？・・・本当に懐かしい。愚かな愚かな愚かな愚かな愚かなとかウザかったな」

リンの言う愚かな・・・とは愚かなカウンターである。あれは正直イライラする。コントローラーが弾丸へと昇華するくらいに

「あの聖女のおばちゃんはPOMで抹殺するしかない。面倒だから」

「可哀想だけど面倒だよね……。あのゲームはデビュー作ただけあつて穴子が強かった」

「俺はあの穴子に帰ってきてほしい。術を使わない穴子なんて……」

「そういえばあのゲームって神の存在を否定してたよね……。天使がそんなのやってもいいわけ？」

「面白ければいいらしい。他のやつらにも勧めたらどっぴりとハマッてたとか……」

「案外テキトーなのね」

『会話の途中で失礼ですが、少しいいですか？』

おっと、つい会話に夢中になって放置してしまった

『女神テテユスはどういう精霊なんですか？』

「ん〜テテユスは女神だからか忠誠とか理念なんてものはないな。俺達も堅苦しい態度はいらないけども」

『忠誠心がないってそれは問題なんじゃ・・・?』

「もうすぐ来るからとりあえず待て。先輩には挨拶しなきゃな」

『はぁ・・・』

『ただいまぁ・・・』

天使がようやく帰ってきた

「・・・テンションが低い理由は言わなくてもいい」

「つまらん・・・意味のない時間を過ごした・・・だっけ?」

『そのセリフを言うのはやめてよお!』

「俺の予想では時止め回避を失敗してスネークバイトだな」

「私の予想はまさかの慈悲とゆげで」

『どちらもありがちだけど不正解。正解は不意を突かれてインディグネイトをまともに喰らう、でした』

インディグネイト・ジャツジメントか・・・ダウン回避かマジックガードをしなければ即死コースの術だったな。どちらもタイミンクがシビアだが

『せっかくのアンノウン8週目マグナ様が・・・くやしっ！』

「何で詠晶なんて許したんだ？」

『・・・ブラスター入ったら止められるわけないじゃない』

「確かに・・・」

『普通だったら回避できたのに集中できなくてね。・・・開始直後に誰かさんが変な呼び出ししたせいで』

「うっ……すまない」

『謝られても時間は返ってこないのよ。到達するまでどんなに苦勞するか知ってるの?』

「わからない。俺は3週目をクリアしたらギブアップしてたからな。……俺に何かできることがあるならやらせてくれ。せめてもの償いにしたい」

『フン、償いね……。今は夜だし、あなたのカラダで気持ち良い事でもやらせてもらおうかな?溜まってるのよね』

「ちょっと何よ!溜まってる夜にお兄ちゃんのカラダで気持ち良いこと!?!私もそこに混ぜて!私にもやらせなさい!」

『別にいいわよ。人数が多ければ……。ね。それで、あなたはどうするの?』

「……やらせてくれと言ったから構わない。お前に従おう」

『ふふふ……。わかったわ。もうこの話はいいわ。それで?私の努力を無駄にした用件って何よ?』

「あ、それはだな・・・」

『私・・・新しく傘下に加わせて頂きます、コールド・エンチャンターです。女神テテユスよ』

先程の会話を聞いていたのか、少し顔を紅くした少女が名乗り出る。テテユスは自分を呼んだ少女を見つめる。女神の瞳はまるで少女の内側を見ているようで・・・

『はあ・・・こんなくだらないことで私は呼ばれたのね・・・』

『え・・・？まだ私は何も・・・』

『わかるのよ。この場の雰囲気や、あなたの表情とかでね。用件は・・・最後の説得よね？』

『説得・・・？』

『ええ。挨拶なんてただの口実よ。さっさと終わらせたいから本題だけど・・・忠誠だの理念だの、くだらないことを掲げてこの子達に迷惑かけないで頂戴』

『なっ……!?!?く、くだらないですって!?!?』

少女は驚いた。まだ何も話してはいないのに、まるで最初から話を知っていたかのような発言に

『忠誠を誓うとか、従うとか、この子達からそんな堅苦しいものは嫌だって聞いたでしょう?ここは女王サマの所でも何でもないんだから』

『っ……!?!?』

何故まだ二人にも言ってもいないことを!?!?

「誰だ?女王って」

『氷の女王よ。この娘はその女王サマに仕えてたの』

「女王に……だから忠誠とか騎士みみたいな対応だったのか」

『何故そんなことまで……』

『知ってるのかって？乙女の秘密ってやつよ』

「乙女て・・・」

『大体忠誠なんてそんなものいらなのよ。この子達はお互いに笑って過ごせればそれでいいわけ』

『誓いがいらない・・・？ならば今度は私が聞きましょう。女神テテウス、あなたには二人に対する忠誠心が無いと聞きました。・・・何故ですか？』

『私は・・・私達は、互いに信頼しあっているからよ』

『信頼・・・』

「べ、別にアンタのこと信頼してるわけじゃ・・・」

「ほらそこ、空気読め。そしてシンデレにならない」

『忠誠を誓わせるってことは、相手を信頼してないことだっと思っつよ。次第に信じてもらえるようにはなるだろうけど、それは相

手が忠誠を誓っているから。でも、互いに信頼しあっていたらそんなのいらないでしょ。これは私の持論だけど・・・違う？』

テテユスの言葉に、はっとする少女

『忠誠なんて誓ってもらっても困るとか言っただけ？あなたと心から信頼しあう仲になりたい・・・そう思っているからよ』

「勝手に解釈されたがまあ良いだろう。・・・俺達の方は大丈夫だが、お前は・・・忠誠なんて言わないで、俺達に心を開いて歩み寄ってくれるか？」

「強制なんてしない。嫌なら嫌と言ってきて構わない。今はまだわからないけれど、後になって嫌になった時は、見限って帰ってしまっても構わない。例えその時になっても私達には文句なんて言えないから」

「今一度問おう。コールド・エンチャンター、お前は・・・俺達と対等に、共に歩んでくれるか？」

『・・・はい。私はあなた達と対等に、苦楽を共にしましょう。朝霧恭介、朝霧リン、女神テテユス・・・これからよろしく』

俺達は一人一人握手をする

「……しつこいようで悪いけど、本当にいいの？」

『何がです？』

「恭介は変態だし、私は性悪だし、テテユスは白いたい焼きが食べられないんだよ？」

『そんなの大丈夫です。私は苦楽を共にすると言ったはずですよ？』

「おい、その前にいろいろと突っ込めよ。変態とか性悪とかたい焼きとか」

『変態と言っても恭介は男の人ですし、リンの性悪は自己申告ならこれも特に。最後の白いたい焼きなら私は食べたことがあります、普通に食べられましたよ？』

『え……？食べたことあるの？あの白い悪魔を？』

『はい。もちもちとしてて美味しいものでした』

「うつ・・・これまでいなかったキャラ・・・。ポケを冷静に流していくとは・・・!」

『え？ポケだったんですか？』

「いや、ポケてるのはリンだけだ。ちなみに今もポケてるから適当に流してやってくれ」

『わかりました。リンはポケ担当なんですね!』

「ちょっとどうしてそうなるのよ!? 私はポケ担当なんかじゃないわ!」

「初めて会ったばかりなのにポケまくってたらそう思われても仕方ないだろ」

『そういつことですので諦めてください。ポケ要員朝霧リン』

「そんな・・・そんなはずじゃあ」

がっくりと肩を落とす銀髪少女

『・・・一応ボケてみたのですが真に受けてしまったようですね』

「ボケだったのか？俺でもマジで言っているのかと・・・」

『あゝ。そろそろいい？私への償いの件だけど・・・』

テテユスは嫌な笑みを浮かべている。そろそろ裁きの時か・・・

「私にもやらせてくれるのよね!？」

『ええ。布団・・・借りるね?』

『えっと私は・・・』

『あなたは一緒にやってもいいし、見てるだけでもいいわ』

『じゃあ・・・見えます』

『ちょっと、動きが遅くなってるわよ！もっと速く！あっ・・・そう、そこよ。ああ・・・イイわぁ〜』

「何で私がこんなことを・・・」

『あなたが自ら進んで言ったことでしょう？文句は言えないはずよ？』

「うう〜。騙された・・・」

『騙すなんて人聞きの悪い。私は気持ち良いことって言ったはずだし、現に気持ち良いんだから嘘じゃないわよ？』

「だからってこんな・・・」

「黙ってやれば早く終わらせてくれるんだ。静かにやれ」

現在俺達はテテユスの全身をマッサージしている。

現在リンは肩を、俺は足を揉んでいるところだ

『あ、マスター次は太ももね。よろしく〜』

「あんたは太ももを男に揉ませるの？」

『どついう反応するか見たいんだも〜ん。あ、お尻とかは揉んじや嫌よ？お楽しみは二人つきりになった時に・・・』

「誰が揉むかあああ！」

「そうよ！マッサージ以外でお兄ちゃんが揉むのは私のカラダだけなんだから！」

「お前は黙ってる！」

「あ、こうちゃん、ちょっと手伝ってよ！」

『私は始まる前に見てるだけと言いましたので、二人で頑張っただけよ』

『そうよ。あと許可なく話したからペナルティで30分追加よ』

「勘弁してくれ・・・」

『連帯責任よ。この可愛い妹を恨みなさい』

「何故だろう・・・今なら呪い殺せそうなのがする」

「また私が悪いの!？」

『そう言ってるからよ。15分追加』

「リン・・・後で覚えておくんだな」

「・・・はい」

『ふふふ・・・』

『楽しいでしょう?他人の不幸は・・・ね?』

『そこまでは言ってますんよ・・・?』

『笑っていたじゃない・・・同じことよ』

『そう・・・なんですか？』

『そうよ。二人にとって不幸ってわけじゃないけどね』

『あと・・・随分と賑やかなんですね』

『どうしたの？もしかして後悔してる？』

『いえ、私が・・・なかったので・・・です』

『え・・・？何よ？』

騒がしくてうまく聞こえなかったらしい。
仕方ないのでもう一度だけ言おう・・・

『私が仕えていた時は・・・こんなに笑いあっていたことなんてなかったの、とっても楽しいんです』

・・・やっぱりね。女王のところは殺伐とした雰囲気だったのだろ

う。

今の彼女からは自然と笑みがこぼれている

『・・・よかったじゃない。これからも楽しみなさいな』

『はいっ！』

こうして・・・俺達に新しい仲間が増えた

第十七話「蒼い少女」(後書き)

終了です。

こうちゃん説得のところに時間がかかっていたという

そろそろ原作通りに話を進めなければ…

まずは闇のなんとかさんですね。

それでは。

第十八話「闇」(前書き)

遅れました十八話。

若本ことタイタンの話です。

全体的にネタです。

それではどうぞ。

第十八話「闇」

朝食を食べて身支度を整え、出掛ける準備をする

『おはようございます、リン。昨日はよく眠れましたか?』

私の精霊になったコールド・エンチャンターがやって来た。

昨日は部屋に招待して語り合おうと思っていたら部屋の前で帰ってしまったのだ。

確か、夜のプライベートな時間を邪魔するわけにはいかないのかなんとか……。

少ない夜の時間にプライベートという意味深な発言……真面目そうに見えて不純な娘である。

「昨日は……テテユスの不謹慎な発言のせいで妄想が止まらずについ2回もやる羽目にゲフンゲフン」

『2回もですか!?!? けっこうイケるんですね』

「そこに驚くの!?!? てかアンタが仕向けたんでしょ!?!? 何よ、夜の

時間って！？その発言で余計止まらなくなったのよ！」

『それで……これからどこへ行くんです？』

うわっ……不利になると思いきやいきなり話題を変えやがった！
まあ私もこんな話を続けるつもりはないけど……

「もちレッド寮！暇だからね」

『暇つぶし……ですか？私が独自に調べた情報によりますと、リンがレッド寮に行く事を好ましく思っていない人物がいるそうです』

「……そんなものいつ調べたのよ」

『当然夜中の内に。誰かは特定できませんでしたが……』

「まゝ私はどんな連中かは想像はつくんだけどね」

『私は全然わからないのですが……リンがわかるなら心配はいりませんね』

「そゆこと。余計な心配なんてしないでいいのよ。．．．いざとなつたらデュエルで潰せばいいんだし。さあ行くよー!」

レッド寮までしばらくかかるので道中会話をしないわけにはいかない。
知り合った人とより親密になるには趣味の話をするのが一番!というわけで．．．

「ねえ、こつちゃんはゲームってやるの?」

『ゲーム．．．ですか?』

「そ。精霊界にもあるんでしょ?」

『あることはあるんですが．．．』

「．．．その反応はやったことないってこと?」

『いえ、一応好きなゲームもありますが、私は女王様に仕えていたので遊びなど．．．』

「控えてたつてことね・・・真面目だなあ。それで？好きなジャンルは？」

『あ、私はアクション系は苦手なので主にパズルゲームをやってきました』

「パズルか・・・専門外だな。恭兄なら雑食だからパズルもけっこう得意だったけど」

『得意とはどのような・・・』

「基本落ち物ゲーだけど、ぷよ○よならとことんモードならかなりやってたし、テト○スはゲームクリアまでやってたなあ」

『私が好きなのも落ち物系です。その二つはけっこういけますよ？』

「へえ。機会があれば今度対戦でもやってみれば？」

『ふふふ・・・そうですね』

そろそろ話題が尽きそうという時にようやくレッド寮に着いた。

「ねえ、恭兄いる？」

「鍵は開いてるから勝手に入っていいぞ」

「……何をしてるのかしらん？」

部屋に入ると恭介とテテユスがゲームをしていた

『朝霧恭介、女神テテユス、おはようございます』

『あら、しじきげんよう』

「第一声がそれっていったいどこのお嬢様よ……」

『私は女神様よ？ 挨拶くらい別に何でもいいじゃないの』

「そりゃそうだけど……何をしてるの？」

『見ての通りゲームよ。・・・あなたもやる?』

見ると丁度対戦が終わったのか、恭介がダウンしている

「・・・ひょっとして私と戦うつもり?」

『そう言ったつもりだったんだけど・・・聞こえなかったのかな?』

「それは私の強さを知ってて言ってるの?」

『強さ・・・?ふふっ!まだまだ未熟なあなたにお姉さんが直々に稽古をつけてあげようかと思ってね』

「あなた・・・私を舐めてるの?」

『それは・・・私のセリフよ!』

「『勝負!』!」

『これで最後よ。大次元断!』

「くっ!まさか剣も使えるなんて・・・」

『全ての武器熟練度は上げてあるわ。そして現在50連勝中よ。・・・まだやるの?』

「っ・・・次こそはきつと・・・!」

既に最初の覇気は無くなり、いつの間にか一度だけでも勝つことが目標となっていた

『一応努力してたあなたには悪いけど、あなたよりもマスターの方が強いのよ?そのマスターすら私には届かなかったの。あなたが勝てる道理は無いわ』

俺達がやっていたのはやり込み系RPGの通信対戦だ。

戦士、格闘家、魔法使い、天使や魔物に魔人など様々なキャラがいて、キャラ毎に六段階の階級がある。

当然キャラによって基本ステータスは変わる

「私の努力を……一応なんて言わないで！」

このゲームは武器や防具などのアイテムを強化できるシステムがある。

装備さえ強化してしまえば、斧を装備したLV1の魔法使いがラスボスを一撃で倒すことくらい余裕でこなせる

『無駄よ。あなたじゃ私の戦力の半分を削ることも叶わないわ』

ステータスで全てが決まるため、運や実力で覆すことができない。それがこの手のゲームの最も残酷なところだ

「私がこれまで費やしてきた時間は……」

私の努力はテテウスにとって何の意味もないものなのか……。彼女からして見ると普通の雑魚敵と大差はないのだろう

『悔しかったら強くなることね』

「もう……悔しいなんて感情無いわよ……」

『リン……何だか可哀想です。それにしてもそのゲーム凄いですね。えと……何ダメージでしたっけ？』

「さっきのは大体二千万ダメージだな。頑張れば一撃で一億を超えるダメージ量を叩き出せる」

『……そんなにダメージが必要なんですか？』

「いや、二百万ダメージを与えれば大抵の雑魚敵は倒せる。ちなみにラスボスの体力はたったの十万程度だ」

『十万という数字にたったとか、程度とか言えるのが異常ですけど……その前に雑魚敵の方が強いんですか!？』

「ラスボスなんてただの飾りです。このゲームは一撃で二百万ダメージを与えられるようになったら世界が変わる」

『……もうケタが違い過ぎて想像できません』

「だが敵をもつと強くできる方法も……」

『……もういいです』

その後、なんとか立ち直ったりリンだが、どこか悲しげに寮へと帰って行った

『・・・可哀想なことしたかしら』

「いや、あいつはゲームでの事だって割り切ってるからしばらくしたらまたいつも通りになるさ」

『私も子供ね……。あの娘ったら負けず嫌いだから、最初からこうなるってわかってたのに……。』

「圧倒的な戦力差で負けるってのが一番辛いからな。これまでの自分の努力を嘲笑うかのように一瞬で、全てを奪われていく光景。・・・きつと認めたくなかったんだろう」

『一から育ててると自然とキャラクターにも愛着沸くもんね。汎用キャラなら、名前を付けるところから……。』

「俺はあいつよりも早く始めてたけど、何かある度に嬉しそうに飛び跳ねてたな……。レベルが100を超えた、ラスボスを倒した

とか」

『私達と違って純粹に楽しんでたってことか・・・』

「俺は別のシリーズもやってたから育成メインだったからな・・・
それでもお前には届かなかったが」

『・・・あの娘には本当に悪いことしたなあ。今度何かやってあげようかな』

「そういうことはやらない方がいい。今はもう割り切っているだろうが、そうすることで逆に傷つけることになる。むしろ逆に煽ってやってくれ」

『挑発してやる気を出させるって？・・・むしろそっちの方が危ない気がするけど』

煽った結果、ムキになって強化に励むか、完全に打ちのめされて、もう二度と手に取らなくなるか・・・今回は間違いなく後者のケースの方が高いだろうに

「それなら何もしないでリンからの接触を待つことだ。まあこの程度で今までの関係が変わるわけがないがな」

『初めからそう言いなさいよ……。私の反応を見たかったってわけ？』

「そついつとこころだ。まあ暫くはそつとしておいてやれ」

『リン……。大丈夫ですか？』

「平気よ。……ちょっとショックだっただけ」

『……。嘘ですね。あからさまな強がりを見るに耐えませんか？』

「傷ついている相手にあんたそこまで言うの？……。たかがゲームだけど泣きたいくらいショックだった。自分なりに頑張つて、強くなる度に喜んでたけど……」

『どんな積み重ねでも崩れる時は一瞬ですよ。……。彼女のこと嫌いになりました？』

「これくらいでテテユスのことをクライになるわけないじゃん。でも・・・おかげでいいヒントが得られたわ」

『ヒント・・・？』

「ちょっとしたデツキを作るの。私がやられたような・・・相手の全てを奪い尽くすようなデツキをね」

『・・・私で良ければテストデュエルしましょうか？』

「何もできなくなるよ？それでもいいなら」

『・・・私にも興味があるので』

「それならいいわ。・・・少し待っててね」

「どっ？私の新しいデツキは？」

『・・・何もできませんね。私の完敗です』

「ふふふ・・・なかなかいい感じね。テストデュエルありがとう」

『今回はリンが先攻でしたが後攻の場合はどうするんです？』

「心配いらないわ。後攻の時もね、これを持ってきて、こいつを出すの。そしてこれをセットすればさっきと同じように・・・」

『・・・凄いですね。でもきちんと成功するんですか？』

「その為に手札交換系が入ってるんだし、この戦術が全てではないわ。破られても普通にビートダウンできるもの」

『特殊勝利が狙いなわけじゃないですしね』

「・・・さて、そろそろ時間だし、私はご飯でも食べに行こうかな」

『それなら私は部屋で待機してますね』

「・・・イタズラしないでよね」

『そう言われるとやりたくなりますね』

「まあ別にいいけど・・・勝手にいじったり壊したりしないでよ」

『了解です』

食堂で飯を食べて部屋へと戻る

「やっぱりエビフライは美味い。エビ最高」

『私はエビは生派。フライのエビは伸ばされてるから嫌』

「それが商売だ。生は食べる時に面倒じゃないか？」

『生は丁寧に脱がした後に舌で先端を少し舐めてからおクチでくわえてゆっくり味わうの』

「・・・それってエビの話だよな」

『エビ以外に何が・・・ってマスターったらやらしいわぁ。まさかソツチの話だと思っただわけ？』

「誤解を招く発言は控えてくれ」

『もう、してほしいなら言ってくればいいのに』

「誰もそんなことは言っていない」

『ああもう我慢できない。さあマスター、今こそ私と一つに・・・』

「恭介、ちょっと開けて！」

不意にドンドンと玄関を叩く音と銀髪少女の声が聞こえた

『チッ！あの小娘が・・・！』

テテユスが何やら言っているがどうせギャグのノリなので無視する

「リンか？どうしたこんな時間に。何かあったのか？」

『天上院明日香が失踪したのです。リンも私も見ていません』

「別に誰がどこへ行くこうと勝手じゃないか？」

「そりゃそうなんだけど・・・行き先が廃寮だって言ったら？」

「な・・・に・・・？」

明日香が行方不明で、廃寮・・・まさか！

『廃寮って立ち入り禁止とかじゃないの？何でそんなところへ？』

テテユスのキャラが普通に戻っている。やっぱりギャグか・・・

「私と恭介は理由を知ってるの・・・。どうする？会いに行く？」

「・・・行く。明日香が心配だ」

とは言え明日香が無事なことくらいわかってる。俺達が行くのは穴子ボイスを聞くため、そして言っただけのことがあるからさ！

というわけで十代達の元に行こうか

「十代、明日香が行方不明になったらしい」

「な、なんだってー！？」

「ネタかよ……。大徳寺先生に聞いてみたら廃寮が怪しいらしい」

「女子寮でも廃寮で行方不明者が出るって噂があるの」

「俺達は行くが、お前達は どうする？」

本当なら二人だけで行ってもよかったが、ここは原作通りに十代達も廃寮へと向かわせるべきだろう

「そこに明日香がいるかもしれないんだろ？当然行くぜ！」

「よし！あ、隼人、翔、お前達もな」

翔は制裁デュエルをすることになるが仕方ない。原作だもの。

そしてぞろぞろと廃寮に向かう。

・・・普通に目立つよな、コレ

「十代、ちょっといいか？」

「ん？どうしたんだ？」

十代を呼び出して翔達と距離を取らせる

『初めまして。あなたが精霊を見ることができるといふ・・・』

「おっ、また精霊か！俺は遊城十代だ。えっと・・・」

『コールド・エンチャンターです。リンのサポートをする為に参りました』

「俺達の新しい仲間だ。挨拶させようかと思ってな。堅苦しいくらい真面目なやつだが、頼りになる・・・と思う」

『まだ来たばかりですので、至らぬところもあるかもしれませんが・・・以後、お見知りおきを』

「ああ。よろしくな！」

とりあえず普通に挨拶したが、こんなに精霊が現れているのに十代は何とも思わないのだろうか・・・

『さつきはごめんなさいね』

「いいの。私が弱かったから負けたんだし」

『いえ、鍛えることしか考えてない私達と違ってあなたは楽しんでいただけだったのに、私はあんな言い方を・・・』

「だからいいの。今度からは少しずつでも鍛えるようにするし、そのおかげで新しいデッキが作れたから」

『私のおかげで新しいデッキ？』

「今度お披露目するわ。・・・今日にでもね」

『今日?・・・誰かとデュエルするの?』

「それは後のお楽しみよ。早く廃寮に行きましょう」

「・・・見えてきたぞ」

古びた建物が見える。けっこう雰囲気があるな

「これから別行動を取ろう。俺とリンは建物の周りから探すから十代達は中へ行ってくれ。その方が見つけるのが早いだろ」

「でも恭介君達は二人で大丈夫なの?」

「俺達は体力あるから非常時でも大丈夫だ。そっちこそ用心しろよ?」

てか精霊二人いるし・・・

「意外かもしれないけど私は恭介よりも体力があるの。・・・何かあつたらすぐに駆けつけるから」

むしろあんたら二人が大丈夫なの？って思ったけど・・・

「ああ、わかった。・・・気をつけるよ」

建物の入口で俺達は二手に別れ、十代達は中へと入って行った

「これでよし。これなら余計な介入無しに原作通り若本と出会うはずだ」

「・・・いつも思うけどよくこんなこと思いつくよね。しかも即興で、もっともなことを」

「頭の回転が速いと言ってくれ。自然に話を合わせてくるお前もお前だ」

「でもいいの？話の内容についていけなくなるよ？」

「俺は基本的に自分から原作に介入しないようにしてるからな。だが若本は俺の獲物だ」

「やっぱり恭兄も？でも駄目よ！若本は私も倒したいんだから」

「だよな。どうする・・・？」

「大丈夫よ。こんなこともあるつかと・・・こうちゃん、出来た？」

「たった今完了しました。これですね？」

『何よこれ・・・カンペ？』

「恭兄が言ってた言わせたいセリフを、私も言ってほしいセリフと一緒にカンペを作って貰いました」

「でもこんな大丈夫か？相手が言わない可能性だって・・・」

「相手の中の人は若本なのよ？きっとノリノリで喋ってくれるわ」

「まあその望みに賭けるか……」

キヤアアアアア！

おっと、明日香の悲鳴が……。こっしちやおれん！

「……時間ね。さあ行くわよ！」

「ちょっと待て、お前まさか高速移動で行く気じゃ……」

「じゃなかったら間に合わないわよ？……お先に！」

シュツ！と自分で言いながら消えて行った

「クソツ！行きやがった……！」

『間に合わないか……いいわ。マスター、私に捕まって！飛んで行くから』

『あ、それじゃ私も・・・』

『二人はちよつとキツイかな。離さないでね。行くわよ!』

「うおっ!」「ひゃっ!?!」

テテユスはリンを追いかけるように飛び立った

「はあ、はあ・・・なんとか間に合ったかな」

「お前、明日香に何をしたんだ!」

部屋に着くと十代達が仮面の男と対峙していた

「・・・ふう、間に合ったか」

「げっ!何でいるのよ!?!」

恭介は高速移動について来れるはずがないのに……

『私が飛んで来たのよ。狭かったから何度かぶつかりそうになったケド』

「二人を抱えて私と同じ……いえ、それ以上のスピードで疲労せず！？なんてチート能力なの……」

『きちんと飛べるんですね……。飾りかと思ってました』

『ねえこの小娘黙らせていい？私の力を借りて来たはずなのにその私をけなしてるのよ？』

「今いいところだから黙ってくれ。……十代、大丈夫か！？」

「恭介か！よくここがわかったな」

「悲鳴が聞こえてきたんでな。そうか、コイツが明日香を……。お前、何が目的だ？」

「私の目的は貴様らを闇へと葬ることだあ！」

「そんな目的で明日香を・・・許せねえ！」

「全く・・・くだらないわね。私が相手してあげるわ。明日香に手を出したこと、後悔させてあげる」

「二人とも待て！・・・他の二人には手を出すな。お前の相手はこの俺だ」

「おい、恭介待てよ！ここは俺が・・・！」

「こんな姑息な手を使う奴なんて相手にする必要はない。十代・・・お前は楽しめるデュエルだけしてくれればいい。リンはカンペをよろしく頼む」

「・・・わかったわ」

「小娘え・・・何だそれは？」

「・・・これを読みなさい」

「・・・俺の本能が叫ぶのさ。貴様らを殺せとお！」

「負けるか！俺は絶対に、勝つ！」

どうやら今日は紳士的だったようだ。なんとかゲーティアさんのセリフを言ってもらえた

「デュエル！！」

「私のターン！ドロー。手札の《ジェネラルデーモン》の効果発動！」

ジェネラル・・・？あいつ効果なんだっけ・・・

「デッキから手札に《万魔殿 - 悪魔の巣窟 - 》を加え、発動だあ！」

地獄のようなフィールドに変わる。

万魔殿の効果は・・・駄目だ、全然思い出せん。てかデーモン自体ほとんどわからないぞ・・・

「そして手札から《デーモン・ソルジャー》を召喚、カードを一枚

伏せて終了だあ！」

あいつなら知ってる。バナラだが1900の高い攻撃力を持つモンスターだ

「俺のターンだ。ドロー。手札から《サイクロン》発動。伏せを破壊しよう」

若本氏の伏せは《炸裂装甲》か……

「お前が悪魔の巣窟を使うなら俺は……手札から《神の居城・ヴァルハラ》を発動！効果を起動し、《光神テテュス》を呼び出す！」

「はあ〜い！デュエルではすっかりご無沙汰のテテュスちゃんですす！」

「……天使は本当に久々だからな。すまない」

「もう少しで本当に居候になるとこだったわ〜」

地獄のフィールドに神の居城……異様な光景である

「だが効果は使えなさそうだ。手札から《ガーディアン・エアトス》を特殊召喚」

「ば、馬鹿な！生け贄無しに召喚だと!?!」

「エアトスは自分の墓地にモンスターがない時に特殊召喚できるのよ」

『あ、エアトス久しぶり』

『・・・今は戦闘中』

『つれないにや〜。そんなこと言わずにさあ〜』

テテュスは子供のように手を振るがエアトスはクールに返す。
エアトスも精霊になってほしいな〜

「・・・そして更に《勝利の導き手フレイヤ》を召喚する。フレイヤの効果で俺の天使は攻守が400ポイントアップする」

公式でツンデレなチア天使を召喚する。

残りの手札は《フェアリー・アーチャー》だがこっちのほう面白い

「さあバトルだ。2900のエアトスでソルジャーに攻撃！」

「・・・行きます。はあっ！」

エアトスは聖剣を振るいソルジャーを両断、その衝撃波がタイタンを襲った

「ぐぐぐぐぐ！」

タイタン

LP3000

「続けてテテユスでダイレクトアタック！」

「人は神には勝てないのだ・・・ってね。ホーリー・サルヴェイション！」

テテユスは両腕を構えて閃光を放つ

「ぐおおおおお!?」

タイタン

LP200

「後はお前だ。フレイヤ、行け!」

『何で主人でもないアンタなんかに命令されなきゃいけないのよ!』

「そうツンツンするな。てか何でお前達いるの?」

『私はテテユス姉さんに会いに来ただけよ!別にアンタに会いに来たわけじゃないんだからね!』

『・・・私はフレイヤに頼まれた』

「・・・まあ何でもいいから早く攻撃してくれ。文句なら後で聞く」

『ふん、なによあんな奴・・・!』

フレイヤはスタスタと歩いていき、ボンボンを手にしたままポコン

と殴りつけた

「ば、馬鹿なああああ!?!」

タイタン

LPO

「勝ち方はともかく、ワンタンキルか……」

「まさかあんな攻撃でこの私が……!」

「どうだ!俺達の勝ちだ!」

「ククク……調子に乗るなよ、小僧」

「な、なに!?!」

「本当の戦いは、これからだあああああ!」

「はい、ここで笑いながらビーム撃ってね」

「いや、無理だろ」

「ここまでカンペ。というわけで選手交代、次は私が相手よ」

「え？いや、私は・・・」

「これから本当の戦いなんですよ？」

『ニセゼノンのセリフを言わせて二回戦に持ち込むなんて・・・。
リン、恐ろしい子！』

「汚名返上のチャンスよ？仕切り直し、無かったことにしてやりま
しょうっ？」

「む、むっ・・・」

しびしびデュエルディスクを構えるタイタン

「デユエル!!」

「いくぞ、私のターン！手札から《万魔殿・悪魔の巣窟》を發動
だあ！」

また万魔殿か・・・てかまだ効果使えてないよな

「《デーモン・ソルジャー》を攻撃表示で召喚し、《デーモンの斧
》を装備させて終了だ！」

「いくよ、私のターン。ドロー!・・・あり？」

「リン、どうした？」

「・・・事故った」

「マジか・・・こんな大事な時に」

「うん・・・まあいいや。手札から《テラ・フォーミング》を二
枚発動して、デッキから《死皇帝の陵墓》を二枚サーチするよ」

陵墓・・・最上級モンスターを呼ぶつもりか。二枚ダブったのはデッキ圧縮にはなるがけっこうキツイかもな

「そしてフィールド魔法とカードを一枚セットして《手札抹殺》を発動。手札を全て捨てて入れ替える」

捨てたのは《死皇帝の陵墓》、《二重召喚》、《魔法石の採掘》か

「ふう・・・なんとかなりそうだわ。手札から《地割れ》を発動、デーモンを斧ごと破壊する」

地面に亀裂が入り、モンスターを呑み込んでいった

「そしてセットカードのフィールド魔法《死皇帝の陵墓》をオープン。フィールドの張り替えにより《万魔殿・悪魔の巣窟》は破壊される。陵墓の効果は自分のライフを生け贄コストに変換する。私は2000ライフポイントを払うわ」

リン

LP2000

アニメでは1000で統一だがリンはOCG効果で発動する

「ククク・・・自らライフポイントを減らしおったな？このデュエルの恐怖を味わうがよいわ！」

タイタンは千年パズルを掲げる

「消える・・・貴様の身体はライフと共に、消えていく・・・」

「リンの身体が・・・」

「透けてる・・・？」

確かこれはトリックがあったはずだ。・・・忘れたけど

リンは召喚を行うことなく呆然と立ち尽くしている

「ククク・・・どうした、恐怖で言葉も出ないか？」

「ねえ、これって・・・私の身体が消えてくの？」

「そうだ、貴様のライフが0になれば貴様は死ぬ……。これが闇のデュエルだあ！」

「……つまらない」

「は……？」

「こんなの面白くもなんとも無いわ！身体が消えても嬉しくないわよ！どうしてライフが減ると服が消える仕組みじゃないわけ！？」

「……何その罰ゲーム」

「服が消えるなら恭兄にずっと見ててもらうために負けるギリギリまで遊ぼうかと思ったのに……。もういいわ！《火乃迦具土》を召喚！」

「あ、あいつは……」

凶悪な効果を持つ最上級スピリットモンスターだ

「バトルよ！火乃迦具土でダイレクトアタック！」

「ぐおおおお!?!」

タイタン

LP1200

「ダメージステップ終了時に効果が確定、メインフェイズ2で《ワーム・ホール》を発動して次のスタンバイフェイズまで除外するわ」
「デメリットをリセットするカードだ。スピリットに使用えば帰還後永久に残ることになる。」

火乃迦具土は頭上に開いた異空間に吸い込まれていった

「私はもう手札が無いからこれで終了よ」

「私のターン! ドロー前に火乃迦具土の効果よ」なにい!?!」

「《火乃迦具土》の効果・・・それは相手にダメージを与えた次の相手ターン、ドロー前に手札を全て捨てさせる!・・・私はあなたから全てを奪う」

「ぐぬぬ・・・ドロー!」リバースオープン!」くっ、まただと!」

「カウンター罠《強烈なはたき落とし》を発動。相手がカードをデッキから手札に加えた時、そのカードを捨てさせる。・・・言ったでしょう？全てを奪うと」

効果で手札を全て失ったタイタン。フィールドも手札もがら空きだ

「ぐう・・・ターン終了だ」

「私のターン、ドロ。スタンバイフェイズ、除外した火乃迦具土をフィールドに戻す」

再び開いた異空間から炎のスピリットが帰還する

「私が引いたカードは《はたき落とし》よ。これをセットして終了すればあなたのドロ時^{タイムオーバー}にまた捨てさせるケド・・・どうする？」

何も無い状況でただただ奪われ続ける生き殺し状態。
現実での大会でやられた【**TOD**】と同じ戦法だ

『なるほど・・・これが後攻の時の動きですか』

「ん？こっちゃんはあのデッキ知ってるのか？」

『はい。あれは今日リンが作ったのですが、その時にテストデュエルをしました。・・・私はあそこまでやられなかったんですけどね』

なるほど。でも流石にあれは可哀想だろ・・・

「うーん・・・遊んでいたいけどいいや。プレイヤーに攻撃よ」

「ぬあああああ！？」

タイタン

L P O

「明日香は返してもらおうから。・・・十代がおぶってあげて」

「お、俺が！？」

「私にはそんな力無いし、恭兄は何を考えるかわからないからね」

「友達に何かするわけ無いだろ・・・」

「後は翔君は私と同じくそんな力があるとは思えないし、コアラ君よりもあなたの方が王子様にはふさわしいわ」

「なんか傷つくんだなあ」

「・・・わかった。明日香は任せる!」

「よし、それじゃあさっさと帰るしぜ!」

第十八話「闇」（後書き）

タイタンさんお疲れ様です。

リンには構造中ハンデスデッキを使わせてみました。
手札事故が起きない方がおかしい事故デッキです。

実際に事故を起こしてましたけどね…

次は制裁デュエルになると思います。

それでは。

第十九話「制裁へ…」(前書き)

お久しぶりです。

二週間ぶりの投稿になります。

サボッてたわけではありませんよ？ドタバタしていただけです！

とまあ言い訳は置いといて、今回は制裁デュエルにむけての話を少々。

デュエルはまだ先ですが…。

それではごっご。

第十九話「制裁へ…」

『ごうちゃんです。謎のデュエリスト、タイタンから勝利した私達は廃寮から出て無事に寮へと戻って来ました』

「……何をしてるの？」

『当然回想ですが？』

「まあいいわ。ところでさ……つい若本をぶつとばしちゃったけど大丈夫かな？」

もう疲れたので寝たいというのにリンは当然のように俺の部屋に来ていた

「この先の話、か……。きっと大丈夫だろ」

「七精門の鍵とセブンスターズ。タイタンは確かその一人に含まれていたはず」

「ん〜。今悩んだところでどうしようもないだろ」

『闇……か。何か引つ掛かるなあ〜』

「どうした？気になることでもあるのか？」

『あ、ただの独り言よ。気にしないで』

『そういえば普段女神はこの部屋に恭介と二人で過ごしているんですよね。……変なことされないんです？』

「何だかとても失礼なことを言われてる気が……」

『変な心配しなくてもいいのよ。私は襲われてもいいからここにいるんだし、何もしてこないから逆に襲ってるくらいだもの』

『恭介は攻めじゃなくて受けなんですね』

「おい誰がそんなこと言った!？」

「ちなみに私も被害者。頭のとっぺんから足の先まで、人に言えるところから言えないところまでもみくちゃんにされたこと数回」

『リンまでもそんな被害に・・・？あつ、リンも受けなんですね！』

「ちょっとお！そんなわけないでしょ！？」

「最初はリンから仕掛けたんだが、こいつらはやられたらやり返してるから終わりがいい」

「私がやられる時はいつも寸前で止められるからタチが悪い。もう少いでイ」自重しろ」ってのに・・・」

『私は賑やかで良いと思いますが・・・』

「あなたは被害にあってないからそう言えるのよ」

『こっちゃんだっけ？あなたもどう？今度女子寮のお風呂に3人で仲良く』お断りします』即答かあ。つまらないな』

「お前は何をしようとしてるんだ・・・」

『普通に仲良くお風呂に入るだけよ?』

「絶対ウソ。アンタの基準はズレてるの。普通なわけないわ」

『みんなで仲良く入るのは楽しそうですけど今回の誘いは危険な香り
がします』

『そんなことないって。普通だってば』

「ほお……。どう普通か言ってもらおうか」

『まず脱いだ後に発育のチェック「おい待て」なに?』

「まず最初からおかしいだろ。何だよチェックって」

『直に触れ合うことで親密度アップ。文字通り肌で感じるの』

「誰が上手いこと言えと」

「それってイタズラしたいだけでしょ……」

『やはり最初の時点でダメですね。私は遠慮します』

『なら二人で入るしかないか』

「え……？私は嫌って言ったよね？嫌って言ったのに？」

『嫌って言ったの？そんなの記憶に無いし、入らないとは言っていないよね？答えは聞いてないけど』

「私に拒否権は無いの！？くそ……こうなったら武力行使をしてもこの天使をがぶっ！？」

テテユスは一瞬で背後に回って後頭部に手刀を放った。

リンは一撃で意識が飛ばされ倒れるが正直速すぎて見えなかったとです

『私の邪魔をするならば実力行使でぶつとばす』

「……そこまでして風呂に連れて行くのか」

『もはや拉致ですね。……ですがリンは一応私のマスターであることをお忘れなく』

『今は正当防衛よ。あと心配なんかしなくても、少し遊ぶだけだから。本人も恥ずかしいだけで嫌ではないみたいだし』

『それならおーけーです。ではごゆっくり』

「おい、そこはツッコむ所だろ……」

『それじゃあ行くわ。マスター、こうちゃん、またね』

天使は銀髪少女を抱えて女子寮まで飛んで行った

「行ったか……」

『先程のリンは散々な扱いだったような気がします』

「あれはいつもやってることだ。先に手を出すのは大抵はリンからで、テテユスはやり返してるだけ」

『なるほど……リンは気になる女子に構ってほしくてつい手を出

してしまう頭の悪い男子なんですね』

「的確な例えだな……。このことは本人には言わないように。あいつはテテユスが絡むとツンデレになる」

『男性相手ならともかく、何で女性のテテユスにツンデレになるんです？』

「あいつはテテユスが相手の場合は素直になれないみたいだからな。それと……。悪いがそろそろ休ませてくれ。これ以上起きてるのは明日に響く」

『あつ……。そこまで気が回りませんでした。すみません』

「いや、さっきまでリンが押し掛けてきてたんだからお前さんには落ち度は無いさ」

『その言葉だけで充分です。それでは……。残り少ないですが良い夜を』

「悪い……。また明日な」

「ふあ……ねむ……」

昨日は若本事件だったけれど今日も授業があるから仕方なく準備中なのだわ

『ぐっともぐにんぐですりん。昨日はどろびでしたっ。』

「おはよ……。昨日はね……」

「いや〜残念だったわね〜」

『まだあんなに人が残っていたなんて……』

「私は先に入らせてもらったけどどうするの〜？一人で行ってくる〜?」

『こんなことで私の計画が崩れるなんてえ〜!』

「おひよひよひよひよ！残念でした。じゃ、おやすみ」

『くそその笑い方腹立つわー！』

「・・・つまり行った時はまだ人がかなりいたから計画失敗ざまあ」

『いくら女神でもさすがに人前では騒げなかつたんですね。・・・それにしても眠そうですね』

「昨日はいろいろあったから疲れたの。・・・それよりもあの女は毎回毎回人の後頭部に手刀打ち込みやがって・・・」

『あの・・・リン？キャラが違いますよ？』

「あれを喰らった後はめまいとか立ちくらみがひどいのよ。何か異常があつたらどう責任取るつもりなの・・・？」

『それは大変ですね。私が強く言っておきましょう』

「んにゃ、私が直接言うからあなたは言わなくていいわ。・・・それじゃ私は行くから」

『あ、はい。じゃあ私も・・・』

さて・・・確か今日は十代達呼び出されるはずだったな

「・・・あれえ!?!」

「そのリアクション今ので5回目だぞ・・・」

昨日廃寮で若本を倒したはいいが、十代達に加えて何故俺達まで・・・

「まあいいか。そのデュエルに勝てばいいんですよ?」

「その通り、勝てれば今回の話は水に流してやる」

レッドの俺が制裁デュエルするのは問題ないが、何故かリンも同じくデュエルをすることになった。

今まで問題行動を起こしてきたからか、クロノスにとってリンは少

々邪魔らしい

「俺とリンとのタッグですよね？・・・勝てるんですか？」

制裁デュエルの相手がリンだったら俺は終わっていたかもしれない。だが、そのリンは今回俺と同じ立場で、しかもタッグの相方だ。

厄介な敵が味方になると心強いとはよく言ったものだが、今回はまさにその通りだ。

ハッキリ言ってクロノスが二人かかって来ても負ける気がしない

「いくら個人のレベルが高くても二人の息が合わないと勝ち目は無い。それがタッグデュエルな。ネ」

いや、理論としてはそれが正しいんだろうが悲しいかな現実はそのじゃないんだよな・・・。

それに長年一緒に過ごしてきた俺達の息が合わないわけがなからうに・・・

「ルールはお互いのライフを足した8000、別個のフィールドで最初のターンは攻撃できないけれど、相手の片方が空きならそちらに直接攻撃できる・・・でいいんでしたね？」

「そうなの。ドロップアウトには理解できた？」

「お互い共有なら楽だったんですがね……。一つ重要なことを確認したいんですが《手札抹殺》等のお互いに干渉するカードの裁定は？」

「その場合は全員捨ててもらおう」

「なら《墓穴の道連れ》の裁定は？あれはお互いの手札を見て捨てさせますが、誰が誰の手札を見て捨てさせるんですか？」

自分の手札には不要なカードを残せば手札交換とピーピングハンデスが出来ると優秀なカードだが誰の手札を見るのか、ジャッジの判断を仰ぐべきだろう。

以前テテユスが使ったように俺も天使に投入している。テテユスが
いれば相手の情報に手札と、莫大なアドバンテージが稼げるのだ。

クロノスは予想外な質問だったのか、暫く考え込んだ後にようやく
答えを出した

「……その場合は全員が正面のプレイヤーを選択するノーネ」

「ありがとうございます。いや、確認しとかなないと実際にやった時に困るんでね」

「採用率の低いカードを聞かれて困ったでしょ？よく変なカード使ってくるから対策がしづらいのよ」

「様々なカードの知識があることは良いことなノーネ。けれど今回のデュエルとは無関係、せいぜいあかくノーネ」

「どんな相手があるか・・・楽しみにしてますよ」

負ければ退学という端から見れば死刑宣告、当事者にとっては楽しいイベントの話が終わり、俺達は部屋を出た

『・・・それで？どのデッキでいくの？』

「タッグだからなー。お互い協力するか、各々で暴れるか」

「私は多数相手に暴れるデッキは無いんだけど・・・」

『当日は人が集まるんでしょ？まるで見世物よね・・・』

「見世物・・・？おおっ！テテユス、それだ！」

『へ？それってどれよ？』

「最初は天使でオーバーキルしようとか考えていたが、派手に魅せる戦いにする！」

『派手につて・・・』

「ぶつちやけライフは8000だから天使なら恭兄一人だけでワンキル出来るとゆう・・・」

「テテユスのドローからの大量展開もやりたいが・・・キングが本気を出したら一瞬だろう？キングのデュエルはエンターテイメントでなければならぬ！」

「あ、元キング」

「それを言うなあああ・・・最近のマイブームだ」

「それで？私はどうすればいい？」

「出来るならサポートを頼む。俺のターンの召喚時と攻撃時に敵の妨害があればそれを排除してもらいたい。それ以外は自由で」

「そうになると自然にパーミッションになってくるのよね。私パーミッションあまり好きじゃないし、私も派手にやりたいな」

「一応お前の好きにしているが、俺はとことんネタに走るからな」

「まあ私もガチで出るつもりはないけどね。相手が可哀想じゃん」

「・・・その自信が羨ましいッス」

すっかり落ち込んだ様子の翔が話かけてきた

「自信があるんじゃない。真実なだけだ」

「二人とも自分の力を過信しすぎなんじゃ・・・」

「足元をすくわれるとでも？」

「ありがたい忠告、感謝しよう。確かに最近はずかされてたかもな。だが、今のお前みたいに暗くなっていたら何事も上手くいかないぞ?」

「そう言われても無理ッスよ・・・」

「十代じゃあないが、どんな時もデュエルを楽しくやろうとすれば、自然と楽しくなるし、デッキは応えてくれる。・・・まあ俺が言えるのはここまで、後は自分の心構えだ。しっかりしなさい」

後は他の皆様が励ましてくれるだろう

「こういつ時こそ、明るく楽しくやるものよ。酷なようだけど、私達はもう行くわ」

やはりリンは当たり前前のように俺の部屋に入ってきた。

一応話すことはあったが、俺のプライバシーは守られているのだからか?

『二人とも大変ですね』

「セリフの割に何だか楽しそうじゃないの」

「いつもは戦ってばかりなのに二人のタッグなんて初めてじゃないですか」

「そもそもタッグデュエル自体滅多にやらないからな」

「それならどうです？今度私達と・・・」

「あ、ゴメン。私はパスです」

「ええっ！？なんでですか!?!」

「勝負にならないでしょ？仮に私達二人、向こう一人だけで戦っても勝てる見込みが無いのよ？それなのに二人も相手にするの。言ってる意味わかる？」

「うう・・・あえて触れないようにしてた事を言われました・・・」

「・・・お前達、過大評価しすぎじゃないか？」

「それが過大じゃないのよ。仮定だけど、二人相手にするためには公平になるように私達は4000、マスターは8000にするじゃない？その段階で彼・・・ホーリエの攻撃が通れば終わるのよ」

「そんな簡単にホーリエを召喚できるわけないじゃん。しかもモンスターや伏せもあるのに・・・」

「あなたのデツキ・・・魔轟神ならそのどちらも容易なはずよ？大寒波を発動、トライデント・ウオリアーを召喚し、クシャノを特殊召喚するだけ。そしてさらに手札にグリムロやオネストがいれば即終了・・・ね？」

「誤魔化そうとしたのになんで私の戦術を・・・」

「私が知らないとも思っただの？」

「むむう・・・確かにこれじゃあ勝負どころじゃないですね」

「気持ちは受け取っておくよ。でもタツグデュエルって言っても普段やってることとあまり変わらないんだ。味方を守ったり、守られたり、同じく相手の壁と妨害が増えるだけだ」

『今さらりと言いましたが相手のモンスターは壁扱いなんです!?!』

「普通に壁だろ?ただエアトスを出すだけで相手の姿勢が攻撃から守備に変わるんだぜえ?」

『そう容易に2500を超えられるわけがないでしょう!?!笑いなから言わないでください!』

「これを笑うなと言われても無理な相談だ。相手はエアトスを除去したり守るために罾を伏せるだろうが、俺のデッキには伏せ除去やお触れが入っている。そして轟龍やオネストまでいたらもう本当に笑うしかない」

『伏せ除去、罾封じに大型のオンパレードですか。えげつない・・・』

「まあエアトスはただの例えだが、大抵俺の場にいるのはテテユスだぞ?ほら、攻撃も2400に下がってる」

『100しか違いはありませんし、むしろ女神テテユスが一番厄介な存在です!しかも戦闘ではオネストに対応して余計に処理しづらいでしょう!?!?』

「ちよつと、本人に聞こえてるわよ」

「まあ引きにもよるが俺のテテユスを処理できなかった時点で相手の勝ち目は無くなるからなあ」

「ドローフェイズに悪夢が始まるんですね・・・」

「手札交換系があれば出したターンでもすぐに加速するかな。お触れや宣告者を引けばほぼ勝ちと言ってもいいくらいに」

「そつえば宣告者は各種何枚積みしてるんですか？」

「本来なら各種三枚ずつがいいんだろうが、俺の場合は緑光が二枚、朱光が三枚だ。紫光はお触れを使っているし、デッキ枚数が40枚より多くなるから入れてないな」

「女神テテユスがいれば枚数は関係ないのでは？」

「それもそうだが、やはり初手に来る確率を上げたい。それにホイホイと無駄にカードを詰め込んだだけでは勝てないし、そのせいで必要なカードがこない恐れがある」

「そう言ってるけど恭兄って計算してデッキを作ってる気がしないんだよね・・・」

「前にも言ったが、俺は使いたいカードがあればそれを元にシナジ―するカードを探してデッキを組む。天使ならテテユス、魔法使いデッキなら水属性や氷結界を中心に。でも確かにバランスとかはあまり考えないな」

「そんな理由で作られるデッキだけど私が考え抜いて作ったデッキと同等以上で、しかも無駄に完成度が高いのが悔しい」

『そういえば天使族なら《光神化》と《地獄の暴走召喚》のコンボはどうです？《アテナ》を暴走させればバーンで勝てますし』

「いや・・・勝つのも大事だが、その過程や、楽しくやれたかどうかが大それたと思う。暴走召喚は確かに強力だが決まれば本当に一瞬だし、楽しくないから俺はここでやる気は無いよ」

『楽しむ・・・。そうですね』

「それに俺は安定した強さよりも、不安定ながらも爆発力がある方が好きだな。テテユスの効果はそういった意味では最高だ。次のドロ―で望んだカードが来るかどうかの緊張感がたまらない」

「手札に欲しいカードが無くても手札交換で無理矢理加えるくせに・
」

『恨めしく言うあたり、相当暴れてたみたいね』

「・・・さて、俺は少し出掛けるかな」

『へ・・・？いきなりどこに行くの？』

「デッキに足りないカードがあるから三沢博士にでもトレードして
もらおうかと」

「あいつか・・・。なら私もデッキを調整するから帰るね。こっち
ゃん行くよ!」

『あ、はい！それでは失礼します』

二人は出掛けようとしていた俺よりも早く帰って行った

「・・・やっぱりな」

『どうしたの?』

「リンのやつ、会話中妙にそわそわしてて落ち着きなかったんだ」

『トイレじゃないの?』

「アホか。．．あいつも言ってた通り、デツキを調整したかったんだろ」

『調整ならどこでもできるじゃないの』

「タッグに向けての面白いネタが思い付いたんだと思う。そういうところはサプライズとして黙っているからな。俺もそっちの方が面白いし」

『ネタねえ．．．。制裁とか言われてるのに本当に楽しそうね』

「言っただろっ? 楽しむと。キングのデュエルはエンターテイメントでなければならぬ!」

『さつきから思ってたけどそのキングって誰のこと？』

「キングはキングだ。ニューキングもいるが、俺は元キング派だ」

『全然答えになってないじゃないの』

「キングと言えば元キング以外に誰がいる！？・・・ええい！貴様のせいでテンションが上がってしまったではないか！」

『ええ！？私のせいなの！？』

「周りから見たら確実に不審者扱いされるだろうが！どう責任取るつもりだ！」

『じゃあその高ぶったテンションと勢いそのまま私と合体』だが断る
！「まさかの即答！？』

「仕方ない！このまま出掛けるとしよう！」

『じゃあ私も』お留守番「ぶ〜ぶ〜」

「しばらくは帰って来ないが頼んだぞ！・・・キングは一人、この俺だああああ！」

ボタン

『・・・本当にあのまま行っちゃったわ・・・』

大丈夫かしら・・・？警備員的な意味で

「いやゝすまないな！いきなり押し掛けるようになってしまった！」

「別に良いんだが・・・そのテンションはどうした？」

「部屋を出る前にキングの話題で盛り上がってしまったってな！仕方ないからそのまま来たんだ」

「・・・大丈夫だったのか？」

「話かけて来た警備員さんその他諸々には俺がキングの良さを語り

尽くしてやった！もう奴らは完全なキング信者、崇拜者だ！お前も
どうだ！？？」

「・・・悪いが遠慮させてもらおう」

「三沢・・・お前とはキングを語り合えると信じていたのに！」

「いや・・・その前にキングって誰だ？」

「ああ・・・キングすら知らないとは・・・。見ろ、お前のせいで
テンションが下がってしまった・・・俺はどうすればいい？」

「その前に用件は何だ？」

「おおっ！そうだった。キングに夢中で危うく忘れるところだった」

「一番大事なことを忘れるなよ・・・。それで？どんな用なんだ？」

「いや、実はデッキに入りたいカードが足りなくてな。三沢さえ良
ければ交換してほしいんだ」

「俺も持っているかはわからないが・・・何のカードだ？」

「《二重召喚》だ。二枚ほどあれば譲ってほしい」

「そのカードなら俺も持っていたはずだな・・・。探してみよう」

「おう。よろしく頼む」

ガサゴソ・・・なかはゴミばかり

「ちらちら・・・。見つかったぞ、これだろ？」

ガサゴソ・・・おっ！スイッチをみつけた！おしてみますか？

「ポチツとな。いやゝ助かったよ」

「聞くだけならメールで済むのにわざわざ来るなんてな・・・。もし見つからなかったらどうしてたんだ？」

「無事に見つかったんだから気にするなって。それで俺が出せるカードだが・・・」

「いや、別にこのカードならタダで譲っても構わない」

「そう言うなよ。俺の今の手持ちはたいしたものじゃないんだが、迷惑じゃないなら貰ってくれ。というか受け取れ。むしろ使え」

「まあ・・・そこまで言うならありがたく頂くとしよう」

「よく言った！そういうことでこれを使え。デッキに入れろ。というかデッキを渡せ。改造させろ！」

「いきなり何を言い出すんだ！？これは俺が緻密な・・・」

「ええい黙れ！お前の計算云々はどうでもいい！お前がいきなり知らないカードを扱えるわけがないだろう！？」

「なに・・・？知らないカードだと？」

「お前に渡すこのカードはどれもお前が知らないカードばかりだ。
・

「まあ一度だけイエローナンバーワン様に任せる。このカードを
できるだけ多く入れてデッキを作ってみてくれ。一からでも、今あ
るデッキに入れるだけでも、それは自由だ。・・・少々勝手だが、
さすがに長居するのは迷惑になるから俺はこれで帰る。これは明日
までの宿題だぞ？わかったな！」

「んな無茶な・・・」

バタン。

反論しようとしたら時既に遅し。まったくあの兄妹は・・・。

それにしても俺の知らないカードか・・・

「興味が湧かないわけではないからな。さて・・・」

まずは効果を把握してモノにしてみるか・・・

「・・・まさかまたこれを手にする時が来るとはね」

『そのデッキがどうかしたんです？』

「何でもないわ。・・・言われた通りカウンターでも積んでみましょ」

入れ替える枚数を最低限に、かつこのデッキで自分がやりたいことを・・・

『モンスターの比率が少ないですね。大丈夫なんです？』

「大丈夫かどうかを何回も試して確かめるんじゃない。・・・テストデュエルよ！あなたはこのデッキを使って！」

『これは・・・？』

「私のデッキよ。それには防御カードがたくさん積んであるから、ただ攻めてくるよりもテストにはもってこいでしょ？あと言うっておくけど休みは無しょ。今日は寝ないつもりでやりなさい！」

『は、はい！』

「『デュエル！！』」

『どつだったの〜?』

「ちゃんと貰えて、三沢にカードを渡せてと収穫たっぷりだ」

『いや・・・警備員は?』

「警備員さんその他もろもろには俺がキングの良さを熱く語って以下略」

『あまり聞きたくないケド・・・それで?』

「キングの信者・・・いや、ファンになった。もはや万丈目サンダーなど敵ではないわ!」

『競ってびじするのよ』

「あと三沢にはデッキを組むように言っておいた。初めて見るカードだらつからアイツもやる気はあるだらつ」

『それで・・・そのデッキは強いのか?』

「きちんと組めばなかなかだが・・・俺は相手にしたくはない」

『それって・・・要するにメタデッキ?』

「少なくとも十代には刺さらないだろう。・・・だが下手をすれば俺とリンのほとんどのデッキは壊滅的になる」

『そんなもの渡して良かったのか?』

「自分が不利になるからとか言ったらつまらないだろう?むしろその方が緊張感が出るし、誰かに使ってもらった方がカードにもいい」

『このことはあの子には・・・?』

「リンには当然言っていない。渡したカードは一応全種類だが、強いデッキを組めるかどうかは三沢次第ってわけだ」

『もし授業でそのデッキと戦うことになったら?』

「当然全力で迎え撃つ。むしろ明日は自分からデュエルを申し込むつもりだ。その時は・・・力を貸してくれ」

『そんなの当然でしょう？私のマスターは誰なの？ってね』

「三沢と引き次第では完封されるかもな。・・・だが、負けるとわかって戦うほど俺は愚かでもマゾでもないからな。・・・お前も明日は覚悟しておけよ。何回吹き飛ばされるかわからんぞ」

『私なら並大抵のマスターにはやられないから平気よ』

「世の中戦闘力が全てではないってことさ・・・。俺はもう寝る。また明日、よろしくな」

『今日は早いのね・・・。なら私も戻るね。おやすみなさい、マイマスター』

明かりを消して布団に潜りこむ

・・・今日は久しぶりに平穏な夜だった気がする

翌朝、俺は人気の無い所に三沢を呼び出した。

別に告白でもウホッ！的な意味ではない。デュエルを申し込むためだ

「朝から悪いな……。お前のデッキを試させてもらおう」

「最善は尽したがあまり時間が無かったからな……」

「それでも形にはなっているんだろう？それだけで充分、後は俺がアドバイスしてやるう。……お前的にデッキを作っててどうだったんだ？」

「個々の能力が高くて驚いたな。もう少し時間があればもっと良くできたと思う」

「それは興味を持って組んでいたってことだな？……だとしたら渡した甲斐があったってもんだ」

「俺なんかじゃなくて自分で組んだ方が良かったんじゃないか？」

「俺には合わなかったんだ。それに俺達で独占するんじゃないかって、ここにいる誰かに使ってほしかった。……じゃあ始めようか」

「ああ。そろそろお前から白星を取ってやるよ」

「それはお前の構築次第だな……。いくぞ！」

「デュエル!!」

第十九話「制裁へ…」（後書き）

次回予告

ついに三沢改造計画始動！

生まれ変わった空気男の実力は…！？

…という感じでいこうかと思えます。

それほどガチなデッキは使わせません。

ピンポイントシュートで遊星のエフェクト・ヴェーラーを撃ち抜いたロットンの如く、ピンポイントでのメタです。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7978k/>

遊戯王～光の御使い達～

2010年10月9日00時07分発行